

目 次

☆ 発刊に際して	1
I. 調査研究実施の概要	
1. 調査研究の趣旨	5
2. 調査研究の背景	5
3. 調査研究の目的と内容	5
4. 調査研究（アンケート調査）方法	6
II. 調査研究の結果の概要	
(1) 自立の基礎の形成と生活科について	7
(2) 生活科を通して子どもに育った能力や態度について	9
(3) 指導の内容や方法について	10
(4) 内容と学習活動について	11
(5) 幼稚園との接続について	13
(6) 保護者・地域との連携について	14
III. 幼稚園保護者の子どもの生活に対する意識	
□ 調査研究結果の概要	16
1. 生活の自立について	
(1) 基本的な生活習慣	18
(2) まとめ	21
2. 遊び・友だちについて	
(1) 家の中での遊び	22
(2) 降園後の遊び	22
(3) テレビ・ビデオ・ゲーム機での遊び	24
(4) まとめ	25
3. 興味・関心の広がり	
(1) 動く、見聞きする、作る	26
(2) 動植物の飼育・栽培	28
(3) まとめ	29
4. 言葉について	
(1) 聞く・話す	30
(2) まとめ	31
5. 自我形成の基礎	
(1) 留守番や手伝い	32
(2) 精神的な自立	33
(3) まとめ	34
6. 子どもの生活に対する意識のまとめと提言	35

IV. 生活科の学習に対する保護者の意識

□ 調査研究結果の概要	38
1. 子どもの生活の実態	
(1) 生活の自立の実態	43
(2) 学習の自立の実態	49
(3) 精神的自立の実態	56
(4) まとめ	62
2. 子どもたちの行動についての保護者の考え	
(1) 許せないこと	63
(2) 伸ばしてほしいこと	67
(3) まとめ	76
3. 生活科についての保護者のとらえ方	
(1) 生活科に対する保護者の状況	78
(2) 生活科の学習で必要と考える内容	80
(3) 生活科の学習に期待すること	83
4. 保護者の意識のまとめ	
(1) 子どもの生活と生活科のかかわり	84
(2) 保護者・学校・生活科のかかわり	84
(3) これからの生活科	85

V. 生活科の学習に対する教師の意識

□ 調査研究の結果の概要	86
1. 生活科の目標や評価に対する考え方	
(1) 自立に対する意識	87
(2) 生活科で育つ力	89
(3) 教師の指導観	90
(4) 学習の生活化	91
(5) まとめ	92
2. 教材に対する考え方	
(1) 指導内容選択のよりどころ	93
(2) 教材選択の視点	95
(3) 教材の適否	95
(4) 子どもの教材選択	97
(5) 教材の準備	98
(6) 教科書の活用状況	99
(7) 子どもの教科書への関心	99
(8) まとめ	100
3. 生活科の活動や体験に対する意識	
(1) 活動や体験の程度	101
(2) 活動や体験の適否	105
(3) まとめ	107

4. 家庭の協力と生活科の啓発	
(1) 家庭への協力の内容	108
(2) 生活科の啓発	109
(3) 家庭の協力の程度	109
(4) まとめ	109
5. 自由記述の内容とその考察	110
6. 教師の意識のまとめ	
(1) 自立の基礎の育成を重視した生活科の取り組み	117
(2) 家庭や地域との連携	118
(3) 教師のアンケートから見たこれからの生活科のあり方	118

VI. 資料

□ アンケート用紙	121
-----------	-----

I 調査研究実施の概要

1. 調査研究の趣旨

生活科が、新しい教科として新設され、完全実施に移されて6年が経過している。この新教科が、今日の子どもたちの発達課題の解決を目指して新設された経過を考え合わせると、この教科が家庭や地域で市民権を得ることが何よりも重要なことである。また、学校週五日制が実施に移されたことも、今日の子どもたちの発達課題を考えてのことである。

一方、今日の子どもたちの状況を改善していくためには、学校と家庭・地域との連携を抜きにしては考えられない課題が山積している。第15期中央教育審議会の答申でも、このことを強く主張しているところである。

そこで、新教科である生活科の実施状況について、学校（教師）と家庭（子どもと保護者）に焦点を置き、生活科の学習を通しての「子どもの自立」という観点から、教師や保護者の生活科に対する意識、ならびに、子どもの育ちに対する意識を明らかにしようとするものである。

2. 調査研究の背景

生活科は、子どもたちの「自立の基礎を養う」ことを教科の目標にして、新しく誕生した教科である。この教科では、子どもたちの「自立の基礎」を養うために、「活動や体験」を学習活動の中心にして「自分自身や自分について考える」ことを目指している。すなわち、この教科では、自ら自然や社会とかかわりながら学習したことの「生活化」が中心の課題であり、「自己実現型人間」の育成を目指していると言える。

しかし、今日の子どもたちの学校や家庭における生活行動は、人間関係の希薄さ、実体験の不足、生活の多忙化、目的意識の欠如、遊びの変化等々が要因となって、「自立できない子ども」として大きな社会問題となっている。生活科は、まさにこうした子どもたちの生活行動の改善を目指して新設された教科である。

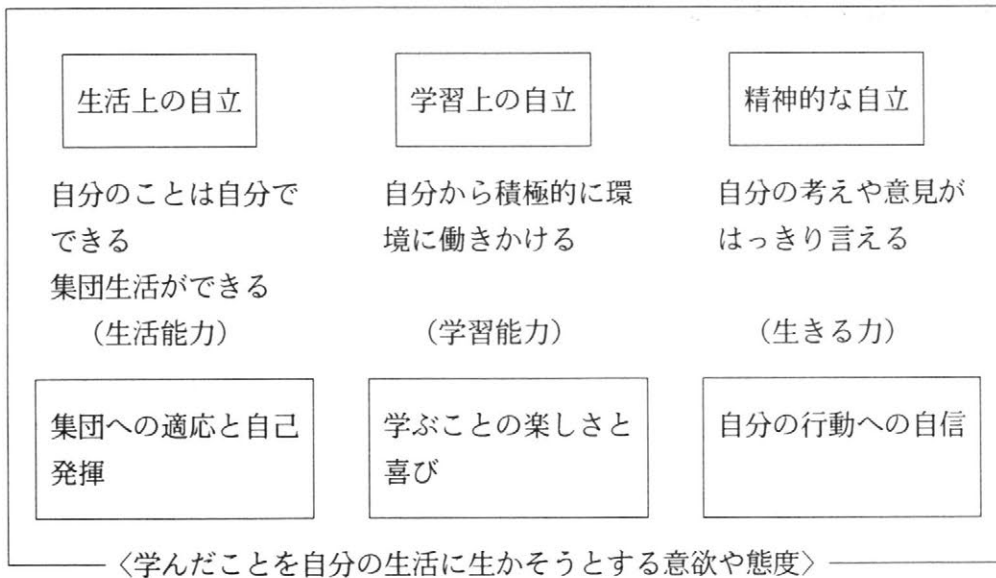
一方、「学校週五日制」も、子どもたちの「自立的な生活行動」、すなわち、「生きる力」を支援し、学校外生活の充実改善を目指してすでに実施に移されている。現在の月2回から、完全週五日制への移行も、2002年からと、すでに決定している。

このように、今日の子どもたちの成長・発達にかかわる教育は、家庭や地域社会の教育を充実させ、学校教育との分担・連携を図りながら、子どもたちの「生きる力」の育成が最大の課題である。

3. 調査研究の目的と内容

- (1) 今の子どもたちの育ちの状況を「生活の自立」「学習の自立」「精神的な自立」の3点から明らかにすること
- (2) 幼稚園児、ならびに、小学校低学年児の育ちの実態を把握すること
- (3) 生活科の目標と内容が、どのように実施されているかを明らかにすること
- (4) 生活科に対する教師と保護者の意識と、これからの生活科の実施内容に関する意識の実態を把握すること
- (5) 「子どもの自立」を支援していく指導法や教材のあり方を明らかにすること

なお、本調査研究では、「自立の基礎」を以下のように捉えて実施したものである。



4. 調査研究（アンケート調査）の方法

(1) 調査対象

- ・生活科を実践経験している教諭（全国から抽出による）
- ・東京都内幼稚園の年長児保護者
- ・全日本家庭教育研究会会員（現1・2年児童を持つ保護者）

(2) 調査依頼の方法

- ・生活科実践経験者については、本調査研究委員からの直接依頼および全日本家庭教育研究会支部からの依頼
- ・幼稚園保護者については、本調査研究委員からの園を通しての依頼
- ・全日本家庭教育研究会の会員については、全国支部を通しての依頼

(3) 調査の方法

- ・別紙アンケート調査用紙による質問紙法ならびに自由記述

(4) 調査期間

- ・平成9年8月1日から9月30日まで

(5) 回収数および回収率

・生活科実践経験者	260人	(70%)	370
・幼稚園保護者	826人	(45%)	1850
・全日本家庭教育研究会会員	779人	(42%)	1850

II 調査研究の結果の概要

生活科が全面実施されて6年が過ぎようとしている。ここでは、アンケート調査の結果を基に、生活科のカリキュラムの改善の方向を探ってみたい。カリキュラムの改善について考える場合、その教科の目標を達成する教育内容がどの程度機能しているか、内容面の検討と、それを実現する教育計画や指導方法、環境整備などの面からとらえることができる。ここでは、アンケート調査を基に、保護者及び生活科を担当している教師の意識から、主に生活科の目指している「ねらい」の達成度に着目して考察する。子どもの生活能力や態度の形成については、単純に生活科の影響だけと考えるわけにはいかない面もあるが、傾向として押さえることはできるものと考えている。

(1) 自立の基礎の形成と生活科について

生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」とある。生活科の目標は、究極には自立への基礎を養うことである。

また、小学校指導書生活編（10・11ページ）では、「自立とは、単なる生活習慣上の自立にとどまるものではなく、学習上の自立であり、精神的な自立である」とし、自立の基礎として小学校低学年で身に付けたいものとして、集団生活ができるようになること、自分のことは自分でできるようになること、自己を表出するとともに他を受容することができること、環境に積極的に働き掛けることができることの4つを上げている。

このような生活科の趣旨を踏まえ、本研究では、学習指導要領に示されている内容との関連を考え、自立の内容を生活の自立、学習の自立、精神的自立の3つに分けて整理し、それぞれについて10項目の設問を設定した。そして、保護者に対して、「・・・ができますか」という設問を行った。それぞれの項目についての結果と分析については、16ページ以降に詳しく掲載してあるが、ここではこれらを肯定的度合いの高い順（できると大体できるを合わせた数値%）に並べ替えてみた。

表1 子どもの自立についての保護者の意識

生活の自立	
1 道を歩くとき交通ルールを守る	97.7%
2 マナーを守って児童館や公園を利用する	96.9
3 自分で電話をして必要なことを伝えたり聞いたりする	89.7
4 自分の言いたいことや必要なことをきちんと表現する	89.2
5 自分の住む地域の行事や催し物に参加する	86.8
6 近所の人に挨拶や返事ができる	85.8
7 自分で使った物の後片付けができる	72.0
8 必要な文房具等を自分で買いに行く	63.1
9 家事のいくつかを責任をもってやる	43.9
10 一人一人が電車やバスを利用して近くの目的地に行く	10.7

学習の自立

1	疑問や分からないことを親に聞いたりする	94.1%
2	身近な草花や小動物などを大切に作る	93.4
3	興味や関心のあることに夢中で取り組んでいる	91.2
4	学習に必要な物を自分から準備できる	86.7
5	教科書以外のいろいろな本を読んでいる	82.4
6	自分から遊びや生活に使う物を作ることができる	79.4
7	分からないことや疑問を自分で解決しようとする	71.8
8	近くの図書館や児童館を利用している	57.2
9	身近にあるお店や近所の人に自分から声をかける	51.2
10	宿題がなくても勉強する習慣が身に付いている	49.8

精神的自立

1	してよいことといけないことの判断ができる	97.0%
2	自分より小さい子やお年寄りに親切にできる	92.9
3	与えられたことは責任をもってやることができる	90.2
4	人や友達に惑わされないで自分の考えをもって行動する	85.2
5	主張するだけでなく他人の意見や考えを受け入れる	82.0
6	自分のわがままを押さえて行動できる	75.2
7	自分のしたことを反省しそれを直そうと努力する	72.9
8	困ったことに会ったとき（自分で頑張る+やっけてから助ける）	72.4
9	友達やまわりの人のよさを話す	67.8
10	自分のよいところや得意なことに気付いている	66.6

全体を見渡して、得られた数値の最高が98%、最低が11%とばらつきがあるものの生活科のねらいである自立の基礎の形成については、概ね達成されているとみてよいであろう。

しかし、低い数値の項目として、生活の自立の面では、「家事のいくつかを責任をもってやる」「一人一人が電車やバスを利用して近くの目的地に行く」が上げられる。

学習の自立の面では、「近くの図書館や児童館を利用している」「身近にあるお店や近所の人に自分から声をかける」「宿題がなくても勉強する習慣が身に付いている」が、精神的自立の面では、「友達やまわりの人のよさを話す」「自分のよいところや得意なことに気付いている」が低い数値となっている。

家での手伝いや家庭での勉強の習慣などは、すぐに身に付くものではなく、生活科が創設される以前から課題とされてきた内容と思われるが、これらについて、今後、一層の検討が必要である。これらの中でも、特に、「自分のよいところや得意なことに気付いている」が全体に比べて低いことが気になる。生活科では自分のよさに気づき自信をもって活動できるようになることが大きなねらいでもある。実際の授業でも、自分や友達のよさを伸ばすということが重視されてきたが（表5では教師が授業で大切にしていることの上位に上げられている）、この具体化に向けた努力を続けていく必要がある。

そのため、自分のよさを発揮する場面や機会を意図的に組織したり、自信をもって活動に取り組むよう助言や支持の在り方等、支援の在り方を更に充実していく必要がある。

一方この結果と関係して、教師に対して、「あなたは、生活科の目標である、自立の基礎はどんなことであると考えていますか」という設問（複数回答）に対する結果は次の通りである。

表2 自立の基礎についての教師の意識

1	自然や社会に積極的にかかわる意欲や関心をもつ	72.2%
2	共に遊び共に学んでよりよい生活ができる	67.6
3	自分の考えや意見をはっきりと言える	64.1
4	集団や社会の一員として集団生活ができる	59.8
5	自分の意思を人に伝えることができる	58.7
6	活発に体を動かし心を働かせて働きかける	56.4
7	日常生活に必要な生活習慣が身についている	38.6
8	日常生活に必要な技能が身についている	34.0
9	人の話を聞くことができる	25.5
10	仲間意識帰属意識をもつ	22.0

この結果から教師は、学習対象への意欲や関心、集団生活、意思伝達を自立の基礎として重視しているが、日常生活に必要な生活習慣や技能、人の話を聞くなどについてはそれほど意識が向いていない傾向があることが分かる。このことが、表1の生活、学習両方の低い項目と関係していると思われる。

人の話をしっかりと聞くということは、「自分の考えや意見をはっきりと言える」と同じようにコミュニケーション能力を身に付け自立の基礎につながる極めて重要な側面である。回りの人への気遣いや思いやりについての指導も一層目を向けていくことが大切である。

(2) 生活科を通して子どもに育った能力や態度について

次に、教師に対して、「生活科の指導を通して子どもたちにどのような能力が培われたか」複数回答で答えた結果を、これも高い割合の項目から示すと次のようになる。

表3 生活科を通して子どもに育った能力や資質（教師対象）

1	興味・関心	64.1%
2	行動力	59.8
3	自発性	50.2
4	表現力	47.9
5	社会性	45.9
6	協調性	45.2
7	生活学習意欲	44.8
8	創造力	35.5
9	企画力	27.4
10	判断力	21.2
11	思考力	19.7
12	持続力	10.8
13	集中力	10.4
14	選択力	8.9
15	自制心	3.1
16	その他	0.4

最大5つまで選択できるようにしたが、全体として最高の数値でも64%とやや低い結果となっている。その中でも、興味・関心、行動力、自発性、表現力等が上位として上げられ、持続力、選択力、自制心等が下位となっている。

興味・関心、表現力など上位の項目は保護者の肯定的回答とも符号するが、集中力、自制心等については保護者の見方と違っているようにも見受けられる。

生活科では、子ども自らの対象についての興味・関心、気付きを大切に、自発的、積極的な学習態度の育成を重視しているが、そのことがこの結果にも現れていると思われる。

しかし、この結果から、興味・関心、行動力が養われてきているとする一方で、思考力、持続力、集中力などがそれらと連動して働いていない、あるいは身に付いていないということが考えられる。自分のことを自分で判断し、適切に行動

していくという自立の基礎を培っていくためには、思考力、持続力、集中力、選択力、自制心の育成も大切な側面である。低学年の特徴として、思考と活動が未分化であるというのが上げられるが、調和のとれた発達を促す指導の充実を図ることが今後の課題である。

また、このような結果は、生活科の授業が単なる活動に終始しそれによって何が身に付いているのかという指摘が一部にある中で、学習や活動の質を高めるにはどういったことに着目すればよいか、その手掛かりを示しているようにも思われる。

すなわち、子どもが生活科の学習において、じっくりとそして絶えず新鮮な目をもって対象物や自分自身と向き合い、かかわりの対象についての気付きを深めたり広げたりするよう、学習の展開や指導の工夫をしていくことが大切である。

生活科のねらいである自立の基礎の形成については、保護者は概ね達成しているとみているが、教師についての意識から（保護者と同じ設問ではないが）自立の形成と関係して自制心、集中力、持続力、思考力の育成を図ることが重要な課題である。

(3) 指導の内容や方法について

① 教師の取り組み等の実態から

まず、実態についてみる。教師に対して、「あなたは、生活科の学習で次のような活動や体験はどの程度やっていますか」について、「よくやる」という数値の高い項目順に並べると次のようになる。

表4 生活科の取り組みの実態（教師対象）

	よくやる	ときどきやる	あまりやらない	やらない
①動植物を飼育する活動	85.3	12.0	2.0	0.4
②製作活動	76.3	22.6	1.0	0.2
③地域の公園や野原で遊ぶ活動	56.2	38.4	4.0	0.8
④町の中を探検する活動	43.2	48.3	5.8	2.7
⑤地域の店や公共施設を尋ねる活動	24.0	64.0	10.5	1.6
⑥手紙や電話を使った活動	23.5	51.0	19.6	5.9
⑦地域の人とのかかわりを深める活動	20.1	52.1	20.1	7.7
⑧乗物を利用する活動	17.1	51.8	21.8	9.3
⑨年上の人とかかわる活動	15.2	52.9	23.0	8.9
⑩幼稚園や保育園とかかわる活動	5.0	29.1	28.3	37.6
⑪地域の行事などに参加する活動	4.3	23.3	36.8	35.7
⑫その他	記入あり	0.8		

表4からは、教師がよく取り組んでいる内容としては、動植物を飼育する活動、製作活動、地域の公園や野原で遊ぶ活動、町の中を探検する活動が、また、それほどやられていない内容としては、年上の人とかかわる活動、幼稚園や保育園とかかわる活動、地域の行事などに参加する活動が上げられる。

高齢・少子化の時代を向かえ様々な人々との交流を通して、人とかかわって生きることの大切さや喜びに気付くことが叫ばれている。また、生活科においては、学校から地域社会へと子どもが生きていく上での生活基盤の充実、拡大が求められている。学校や地域社会の実態を再度見つめ直し、生活

科の授業の中で人とかかわる力を付けていく必要がある。このため、地域の自然や施設を教材として積極的に活用するとともに、家庭、地域の人々を子どもの学習の支援者、協力者として位置づけ積極的に活用していく必要がある。その際、まず教師が地域の実態をよく知ることが重要であり、生活科創設のときのような教師自身による地域マップなどの作成、その改訂作業が是非とも必要である。

② 教師の授業に対する意識から

表5は、教師が生活科の授業で大切にしていることについての設問の結果をまとめたものである。

表5 教師が生活科の授業で大切にしていること

1	自信を与える	61.2%
2	かかわりを深める	60.0
3	よさを認め合う	57.7
4	自分らしさの発揮	53.5
5	めあてをもつ	41.2
6	表現活動	37.7
7	時間を弾力的に	33.1
8	感性を育てる	31.9
9	できることを増やす	29.6
10	意見発言を大切に	26.2
11	合科的指導	21.9
12	挑戦意欲	19.6
13	自分のことは自分で	18.8
14	自己評価	6.5

この結果から、子どもに自信を与え、学習対象とのかかわりを深め、互いのよさに気付くようにし、表現活動を重視する指導を通して、先の教師の興味・関心、自発性行動力が培われてきているという意識となって表れていると考えることができる。

しかし、自立の形成という面から考えると挑戦意欲や自分のことは自分でできるようにするなど低い数値となっている。まず自分のことや、自分でやれることにじっくりかかわるようにしていくことが重要である。また、先の教師の自立の基礎についてのとらえ方と関連して、日常生活に必要な生活習慣や技能についての指導をさらに重視していく必要がある。

また、合科的指導への意識が低いという結果（学習形態の工夫では合科的指導がされているという結果もあるが）にも注目しなければならない。生活科の学習活動は、図画工作や音楽、国語、道徳、特別活動等との関連が深い。例

えば、表現活動における国語の作文指導、社会性を身に付ける上での道徳の指導との関連などがある。教科等との内容についての関連や学び方との関連についての研究を更に深め、指導の効果や充実を図っていく必要がある。次期の教育課程の改定では、自ら課題を見つけ、よりよく課題を解決する資質や能力の育成を図る力を育成するという視点に立って、第3学年から「総合的な学習」（仮称）が設置されることが教育課程審議会中間まとめで示された。そこでの学習は、知識内容を教え込むのではなく、情報の集め方や調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方などの学び方を学ぶことを重視している。

このようなことから、生活科においても今から合科的な学習について、そのカリキュラムの作り方、子ども主体の学習活動を支える教師の在り方、指導の方法等について十分に実践的な研究を積み重ねておくことが大切である。

(4) 内容と学習活動について

第15期中央教育審議会答申による「ゆとりある教育環境の中で生きる力の育成」の実現を目指し、教育課程審議会中間まとめ（平成9年11月）では、教育課程の基準の改善の方向を示すとともに、各教科等の内容の厳選が示されている。その中で生活科については、授業時数の縮減は示されておらず、「各学年において、重点的・弾力的な指導が行われるよう、目標と内容を2学年まとめて示す」とある。

他の教科と比べて指摘事項がないからといって満足するのではなく、生活科の充実発展のために、

地域や児童の実態に応じて多様な活動や体験が一層展開できるよう、そして各学校が創意ある教育活動を展開するという観点に立って、これまでの学習内容について吟味検討することが大切である。

次の表は、生活科の活動についての教師の意見をまとめたものである。

表6 活動についての教師の意見

	適切	適切でない	どちらとも
①動植物を飼育する活動	93.4 %	0.8 %	5.9 %
②自分の家での仕事を増やす活動	72.4	4.3	23.3
③近所の店で買い物をする活動	61.5	5.8	32.7
④健康安全に関する活動	69.5	1.2	29.3
⑤「〇〇祭り」をする活動	53.9	10.2	35.9
⑥乗物に乗って〇〇に行く活動	53.7	10.1	36.2
⑦料理を作る活動	42.6	8.2	49.2

また、保護者の「生活科の学習に次の内容は必要と思いますか」については、次のような結果が得られている。

表7 生活科の学習内容についての意見

	どうしても必要	まあまあ	あまり	全く
①小動物の飼育	55.1 %	43.5 %	1.0 %	0.4 %
②植物の栽培	50.6	48.9	0.4	0.1
③電車やバスの利用	44.7	43.8	10.6	0.9
④近所の店での買い物	42.6	45.0	11.5	0.9
⑤自分の靴洗いや食器洗い	42.2	45.8	11.2	0.8
⑥簡単な料理	30.4	56.4	12.4	0.8

調査では、自分の成長や自分自身についての項目が抜け落ちているのだが、これらの結果から、教師があまり取り組んでいない活動としては、特に、幼稚園や保育園とのかかわる活動、地域の行事などに参加する活動が上げられる。また、「〇〇祭り」をする活動、乗物に乗って〇〇に行く活動、料理を作る活動については、他の活動に比べて教師は生活科の内容として疑問をもっていることが分かる。保護者の意識としても、簡単な料理については、他の活動に比べて「どうしても必要」という割合が低くなる。

幼稚園や保育園とかかわる活動、地域の行事などに参加する活動が低い結果となっているのは、活動として取り上げたくてもそういう環境や条件が整っていないということも考えられる。

「〇〇祭り」をする活動、乗物に乗って〇〇に行く活動、料理を作る活動について、適切でないとする否定的な回答が見られることは、学校と家庭との役割の明確化という観点から捉えなおしてみる必要があることを示しているように思われる。なお、料理については生活科の内容として学習指導要領には明示されていない。自分たちで育てた野菜などを使って学習活動の一部として取り上げているのが実情である。子ども自身の意識の必然性、何のためにやるのか、それをやってどういう自己実現に結びつくのかということがないままに行われ、結果として料理活動となっていることであれば確かに問題であろう。また、乗物についてはその活動において何を育てようとしているのか、活動の意味付けの問題があるように思われる。こうしたことから、生活科においては、自立の中身、それにふさ

わしい活動、そして自立につながる効果的指導とが一体となりうるかという観点で活動を組織することが極めて重要なことが分かる。このことは、他の活動についても支持されているからといって満足するのではなく同様な吟味が絶えず必要である。

(5) 幼稚園との接続について

① 自立の基礎との関連

小学校の児童についてと同じ内容の設問方法をとっていないが、自立に関係ある保護者の回答を整理すると、次のような結果になる。

表8 幼児の生活の自立

注) いずれも選択肢の最高の値をとってある(例えば、よくある、ある、ないの3肢の場合はよくあるの値である)

・食事は	自分でできる	93.8%
・夢中で遊ぶことは	ある	83.2
・簡単なお使いができるか	できる	80.8
・留守番ができるか	できる	73.7
・必要なことが言えるか	言える	65.5
・あいさつは	自分からする	62.0
・何でもやってみようとするか	する	57.8
・不思議に思ったことを聞くか	よく聞く	56.2
・欲しい物をがまんできるか	できる	43.9
・絵本などを一人で見るか	よくみる	40.9
・交通ルールを守るか	よく守る	37.3
・朝一人で起きるか	いつも一人で起きる	28.6
・登園の支度や始末	自分でできる	27.1
・洗面、歯磨きは	自分でできる	25.2
・遊んだ後の片付け	自分でできる	16.3

これらを検討すると、食事を除く基本的な生活習慣についての項目が低い結果となっている。設問の形式が同じでないので、表1の小学校の結果と単純には比較できないが、小学校の方が達成度が高い項目が多い。このことから、生活科の学習効果があったと考えることもできよう。

しかし、以下のものについては、「できる」だけで見ると、幼児と小学生では特徴的な結果が出ている。

生活の自立	・「後片付け」	幼児	16.2	小学生	18.2
	・「お使い 買物」		80.1		34.1
	・「手伝い 家事」		21.8		13.2
精神的な自立	・「困ったことに会ったとき」		12.2		9.3
	・「がまん 我儘を押さえる」		43.9		14.0
	・「していけないことの反省」		42.1		16.1

結果としての数字は、自分の子に対する保護者の評価尺度の違いが考えられるが、「自立」という観点からは考えさせられるものがある。生活の自立については、後片付け等で保護者の手出しの傾向

が見られるし、手伝い等では、あまりやらせていない現実があるようである。また、精神的な自立については、特に、困ったことに会ったとき、保護者の口出しの傾向が強いように感じられる。小学生の場合の数字が低くなっている他の項目は、保護者の評価の厳しさとともに、わが子に対しての甘さがあるのではなかろうか。精神的自立のおくれが社会問題化しているが、心を厳しく鍛えるという保護者の姿勢が問われるところである。

幼児期は大人の保護のもとで情緒の安定を図り、自分でできることを増やしていく時期である。結果から、家庭において食事を除いて促されればやるということが見て取れる。

しかし、注目したいのは、幼稚園ではこれらの項目については、教師の指導のもとで幼児が自分で行っているということである。このことから、家庭と幼稚園とでの幼児への働きかけ方が異なっている様子が分かる。家庭と幼稚園が十分な連携、協力のもとに指導の充実を図っていくことが求められている。

② 遊びについて

次に遊びについてみる。幼稚園の調査結果から「夢中で遊ぶことがある（83.2%）」と好ましい傾向が見られる。しかし、その中身はというと、家の中での遊びが多く、テレビ、ビデオ等を2時間以上見ているのが8割近くに上る。幼児期は、自分の身体や諸感覚を通して具体物に触れ、遊びや生活を通して、感情や言葉、社会性の発達がなされ、自我形成の基礎となる時期である。テレビを中心とした間接体験が言葉や心の発達に好ましくからぬ影響を及ぼすことが指摘されているが、遊びの中身の充実を図っていく必要がある。

一方、生活科においても遊びを重視しており、生活科の目標の中には、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることや、遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わう、ということが示されている。小学校で「自分から遊びや生活に使うものを作ることができる」と回答している保護者は約80%（P. 51）おり、生活科においてこれが概ね達成されている傾向がみられる。幼稚園の実態から、生活科における具体的な活動や体験、その内容について今後も引き続き充実させていく必要がある。

(6) 保護者・地域との連携について

① 保護者との連携

教師を対象に、「あなたの場合、家庭の協力はどの程度だと感じていますか」と設問したところ、よく協力してくれる47.6%、まあ協力してくれる50.0%、あまりしない2.4%と回答していることから、家庭が協力的であることが分かる。また、教師がどのようなことについて協力を求めているかについては次の様な結果が得られている。

表9 家庭の協力の内容

1	材料の準備	27.2%
2	体験の機会を増やすこと	26.3
3	学習の生活化	24.1
4	校外学習の安全確保	10.3
5	学習状況の参観	6.6
6	学習内容を聞くこと	4.9
7	その他	0.5

家庭の協力を求めている内容として、単に教材の準備だけでなく、学校で学んだことの定着や家庭における体験の機会やその充実について取り上げていることは好ましいことである。

生活科の目標である自立の基礎を養うためには家庭や地域社会の協力は欠くことができないものであり、今後とも充実を図っていく必要がある。

その際、学校と家庭との指導の連携、一貫性という視点からの協力関係を築くことが重要である。先

に取り上げた表1の子どもの自立についての保護者の意識と、表2、自立の基礎についての教師の意識、表3生活科を通して子どもに育った能力や資質等についての意識には若干の食い違いのあるものもある。

中でも、教師が授業で大切にしていることとして「自信を与えること」としているのに、「自分のよいところや得意なことに気付いている」と答えた保護者が66.6%であることを重視して受け止めたい。今、子どもたちは年長になるにつれ自分のことに自信がなく、心の居場所もないことが指摘されている。低学年のころから自信や勇気をもって生きることの実感、その大切さを是非とも身に付けさせたいものである。生活科は他の教科と比べて、子どもの多様なよさが活動を伴って発揮される教科である。家庭においても、子育てをとおして保護者が子どものよさを一層伸ばすことができるよう、連携協力を強化していく必要がある。

② 地域との連携

生活科の学習は身近な地域を舞台としている。地域の人や自然、社会事象と具体的な活動をとおしてかかわり、自立に向けて必要な基礎的な資質、能力を身につけていくのである。したがって、家庭や地域社会との連携協力を欠くことができない。生活科指導書の中でも「地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域社会との連携を深めるとともに、学校相互の連携や交流を図ることに努めること」（指導書 P.73）とある。

表4を見てほしい。教師の取り組みについて、「地域の公園や野原で遊ぶ活動」や「地域の店や公共施設を尋ねる活動」、「地域の人とのかかわりを深める活動」、「地域の行事などに参加する活動」の実態が読み取れる。公園や野原での活動、公共施設を尋ねる活動などはわりと取り組まれているが、地域の人とのかかわり、地域行事への参加についてはそれほどやられていないといえる。これらのことから、引き続き地域教材の掘り起こしや地域の人々との交流を深めていく活動の充実が求められている。そのためには、生活科発足当初積極的になされた地域マップの改訂版づくりなど教師自身が自分の足を運んで地域理解を深める努力が必要である。このことは、今後予定される総合的な学習への準備としても共通する課題と考えられる。

Ⅲ 幼稚園保護者の子どもの生活に対する意識

■ 調査研究結果の概要

— 生活の自立について —

- 生活行動の自立の遅れが気になる。幼稚園ではほぼ完全にできると思われることから、親の考え方や関わり方の問題か。自分のことは自分のこととしてできるようにしていくことへの意識が薄いことが、考えられる。
- また、生活のリズム、体のリズムがどうなっているか、そのことが生活への意欲を減少させていることがあると思われる。
- 幼稚園では、園生活のほとんどすべてを子どもの手で行っているが、小学校ではどうなっているのか。生活科新設の背景とも合わせて考えてみる必要がある。

— 遊び・友だちについて興味・関心の広がり —

- 家庭の遊びの内容、場などについての偏り（直接体験の不足）が懸念される。このことから、幼稚園での生活や遊びが子どもの生活の中で重要な意味をもつと考えられる。幼稚園での教育内容の充実がさらに求められる。
- 小学校においても、学校の遊び、直接体験の機会となる生活科が、大きな意味をもつと思われる。
- 生活科が活動や体験を重視しているのもこのことが中心の課題であり、幼児の経験や体験を基にした興味や関心の広がりを生活科の学習にどう関連づけていくのか考えてみる必要がある。

— 言葉について —

- よい人間関係が保たれている中で、幼児が自分の言葉で表現しようとしている様子、また、日常生活を楽しもうとしている様子などがみられる。
- 幼児は気持ちの安定や人への信頼感や安心感がないと表現しないことが多いことから、よい環境の中にいると考えられる。親が子どもに愛情を注ぎ、子どもの話を聞こうとする姿勢や態度が感じられる。
- 一方、家庭の会話をテレビが奪っていることも推測され、生活に必要な会話はするが、各々の気持ちや考え、見聞きした事、感動した事などについての会話がなされているかどうか問題である。
- 自分を表現することや言葉のやりとりを楽しもうとする幼児の姿を、小学校生活、特に生活科、国語につなげ、生かして欲しい。

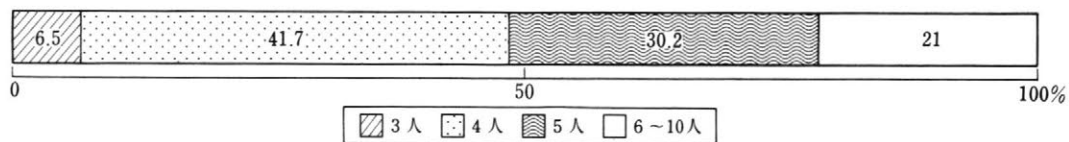
— 自我の形成 —

- 言葉と自我の形成とは、深いかかわりがあるが、ほぼ順調に育っていることがうかがえる。
- 親の子育て状況は、わが子への思いや愛情をもってかかわっていることが推測される。
- 豊かな心情や意欲、自立心、自律心は、人への（親への）基本的信頼感が不可欠で、アンケートに答えてくれた家庭においては、ほぼ子どもの信頼感を獲得していると思われる。
- こうした心の育ちがその後の成長にどのようにつながるか、幼児期の親の意識、児童の親の意識の変化など考慮しつつ、考えていく必要がある。

〈回答者の状況について〉

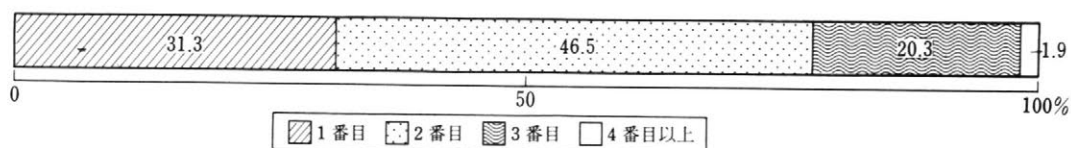
・回答者総数 798人

・家族の人数 4人 41.7% 5人 30.2% 6-10人 21% 3人 6.5%

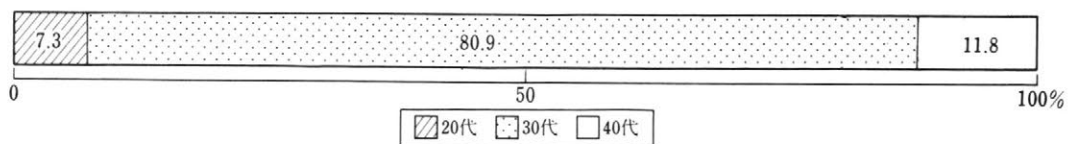


(祖父の同居 18.7% 祖母の同居 25.2%)

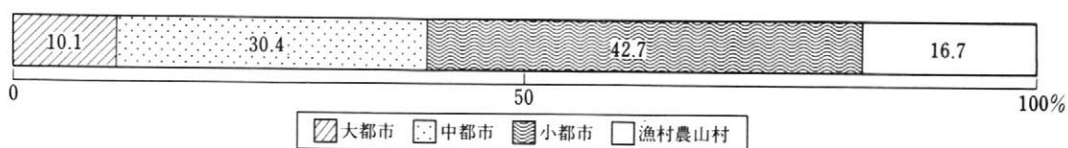
・第何子であるか 2番目 46.5% 1番目 31.3% 3番目 20.3% 4番目以上 1.9%



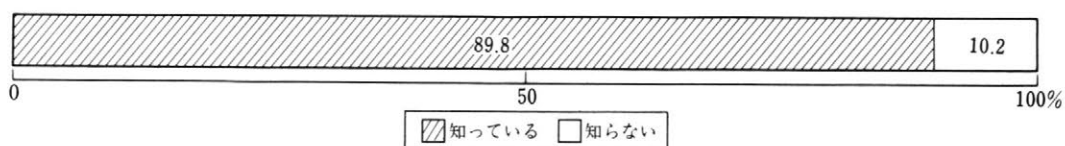
・年代 30代 80.9% 40代 11.8% 20代 7.3%



・居住地区 小都市 42.7% 中都市 30.4% 大都市 10.1% 漁村農山村 16.7%



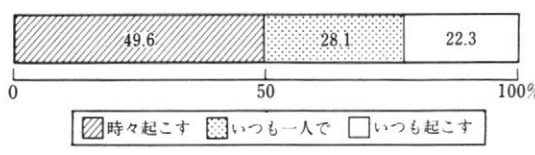
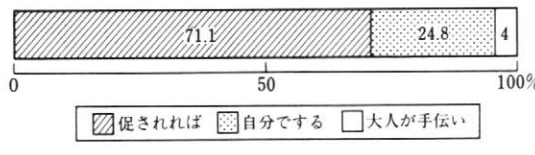
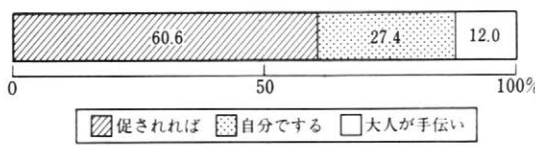
・生活科について 知っている 89.8% 知らない 10.2%



* 小学生のいない家庭が31.3%のなかで、生活科をしらないが10.2%であったことは、生活科がよく知られてきていることを示している。これは、学校の勉強に対する保護者の関心の深さ、幼小連携、さまざまな所からの情報、また、地域に出て生活科の授業が行われていることなどによるものと考えられる。

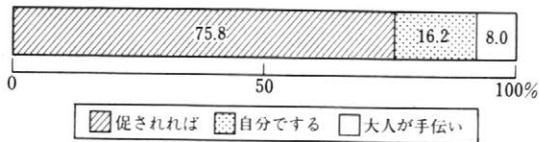
1. 生活の自立について

(1) 基本的な生活習慣

見出し	調査結果と分析	考 察
起 床	<p>① 朝一人で起きるか。</p>  <p>いつも一人で起きるが3割を切っており、自立起床が低いことを示している。いつも起こすが22.3%にも達していることは、母親の社会進出や父親の帰宅時間が遅いことと関連していると思われる。</p>	<p>自分で起きられない生活、目覚めの悪い状態で一日が始まっている幼児が多い。朝、幼稚園でぼーっとしていたり遊びだしが遅かったりなどの姿に合致する。このことは、生活への意欲、自分で行動を起こす自発性に大きく影響を与えていると思われる。社会全体が夜型の生活になってきていることが、幼児の生活にも大きく影響していると考えられる。就寝時刻、睡眠時間はどうか、体のリズムはどうか懸念される。</p>
洗面・歯磨き	<p>② 洗面・歯磨きをするか。</p>  <p>自分でするが3割を下まわっており、自分の体を清潔にするという習慣が身につけていない幼児が多いことを示している。大人が手伝っている4%は問題であり、保護者の意識や考え方がどうか懸念される。</p>	<p>自分の体をきれいにすると気持ちがいいという躰の基本や清潔についての保護者の意識に問題がある。さらに、朝ゆとりをもってやれる状況にあるのか、起床時刻との関係があると考えられる。このことは大人の側の朝の忙しさとも関連していると思われるが、基本的な生活習慣という視点からも大きな課題であるといえよう。</p>
登園の支度や始末	<p>③ 登園の支度や始末をするか。</p>  <p>促されれば、60.6%、大人の手伝い12.1%と自分からやる幼児が少ないのは、朝、ゆとりをもってやれる状況があるかどうかが大きく関わっていると思われる。起床時刻やテレビの影響も考えられる。また、時間がないため、大人がやってしまうことが伺える。</p>	<p>小学校の『学習の準備をするか』と比較すると、自分であまり出来ない12.4%であり、幼児の大人の手伝い12.1%に近く、幼児期に自分でやっていない子どもは、小学生になってもやっていないことが推測される。保護者の意識やかかわり方に問題があると考えられる。ゆとりを持って登園前の時間を過ごすことで一日のリズムを作るという点からも課題であろう。</p>

後片付け

④ 遊んだ後の片付けをするか。



自分でやるが16.2%、80%以上が自分からしていない状況であり、片付けは自分でするものという意識が十分育っていないと考えられる。促されれば75.8%は片付けをしていると答えているが、これが自分から片付けるといふ行動に結びつかないのは、習慣化に向けての親の甘さの表れとも考えられる。

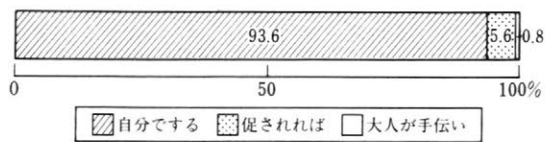
片付けは遊びの充実感と大きく関わりがあり、もっと遊びたいという状況があるのか、また遊びの内容との関連も考えてみる必要がある。片付けの習慣は、自分の行動に節目やけじめをもたせることから幼児の自立に大きくかかわりがある。幼稚園ではこのことを重視し、時間をかけ、ていねいに繰り返し指導している。その結果片付けは自分でするものであるという意識が育ち、幼児自身の手で行っている。一方、家庭では80%以上が保護者に依存している状態であり、家での片付けは保護者がやってくれるものといった感覚があることが伺える。

片付けの習慣が子どもの自立に大きく影響することを伝え、具体的な関わり方を示しながら家庭で片付けの習慣が身につくよう働きかけていく必要がある。

最近の家庭での遊びは、テレビ、ビデオ、ゲーム機などが中心で、片付けの簡単なものが多くなっていること、また、保護者が部屋を散らかしたり、汚して遊ぶことを嫌う傾向にあることが、片付けの習慣形成に影響を及ぼしていると考えられる。

一人で食事

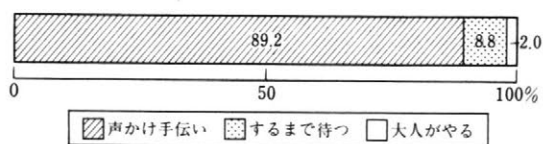
⑤ 一人で食事ができるか。



食事については、ほぼ自立してきているといえる。一方、促されれば5.6%、大人の手伝い0.8%とあるのは、食事の仕方だけでなく、食生活や食欲など生活全体について考えていく必要がある。

食事は親子で一緒にすると考えられることから、保護者が食事の仕方のモデルとなり、また、子どもが自分で食べるように言葉をかけたり、見ていたりする状況にあると考えられる。一方、おやつとの与え方やおやつの内容との関係も考えてみる必要がある。

声かけ ⑥ 以上のことを一人でしないときはどうするか。

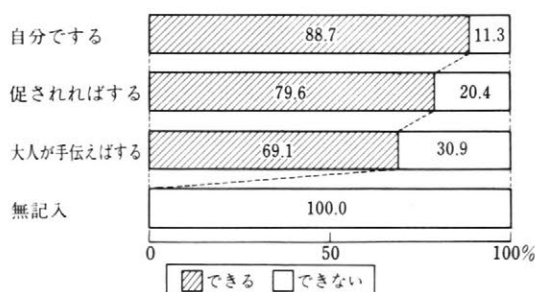


「声かけ」は「声をかけてやらせる」と考えられ、9割以上が子どもが自分でやろうとするまで待てない状況であることが伺える。

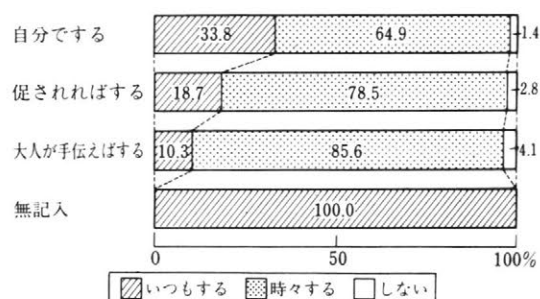
何度も声をかけ、指示する様子、早く早くといいながら保護者が手を出してしまっていることが予想され、指示されて行動を起こすことに慣れてしまっている状況にあることが推測される。

基本的な生活習慣がしっかり身につくためには「自分のことは自分でできるように育てる」という保護者の教育方針が重要である。さらに、十分な時間（ゆとり）と子どもが自分でできる方法を場に応じて教えたり、小さな失敗をのりこえられる大人の励ましや、できたときの褒めことばなどが大切である。これらのことをふまえて保護者に啓発していく必要がある。

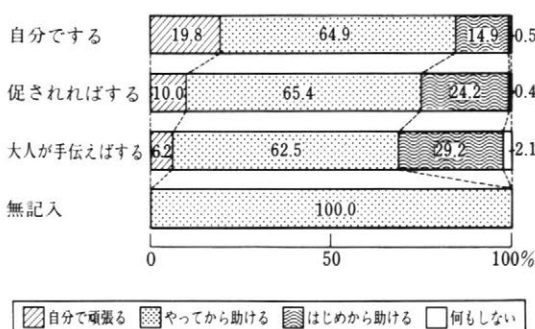
クロス集計 (登降園の支度×簡単なお使い)



(登降園の支度×家でのお手洗い)



(登降園の支度×困ったときどうするか)



自分のことが自分でできることは、周囲のことへの関心もてるゆとりを生む。また、何よりも、自分で行動するという能動性が育まれ、行動する楽しさ、自分でやるおもしろさとともに自分への自信につながっていく。このことが、自分以外のことにも積極的にかかわろうとする態度になっていると考えられる。さらに自分のことが自分でできるという気持ちや意識は、情緒の安定や自分への自信となり、気持ちのコントロールを可能にし自分のおかれた状況についての判断もできるようになると考えられる。

クロス集計 生活行動の自立は、単に行動様式がとれるようになるだけでなく、精神的な自立に大きくかかわっていることがわかる。

(2) まとめ

- ◎ 生活の自立には、体のリズムと生活のリズムが非常に大切である。

自立起床があまりできていないという結果は、生活への意欲や自分から行動を起こす自発性にも影響を及ぼしていることがうかがえる。社会全体が夜型の生活になってきていることが、家庭生活に影響し、幼児の生活リズムひいては体のリズムに少なからず影響を与えている。

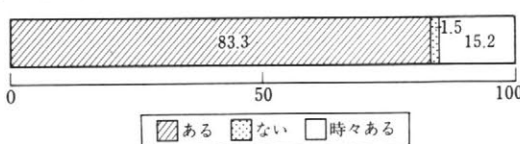
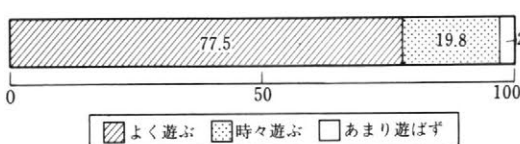
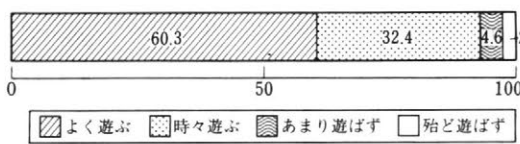
生活の自立には、朝、自分で目覚め、自分から行動が起こせるような体のリズムになるような生活にしていく事がまず必要である。十分な睡眠時間を確保し、早寝早起きの習慣が身につくよう、保護者に啓発していく必要がある。

早起きをして、朝、時間にゆとりがあれば幼児が自分で自分のことをすることができ、保護者も見守ってやることができるのではないか。保護者を含め、家庭生活のリズムを見直していくことも考えていく必要があろう。

- ◎ 『洗面・歯磨きをするか』から『遊んだ後の片付けをするか』については、技能的に出来ないことではないので、自分のことを自分のこととして自発的にやろうとする気持ちや態度が十分育っていないと考えられる。一方、幼稚園では、手洗い、歯磨き、衣服の着脱、登降園の支度、片付けなど殆どの生活行動を自分でしていることから、家では大人がやってくれる、言われなければやらないという状況になっていることが伺える。
- ◎ また保護者は、子どもに自分のことは自分でできるようになってほしいと願っているが、時間に追われる生活の中で、「早く早く」と子どもに言いながら保護者が子どもに代わってやってしまう様子や子どもが自分ですることを待てない保護者の姿が推測される。
- ◎ 子どもが自分でするには時間が必要であること、失敗を重ねて生活技能を習得していくことなど、特に、若い保護者には、子育ての基本や考え方、その方法を具体的に伝えていくことも必要である。
- ◎ 幼児期においては生活習慣の自立が大きな発達課題である。生活習慣の自立は単に生活のために必要な行動を習慣化するだけでなく、自分のことを自分でしようとする自立心を育てる上できわめて重要である。さらに、生活習慣は毎日の生活の中で繰り返し行われることにより身に付くものであり、身近にいる大人の考え方や姿勢、関わり方が大きく影響する。アンケートの結果からみると、家庭において生活面の自立については望ましい状況とは言い難い。保護者が、生活習慣の自立は子どもの精神面の自立に大きく関わること、さらに、幼児期に育った自立心や生活習慣の自立がその後の子どもの成長に重要な意味をもつことを自覚し、しっかりと子育ての方針をもち、一貫した養育態度で子どもに関わっていくことが重要である。
- ◎ 幼稚園では、ほぼ生活行動は自立しているが、家庭での生活行動の自立が遅れている。このことは家庭での保護者の考え方や関わり方に問題があると見られるので、家庭の状況や保護者のしつけに関する考え方、関わり方を捉え啓発していく必要がある。幼稚園の生活習慣に対する考え方や指導方法、教師の関わり方等、一人一人の子どもの実情に応じて具体的に示しながら共に育てていく姿勢をもち、保護者の子育てを支えていくことが大切であろう。

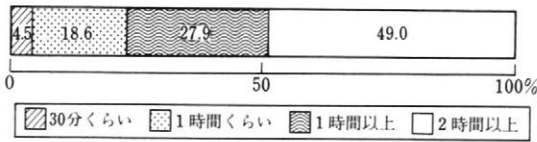
2. 遊び、友だちについて

(1) 家の中での遊び

見出し	調査結果と分析	考察
夢中で遊ぶ	<p>① 夢中で遊ぶか。</p>  <p>「ある」が83.3%でよい傾向である。興味・関心のあることには集中して取り組む素地があるといえる。</p>	<p>主な遊びは、絵を描く、ブロックで遊ぶ、人形で遊ぶなどであり、幼児の一人遊びとしては妥当な内容といえる。</p> <p>夢中になって遊ぶ中で、子どもは自分の興味を追求しながら、自分で考えたり試したり工夫したりなどを繰り返す。遊びの中で集中力や考える力、失敗をのりこえる力や課題を解決する力が育っていくことを保護者に伝え、子どもが自ら取り組む遊びを大切にするよう啓発していく必要がある。</p>
兄弟で遊ぶ	<p>② 兄弟で遊ぶか。</p>  <p>家の中での遊びが多いと考えられることから、兄弟との遊びが高いと思われる。</p>	
(2) 降園後の遊び 友達との遊び	<p>③ 友達と遊ぶか。</p>  <p>友達を求めて遊ぶ時期なので、保護者の都合が許す時、また、おけいごとなど用事のない時は約束して遊んでいることが伺える。</p> <p>「ほとんど遊ばず」は 2.6%とわずかだが問題である。</p>	<p>子どもが友達を求める姿や友達と遊ぶことの大切さを思い、保護者が積極的に友達と遊ぶ機会を作っていると考えられる。保護者の都合が許す時やおけいごとなど用事のないときは約束して遊んでいることが伺える。</p> <p>一方、住宅事情や遊び場の問題を考えると、友達とどのような遊びを、どこでしているか、家の中でばかり遊んでいないか懸念される。また、友達との遊びへの保護者の関わり方がどうか、どのように関与しているか捉えていく必要がある。</p>

遊ぶ時間

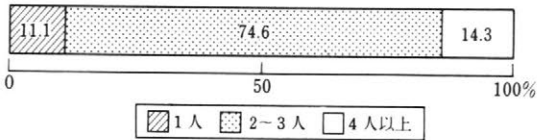
④ 友達と遊ぶ時間はどれくらいか。



遊びは、幼児時代の生活の中心であることから、2時間以上が半数近くに達していることは、好ましい状況にあるといえる。しかし、1時間以内の23%は、子どもの生活時間に制約があることを意味しているのであろうか。子どもの成長・発達という観点からは問題にすべき数字といえよう。

遊ぶ人数

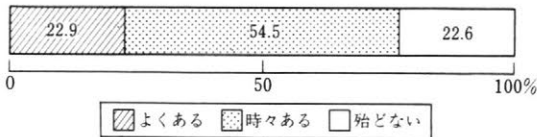
⑤ 人数は何人くらいか。



2～3人で遊ぶが74.6%であるのは、幼児がかかわりながら遊べる人数として妥当である。

大きい子との遊び

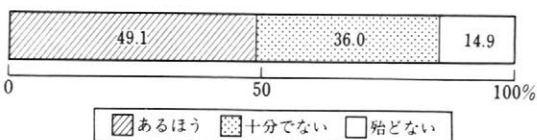
⑥ 大きい子と遊ぶか。



遊びに行った家の兄、姉とのかかわりと考えられる。日常的に年齢の大きい子どもとの遊びが少なく、家族以外の異年齢とのかかわりが少ないことが推測される。

遊び場

⑦ 遊び場があるか。



調査対象とした地域環境の状況が伺える。都市化の波が子どもたちの遊び場に影響して

降園後から夕方までの時間を考えると1～2時間は妥当といえる。保護者の都合やおけいごとで遊びの時間が変わっていることが予想される。

幼稚園の降園時、親子同士で約束を取り付けて遊んでいることから、友達の家へ行って、保護者の迎えがあるまで遊んでいると思われる。

子どもたちのたて社会の崩壊がいわれている中で、「よくある」の22.9%は、まだよい方であろう。人間関係の希薄さは、少子化の中での現象であるが、遊びを通しての子どもたちのたて社会を作ってやるのは、大人や地域社会の責任でもある。「心の教育」という観点からも、この実態を直視する必要がある。

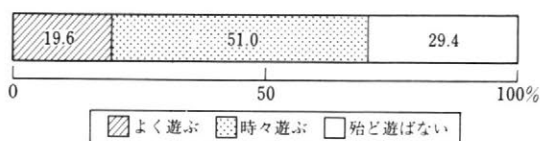
十分ではない、ほとんどないが50%をこえ、保護者が子どもの遊び場が十分でないと感じている。

住宅事情との関連から考えて、子どもが十分体を動かして遊べる状況にないことが伺える。子どもの遊びが自立への道を拓くことから、保護者の意識的な遊び

いるのであろう。満足の度合が半々との結果になっている。ほとんどない14.9%は、子どもの遊びが家の中にならざるを得ないのであろうか。

遊び場での遊び

⑧ 遊び場で遊ぶか。



遊び場があってもそこでは遊ばない様子が伺える。

「殆ど遊ばない」29.4%は、遊び場が、遊び場でなくなっていることであり、その要因を探る必要がある。

への誘導が必要であらう。

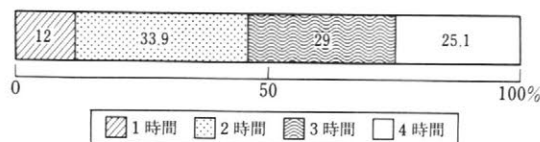
公園等も大人が見ていないと安全ではないと考えている保護者が多いことから遊び場としては使われていないと考えられる。

外遊びが好きが9割をこえているという実態から見ると、遊ばせられない状況があると考えられる。

(3) テレビ・ビデオ・ゲーム機での遊び

テレビ・ビデオを見る時間

① テレビ・ビデオを見る時間はどれくらいか。



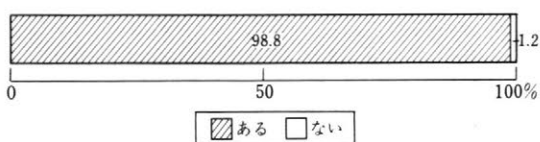
視聴時間帯の回答によれば、ほとんど夕方から見ている。見ている番組が子どもにふさわしいものかどうか懸念される。4時間以上が15.1%もあることは、子どもの心身に与える影響が大きいと思われる。

家庭によってテレビの生活時間への影響は違うが、幼児の生活時間を考えると生活の中で大きな位置を占めている。また、常にスイッチが入れっぱなしの状態も考えられ、番組の選択の問題、見せ方について保護者が真剣に考えていく必要があると思われる。

このことは、母親の社会進出とも関係しているのであろうが、子育てをテレビ・ビデオに任せていることはないのだろうか。親子関係の確立という点から警鐘を鳴らす必要がある。

好きな番組

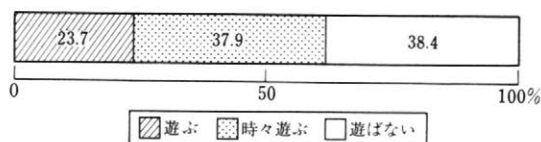
② 好きな番組はあるか。



殆どが好きな番組があり、子どもの生活にテレビが大きな位置を占めていると思われる。

ゲーム機での遊び

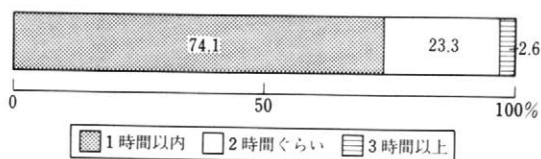
③ ゲーム機で遊ぶか。



興味のある子とない子の差がはっきりしている。男女差、兄弟の影響が考えられる。

遊ぶ時間

④ ゲーム機で遊ぶ時間はどのくらいか。



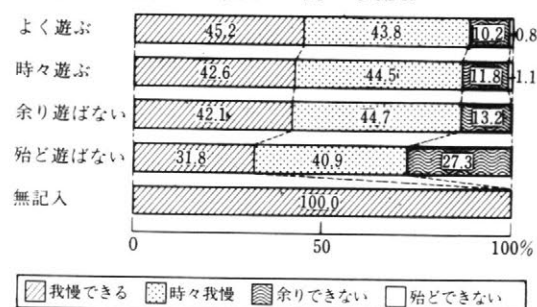
1時間が74%となっているのは、保護者の方で時間を考えて遊ばせていると思われる。

ゲーム機が子どものおもちゃとして考えられるようになっているが、保護者のおもちゃに対する考え方や兄弟の影響の有無など家庭の状況や子育ての方針等が大きく関わっていると思われる。

テレビやビデオの場合と同様に、子どものかかわりを受け、ゲーム機に任せている状況であるとすれば問題である。遊び場や遊び相手がない状況とも関連していると思われるが、親の子育て意識に問題があるのではなかろうか。

クロス集計

(友達との遊び×欲しい物の我慢)



(4) まとめ

◎ 友達との遊びは、幼稚園で約束をして互いの家に行って遊び、保護者が迎えに行くまで友達の家にいるという形で行われていると思われる。したがって、子どもの自由な遊びというより、常に大人に見られている中で遊び、また、大人が遊びに関与していることも考えられる。このことは、子どもの自主性や社会性の発達に大きく影響を与えていると考えられる。

友達との遊びは、自分の気持ちや考えを表現すること（自己表現力）、人とかかわることによって相手の存在を受けとめて行動できるようにすること（人とかかわる力）、友達との気持ちのぶつかりあいを通して様々な感情体験をしながら自分の気持ちのコントロールができるようにする（自己抑制力）など、大変大きな意味をもつ。したがって遊びのもつ意義を「子どもの成長・発達」と「自立」という観点から強調し、啓発していく必要がある。〈クロス集計・友達との遊び×欲しい物の我慢〉にもあるように、友達とよく遊ぶ子は、友達との様々な関わりの中で思い通りにならない体験をし、我慢する気持ちが育っていることが伺える。

◎ 興味関心のあることには集中して取り組む素地があること、2～3人でよく遊ぶなどよい傾向も見られるが、殆どが家の中での遊びであり、遊びの内容が偏っていることが考えられ、自然や社会とのかかわりが少ないのは問題である。また、兄弟か同年齢の子どもとの遊びが中心となっており、家族以外の異年齢、年齢差のある人とのかかわりが少ないことがわかる。

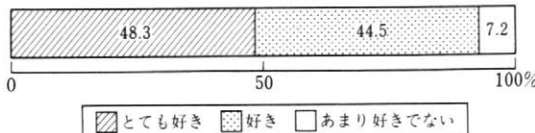
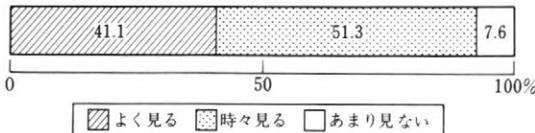
これは、地域での家と家との付き合いが少なくなってきたこと、皆、各々に自分の生活が忙

しいことなどが背景にあると考えられる。

- ◎ 幼児の一日の生活時間を平均的に考えると、子どもの遊び時間の半分をテレビやゲーム等が占めていることになり、直接体験の不足が心配される。幼児期は、自分の体を動かし五感を通して外界とかかわり様々な事柄を学んでいく時期である。身体の発達はもとより、感情、言葉、社会性等の発達は具体的な生活や遊びを通して促されていく。間接的な体験が多くなることは、健全な自我の形成に大きな影響を及ぼすものと考えられるので、家庭でのテレビやゲームでの遊びについて、保護者に警鐘を鳴らしていかなければならない。
- ◎ 家庭での直接体験の不足を考えると、幼稚園での遊びや生活が大変重要で大きな意味をもつ。このことを重く受けとめて教育内容を考えていく必要がある。さらに、子どもの発達の連続性や幼小連携をふまえ、就学後は生活科の意味を重視しながら学校生活全体を通して子どもの直接体験をどのように保障していくか考えていく必要がある。

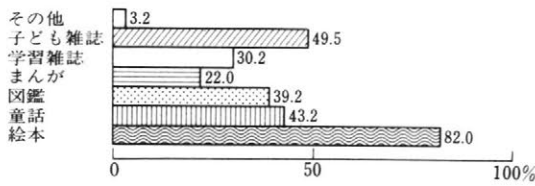
3. 興味・関心の広がり

(1) 動く、見聞きする、作る

見出し	調査結果の分析	考 察
体を使っての遊び	<p>① 体を使って遊ぶのが好きか。</p>  <p>『とても好き』『好き』を合わせて、92.8%は好ましい状態といえる。</p> <p>降園後、公園等、外で遊ぶことが少ないことから、幼稚園での子どもの様子や子どもの言葉から保護者は『とても好き』『好き』を選択していると思われる。幼児の発達の特性がよく表れているが、好きでないの7.2%は問題である。</p>	<p>幼稚園での戸外での遊びが、幼児の戸外遊びへの興味を高めており、幼稚園での戸外遊びの重要性が伺える。幼児期に戸外で遊ぶことは、体を動かす運動的な面から、開放的な気持ちになれる情緒面から、自然の事象、社会の事象への関心を広げるという面から大きな意味がある。</p> <p>こうした実態をふまえながら、幼稚園が地域の「子育てセンター」として、その役割を果たしていくことが、これからは、ますます重要なことである。</p>
絵 本	<p>② 絵本などをひとりで見ると。</p>  <p>ときどき見る、よく見るを合わせると90%をこえ、家庭に身近に絵本等があることが伺え好ましい状況である。</p>	<p>この時期の子どもたちの興味・関心の広がり、身近のさまざまな対象に向けられる。特に、知的な関心の広がり、絵本や文字・言葉・数ということになるが、保護者の対応が、最も重要なときであり、そうした環境を整えてやるのが大切である。</p>

絵本の種類

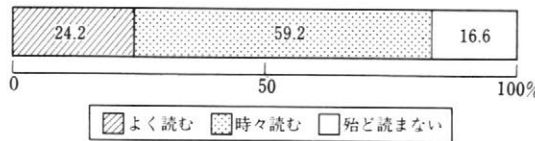
③ どんな本を見るか。



一人でも楽しめるものが多いと思われる。

読み聞かせ

④ 読み聞かせはするか。

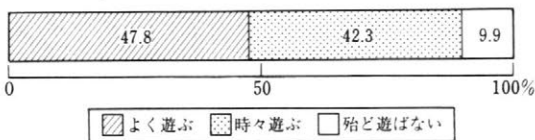


ときどき見る・よく見るが92.5%と高く、絵本等に家庭で触れている。家の中で遊ぶことが多いことが、その要因のひとつと思われるが、読み聞かせも、時々読む・よく読むが85%に近いことから、絵本等の保護者の意識もあることが伺える。

幼稚園では殆ど毎日絵本や紙芝居、童話等の読み聞かせをしたり、毎月年齢にふさわしい絵本を持ち帰ったりしている。これらのことが幼児の絵本等への興味関心につながっていると考えられる。

紙や空き箱

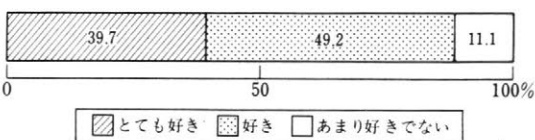
⑤ 紙や空き箱で作って遊ぶか。



家の中で遊ぶことが多いこと、一人でもできる遊びであることから、よく遊ぶ・時々遊ぶが、9割程度の数値になっていると思われる。

歌や踊り

⑥ 歌ったり踊ったりするのが好きか。



あまり好きでないが10.3%もあることは、保護者の趣味・嗜好や居住環境が大きく影響していると考えられる。

5～6歳では、課題意識をもったり自分で調べたり確かめたりすることが少ないので、図鑑や学習雑誌は少ないと思われる。

小学生と比較すると幼児の方が高いが、これは発達との関係とともに学習との関係からと思われる。

「読み聞かせ」は、子どもたちのその後の読書傾向に大きく影響すると言われるが、「よく読む」24.2%は少ないように感じるがどうだろうか。読書への興味・関心を広げていくためには、保護者の絵本や本に対する考え方を変えていく努力が必要である。

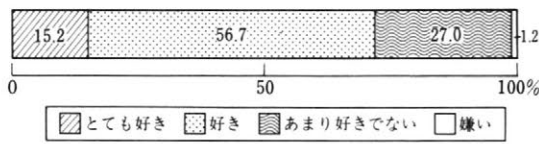
これは、好ましい状況で、幼稚園での体験が家庭での遊びに良い影響を与えていると思われる。作って遊ぶということが、子どもたちの創造性を広げるという意味からも、これからも大いに奨励していくことが大切である。特に、既成のおもちゃに片寄る傾向には、注意を喚起する必要があるだろう。

本来、幼児は歌ったり踊ったりすることが好きであるが、家庭にテレビ、CD、ラジオカセットなどで音楽に触れていると思われる。からだを動かすことは、子ども本来の姿である。遊びへの興味や関心を広げるきっかけにもなることから、そうした機会を増やしていくことが大切である。

(2) 動植物の飼育・栽培

草 花

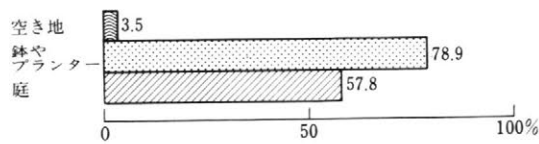
① 草花が好きか。



あまり好きでない27%・嫌い 1.2%は、関心がないことを示しており問題である。

栽培の場所

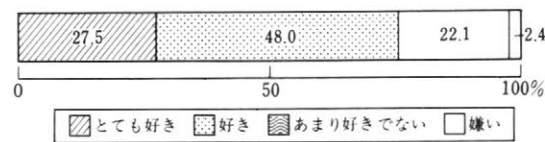
② どこで栽培するか。



鉢78.9%は、居住環境の影響からであろう。しかし、植物栽培に対する関心の大きさも伺える。

動 物

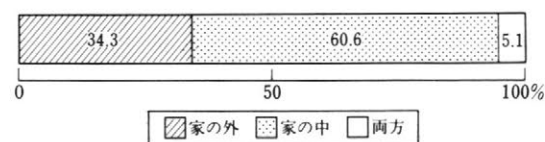
③ 動物が好きか。



あまり好きでない・嫌いが25%になるのは、住宅の事情や生活の中に生きものを飼うゆとりがないことやアレルギーなどの心配から、日頃、小動物など生きものに触れていないと思われる。保護者自身が動物を好きではないことなどが影響していると思われる。

飼育場所

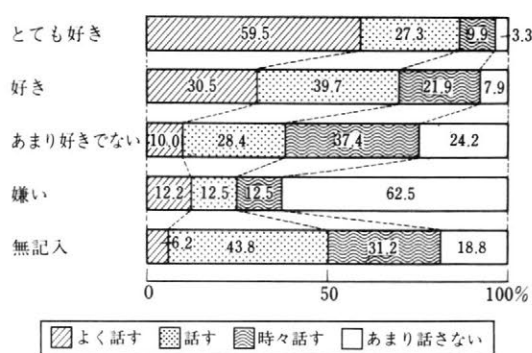
④ どこで飼育しているか。



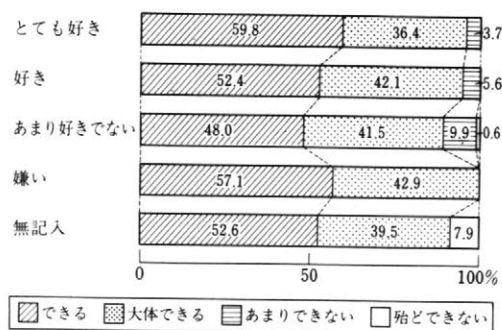
あまり好きでない、嫌いということは家庭での生活の中に植物がない状況にあると思われる。また保護者の感性や生活感覚が大きく影響していると思われる。生命の大切さや自然との共生等の感性を育てる上でも保護者の意識を変えていく必要がある。

家庭での飼育状況が90%を超えていることは、驚くほどの数字であり、子どもの情操や感性を育てようとする意識の高さが伺える。自然に触れることや自然体験が不足している昨今であるが、学校はもとより、地域社会、家庭が協働し合い、動植物に触れ合える環境づくりを目指していくべきである。

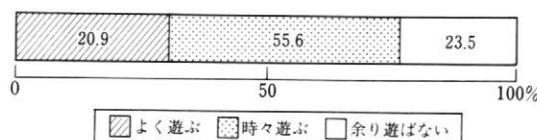
クロス集計 <草花の世話×美しいものを見たとき話すか>



<生き物の世話×親切に接することができるか>



木の実、葉 ⑤ 木の実や葉で遊ぶか。



あまりない16.1%とあるのは、近くに自然がないこと、公園等があっても遊んでいないこと、保護者の関心がないことが原因と思われる。

子どもは、身の回りにあるものは何でも遊びの対象にしていくものだし、昔の子どもは、木の実や木や竹の葉でよく遊んだものである。こうした経験が少ないという現状は、保護者自身の経験不足やそうした遊びの楽しさ、喜びを体験していないことに起因しているのであろうか。回りの大人が意識し、積極的に遊び文化を伝えていくことが大切である。

(3) まとめ

◎ 『外で体を使って遊ぶのが好きか』から『木の実や葉で遊ぶか』について、よく遊ぶ・好きの回答が7～9割であることは、遊びへの興味・関心が広がっており望ましい状態といえる。

幼稚園に入園することにより、家庭での遊びの種類がふえたり遊び方が変わったりしている実態があることから、よく遊ぶ・好きの回答が多く、遊びへの興味・関心が広がっていることには、幼稚園での遊びや直接体験が大きな影響を与えていると思われる。

◎ 幼児期は、発達上、戸外で友達と体を動かして遊ぶことが大変重要である。このことから、遊びをみると、絵本・製作・歌・踊り・草花等は、家の中で遊べるもの、一人でも遊べるものである。また、「遊び・友達」との関連で見ると、戸外で体を動かして遊ぶこと、自然とかかわって遊ぶことが少なくなってきたことが伺え、家庭での遊びの内容の偏りが懸念される。子どもの遊びの実情を捉え、家庭でも直接体験が十分できるように保護者に啓発していく必要がある。また、幼稚園での遊びや生活の体験をきっかけに子どもの遊びの種類や広がり、内容が豊かになっていると思われるので、子どもの遊びと体や心の発達とのつながりについて積極的に伝えていくことが重要である。

◎ クロス集計『草花の世話×美しいものを見たとき話すか』『生きものの世話×親切に接することができるか』で明らかのように、幼児期に、身近な動植物や自然の様々な現象にふれることは、生命の大切さ、自然の不思議さや美しさ、畏敬の念等豊かな感性を育み、優しさや思いやりの心を育てていく上で大変重要である。自然環境が減少している今日、可能なかぎり、生活のなかに自然を取り込み、子どもに直接自然とふれあえるよう工夫していく必要がある。

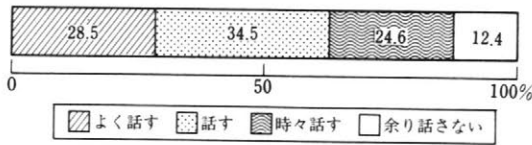
4. 言葉について

(1) 聞く・話す

見出し	調査結果と分析	考 察
あいさつ	<p>① あいさつをするか。</p> <p>数値が高いのは、保護者があいさつは躰のひとつとして大切に考え、子どもに挨拶をするように促したり、あいさつができたときほめたり認めたりしていると思われる。</p>	<p>あいさつは人との関わりの基本である。家族間では促されなくても自然に挨拶をかわす習慣が身につくよう大人が手本を示していく必要がある。</p> <p>小学生と比較して幼児が高いのは、小学生になると羞恥心が出てくることからと思われる。</p>
必要なことが言える	<p>② 必要なことが言えるか。</p>	<p>言える・大体言えるが殆どで、身近な人には、自分の要求や生活に必要なことは何でも言える関係があると考えられる。</p> <p>しかし、「言える」でも、社会的に通用する言葉になっているのかどうか。保護者と子どもの間だけで通用するものであるとすれば問題である。</p>
あったことを話す	<p>③ あったことを話すか。</p> <p>よく話す・話すが84.3%である。これは、子どもに話したい体験があること、話したい気持ちがあること、保護者がよく話を聞いていることなどよい状況にあるといえる。一方、時々話す12.9%・あまり話さない2.8%は、親子関係やコミュニケーションの在り方に問題がある。生活の中での会話が少ないと思われる。テレビ等の影響はないか懸念される。</p>	<p>保護者と子どもの間でも、聞く役がいることが大切である。子どもたちの表現力の低下が問題にされているが、幼児の時代から小学校に入ると、とたんに話さなくなるという傾向も見られるが、保護者からの命令や指示とともに保護者の口数が多くなるためであろうか。</p> <p>家庭の中に団らんの機会を作り、家族が話し合い、聞き合う関係を作り出していくことが大切である。</p>

美しいものを見たとき

④ 美しいものを見たとき話すか。

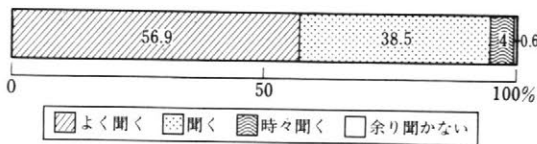


話す・よく話すのが63%であり、生活のなかに美しいものに触れる体験があり、共感する人がいることを示している。12.4%があまりないという事は、体験の不足や身近にいる大人の感性がどうかという点で問題があると思われる。

感性は教えて育つものではないだけに保護者の感性からの感化が重要なこととなる。また、子どもの感じたことに共感してくれる人の存在が大切である。昨今、子どもたちの「心の教育」が大きな課題となっているが、幼児の頃からこの感性の育ちに大きな関心を寄せていくことが求められる。

聞く

⑤ 不思議に思ったこと、わからないことを聞くか。

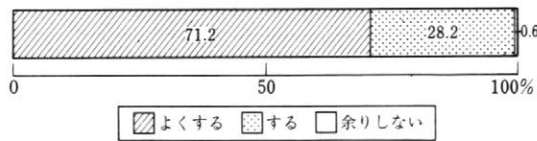


95%が様々なものに興味を示し、疑問を感じて聞いている。

これは、幼児本来の姿が現われており、幼児の疑問に大人が答えているようすが伺え、良い状況といえる。

会話をする

⑥ 会話をするか。



95%が家庭で会話をしており好ましい状態といえる。

生活上必要なことだけではなく、互いの考えや気持ちを伝え合うような会話であるかどうか、会話の内容が問題である。

(2) まとめ

◎ 殆どが言葉による自己表現が出来るようになっており、言葉によるコミュニケーションが身近な人ととれているといえる。

幼児は、本来聞いてくれる相手があると、見たことや聞いたこと、思ったことを話すようになることから、保護者が子どもの話を聞こうとする姿勢があることが伺える。

また、家や友達など子どもにとって身近な人とは、よい人間関係が保たれていると考えられる。

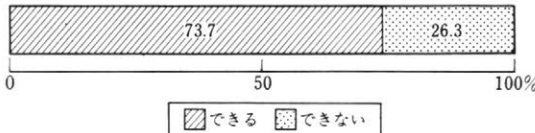
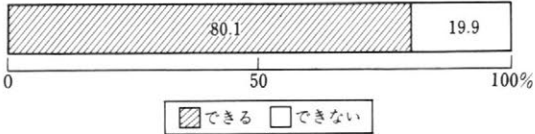
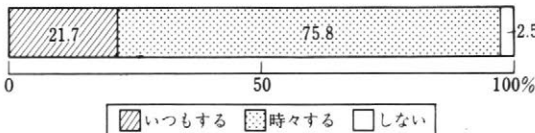
◎ 子どもの自己表現の仕方、会話の内容等は小中学生へと成長する過程で変化していくが、幼児期に親子関係や兄弟家族の間で会話をたのしむ雰囲気や、お互いのことをわかりあう楽しさが、培われているかどうかが重要である。幼児期には、子どもが小さいからという発達の理由で保護者が子どもに心や目を向けていると考えられる。その後についても子どもの成長にしたがって保護者の姿勢やか

かわり方を考えていく必要がある。

◎ 幼稚園生活、生活科の中でも、子どもの言葉による自己表現やコミュニケーション（2～3人を基本とした）の機会や場が多くあることが望ましい。

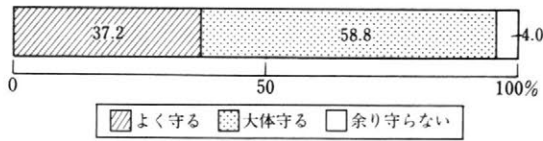
5. 自我形成の基礎

(1) 留守番や手伝い

見出し	調査結果と分析	考察
留守番	<p>① 短い時間の留守番ができるか。</p>  <p>できない26.3%であるのは、地域や家庭の状況により、子ども一人ではおいておけないという親子のつながりの面での不安や危ないことが予想されるという社会的状況の面からの不安など、安全面で不安があり留守番させられないことがあると思われる。</p>	<p>短い時間の留守は、母子分離の第一歩であり、母親の愛を実感できていれば、「見ていてくれる」という感情を持つことができる。</p> <p>26.3%の子どもができないということは、年長児ということを考えて問題ではないだろうか。母親のわが子に対する愛情の注ぎ方や信頼感といったものを考え直してもらう必要があるのではないだろうか。</p>
簡単なお使い	<p>② 簡単なお使いができるか。</p>  <p>できない19.9%については、地域によっては子どもを一人でお使いに出せない状況や地域社会の人間関係が希薄になってるので、お使いをさせにくい状況があることなどが考えられる。</p>	<p>社会的な状況から、わが子をお使いに出せないことが多いのであろう。しかし、子どもの精神的自立ということから考えると、子どもを後ろで見守り、「自分でできた」の成就感と自信を持たせてやることも必要であろう。</p>
お手伝い	<p>③ お手伝いをするか。</p>  <p>ときどきする75.8%と多いのは、決まったものではなく、そのときどきの保護者との関わりの中でしていると思われる。保護者が意識してさせていると思われる。</p>	<p>家庭での家事が電化等により減っている現代の生活の中で、お手伝いの場面が減少している。子どもにとってお手伝いは人の役に立つ喜びや家族の一員としての意識、親子が触れ合う機会となることなど、子どもの自立に大きな効果がある。このことを保護者に伝え積極的にお手伝いを生活に取り込んでいよう働きかけることが大切である。</p>

交通のルール

④ 交通のルールを守るか。



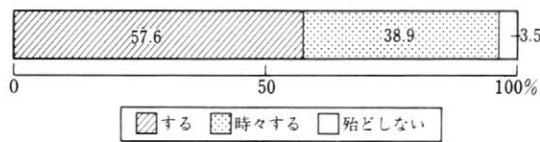
幼児は、保護者と一緒に歩行していることが多いので、大体守る・よく守るが96.5%になっていると思われる。

年齢が上がるに従って一人で歩行することが多くなる。大体守るのではなく、よく守って安全に歩行できるように、保護者は我が子の実態を捉えて、教え導いていく働きかけていくことが大切である。

(2) 精神的な自立

行動への意欲

① 何でもやってみようとするか。



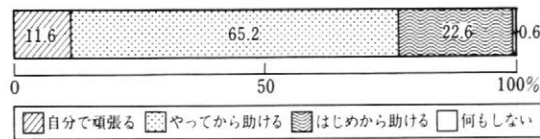
殆どが、行動への意欲や挑戦する気持ちがあると考えられる。幼児期の特徴がよく表れているといえるが、「ときどき」がどの程度か気にかかるところである。

幼児本来の姿で望ましい状態である。こうした意欲が年齢が上がっても持続高揚するよう支援することが望まれる。

長じてやる気や行動力が減退していく現状を保護者にも伝え、自立への道を拓いてやる接し方を働きかけていくべきであろう。

困ったとき

② 困ったときどうするか。



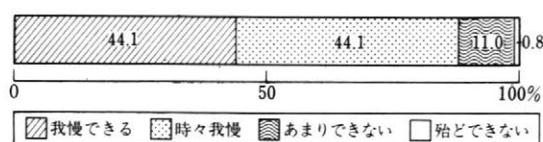
やってから助ける65.2%・自分で頑張る11.6%とあるのは、自分でなんとかしようとする気持ちや構えが育ってきていることを示している。一方、始めから依存的なのは23%で自立心の育ちが心配される。保護者の過保護、過干渉が影響していると思われる。

小学生と比較すると幼児が高い。これは、小学生になると保護者の意識が変わり何でも自分ですることを求めがちになるためではないかと思われる。

また、始めから助けを求めるが22%であり、幼児の数値と変化が見られないことから、保護者に対する依存性は変わっていないことが伺える。

我慢すること

③ 玩具など欲しいものを我慢することができるか。

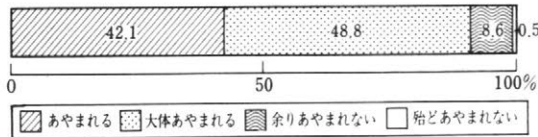


子どもの生活では物が豊かにあり、物への愛着心が薄い傾向もあるが、親子関係の中では、欲しいものを我慢するという面は気持ちのコントロールができるようになっていると思われる。

あまりできない11%・殆どできない 0.9%については、保護者との関係やかかわり方が問題と思われる。子どもの要求のままに保護者が従っていることはないか懸念される。

あやまる

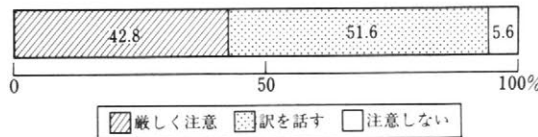
④ あやまることができるか。



だいたいあやまれる48.8%・あやまれる42.1%と高い数値になっている。「だいたいあやまれる」48.8%の数値が高くなっているが保護者の「あやまりなさい」の言葉の上のことではないのか検討してみる必要がある。

してはいけない事

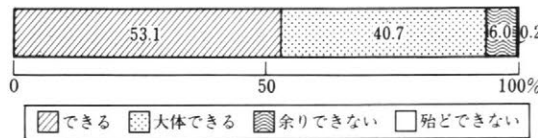
⑤ してはいけない事をしたときどうするか。



保護者の教育観の違い、保護者としての姿勢の違い、また、そのときどきの状況に応じての違いなどから、このような数値になっていると考えられる。

自分より小さい子に親切にする

⑥ 自分より小さい子に親切に接することができるか。



できる53.1%・だいたいできる40.7%と高い数値である。殆どが小さい子どもとかかわる機会があると考えられる。

あやまることが、形式的に行われていないか懸念される。幼稚園での子ども同士の自然なかかわりの中では素直にあやまれない場面も多いことから、これは保護者が見ているという状況のもとでの姿であると思われる。自分の行動を振り返る(内省する)力や、相手を思いやる気持ちなど心情を育てることが重要であるから、形式的なあやまり方になっていないか考えてみる必要がある。

厳しく注意42.8%はどのような親子関係の中でなされているか疑問である。

子どもの気持ちや考えなど子どもの側の理由等を保護者が受けとめず、一方的に力でおさえつけるなどの方法になっていないか懸念される。本当に子どもが反省し、自分の行動を修正していくことにつながるような叱り方について、保護者に啓発していくことも必要であろう。

保護者が見ているときの状況であると思われることから、かかわりの内容が問題である。

(3) まとめ

◎ 5～6歳では生活行動の自立とともに精神的な面での自立も培われてくる。

『短い時間の留守番ができるか』から『自分より小さい子に親切に接することができるか』についてみると大体順調にのびてきていることが読み取れる。

『短い時間の留守番ができるか』から『お手伝いをするか』では、地域社会の変化から子どもに体験させにくい状況がある。しかし、子どもの自立の面から考えると、自分以外のことへも積極的にかかわることが精神的自立を助長していくことから、保護者が状況を整えて、勇気をもって体験させていくことや家庭生活の様々な場面で子どもが家事に関われるよう工夫することが望まれる。

『何でもやってみようとするか』から『困った時どうするか』では、生活への意欲、自立への構えが発達に相応して育っていることが伺える。

- ◎ 一方、幼児期に保護者に依存的に行動している傾向は小学校にいても変わっていないことが伺える。自発性や自立心は、幼児期の重要な発達課題であることから、自分で自分のことをする。自分の力で問題を解決するなどの態度を育てておかねばならない。
- ◎ 『玩具等欲しいものを我慢できるか』から『自分より小さい子に親切にするか』では自分の気持ちをふりかえったり、気持ちの立て直しなど、自己への認識感情のコントロール、自律心が発達に相応して育っていると考えられる。しかし、幼稚園の中で見られる子ども同士の自然なかかわりの場面では、保護者の回答とはズレが見られる場合がある。子どもが保護者の思いを感じ取り、保護者の前では保護者の望む方向で行動していることも考えられる。心情は形式にこだわったり、大人のことを一方的に押しつけたりしていたのでは、育たないことから、この点が心配される。

一方で、生活行動とともに、精神的にも自立が遅れている幼児もいる。生活環境の変化や保護者の教育観や養育態度によると考えられるが、幼児期は自立心とともに自発性や能動性を高めていくことが大きな発達課題であるので、保護者に積極的に啓発をしていく必要がある。

6. 子どもの生活に対する意識のまとめと提言

〈まとめ〉

アンケート調査の結果、対象となった幼児は、おおむね順当に成長発達していることがわかった。また、保護者も子どものよりよい成長を願って、よく手をかけ、言葉をかけていることが伺えた。

しかし、核家族化や少子化、情報化の進行、また、都市化による自然環境の減少など社会状況の変化は幼児の生活全体にも大きく影響を与えており、次のように問題と思われる傾向が見られた。

1. 核家族化、少子化により、保護者の期待が一人の子どもに集中するようになり、さらに、住宅の事情などによって、子どもの行動が常に保護者（大人）に見られている状態が生じている。また、大人の生活が時間に追われ、ストレスの多い中にいることから時間的にも精神的にもゆとりをもって子どもにかかわれない状況がある。このことは、子育ての不安となり、過保護、過干渉の傾向を増大させ、子どもの自発性や自主性など自立心の育ちに妨げとなっていると思われる。
2. 社会全体が夜型の生活になっていることが、家庭生活に影響し、幼児の生活のリズムや身体のリズムの乱れに繋がっていると思われる。
3. 遊びについては、室内での遊びが中心となり、戸外で自然と触れ合いながら十分身体を動かして遊ぶことが減っている。また、遊ぶ友達と予約して遊ぶことが多いので特定の友達などとの狭い友達関係の中で遊んでいる。また、平均してみると、子どもの遊びの時間の半分をテレビやゲームが占めており、直接体験の不足が心配される。さらに、人間関係においては家族を中心とした関係、幼稚園を媒介とした同年齢との関わりが中心となっていることが伺える。異年令の子どもとの遊びや地域の様々な人との関わりなど多様な人とのふれあいができるようにしていくことが必要と思われる。

〈提言・幼稚園教育へ〉

1. 幼稚園と家庭は、互いの役割を尊重し、補足し合って幼児の教育を行っていくものである。しかし、実態調査によれば、家庭での生活や遊びには様々な問題がみられる。したがって、幼稚園は、そうした実態を踏まえ、教育内容の一層の充実を図っていく必要がある。
 - ①自分のやりたいこと（目的）に向かってじっくり遊ぶ時間と場を確保すること。
 - ②友達との遊びを十分体験させること。
 - ③戸外で自然に触れながら思い切り身体を動かして遊べるようにすること。
 - ④身近な動植物との触れ合い、自然現象との出会いなど、自然体験が十分できるようにすること。
 - ⑤地域の人々とのかかわりや自然環境、施設等を保育に取りこみ、体験の幅を広げること。
2. 保護者は、生活の忙しさや溢れる情報の中で、子育てに迷ったり、自信を失ったり、子育ての楽しさがもてない状態にある。幼稚園は、そうした保護者の悩みや不安を受け止め支えながら、保護者と共に子どもの教育を考えあっていくことが必要である。
 - ① 幼稚園での子どもの姿を通して、子どもへの理解や発達への理解が深まるよう啓発し、子育ての本来の在り方を共に考えていく。
 - ② 具体的な生活の場面や遊びの場面を通してどのように子どもにかかわっていくか、保護者としてのかかわり方を一緒に考えたり、実践したりする機会を作る。
 - ③ 保護者とのコミュニケーションを十分図り、何でも話し合える人間関係を作る。
3. 幼児の発達は、幼児期から学童期へと繋がっており、望ましい発達を保証するためには、幼稚園と小学校が十分連携して教育を行っていくことが必要である。
 - ① 子どもを通しての連携、保護者を通しての連携、教員相互の連携など、総合的に考え、実情を踏まえ、できるところから実践、工夫していく。
 - ② 小学校の授業の内容、教科書、生活の仕方などについて理解を深める。

〈提言・小学校生活科へ〉

生活科は、小学校と幼稚園との接続を円滑にするために設けられた教科である。子どもの発達は連続しており、幼稚園生活から小学校へのスムーズな移行が見られることが望ましい発達を促すことである。

幼稚園教育のねらいや内容として押さえられていることが、小学校以降の学習の基盤に繋がることを理解し、さらに、実際に幼稚園でどのような教育が行われているかを知り、生活科の展開に工夫をしてほしい。

- ① 幼稚園を参観し、幼稚園生活や子どもの遊びへの理解を深めること。
 - ・生活や遊びを通して子どもが体験していることや学んでいることを捉え、幼児期から学童期にかけての発達の理解を深める。
 - ・実態に応じて遊びや活動の展開の仕方を工夫するなど、柔軟に指導を展開する姿勢や、指導の形態や方法、教材の多様さを理解する。
 - ・幼稚園は、一人一人に応じた指導が基本となっているので、個々への教師のかかわり方や言葉のかけ方を理解する。
- ② 保護者との連携を細やかにいき、保護者を授業や学校生活に取り込んで進めていくようにすること。
- ③ 生活科の学習を通して子ども同士や教師間の交流を図っていくようにする。

〈提言・保護者へ〉

幼児期の教育は、家庭が中心となって行われることが望ましい。家庭は、健全な愛情としつけを通して人間としての心の基盤を形成する場であり、衣食住を中心とした基本的な生活の仕方を習得する場である。しかし、実際には、生活行動の自立や遅れなど、様々な問題が生じており、必ずしも家庭がその役割を十分に果たしているとはいえず、望ましい状態とはいえない。保護者の役割と責任を十分理解し、幼稚園と連携を図りながら養育に当たっていく必要がある。

- ① 夜型の生活を見直して早寝早起きの習慣が身につくようにし、幼児期に相応しい生活のリズム、身体のリズムになるようにする。
- ② 子どもが「自分のことは自分です」という気持ちや態度が育つよう、時間のゆとりをもつと同時に、「待つ」気持ちのゆとりをもつ。「早く、早く」と急かさない。
- ③ 子どもの遊びを見守る姿勢をもち、口だし、手出しをしない。危なくない限り、子どもの行動を見守り、子どもに任せるようにする。
- ④ テレビやゲームなど間接情報や間接体験の遊びが多すぎないか留意する。
- ⑤ 家の仕事（家事）を一緒にやったり、手伝いや仕事として任せたりして体験の幅を広げる。
- ⑥ 室内遊びに偏らないように戸外での遊びを十分にさせるようにする。
- ⑦ 地域の行事への参加や施設の利用を積極的に行い、いろいろな人とかかわれるようにする。
- ⑧ 身近な動植物とも触れ合い、自然の中で遊ぶ機会をもつようにする。
- ⑨ 父親も積極的に子どもの教育に関わり、父母の役割を果たしながら子育てを楽しむようにする。

IV 生活科の学習に対する保護者の意識

■ 調査研究結果の概要

1 子どもの生活の実態

(1) 生活の自立

よく身につけている内容として、「近所の人に挨拶や返事ができる」「マナーを守って児童館や公園を利用する」「道を歩くとき、交通ルールを守る」「自分で電話をして必要なことを伝えたり聞いたりする」「自分の言いたいことや必要なことをきちんと表現する」「自分の住む地域の行事や催物に参加する」がある。また、必要なことを伝達したり、表現することも身につけている。地域行事への参加も、学校週五日制の導入に伴い大変よい傾向である。基本的な生活習慣については、家庭での指導も効果をあげていると考えられる。自己主張のできない子どものことが話題になるが、この調査結果では、人との基本的なコミュニケーションや自己表現はよく身につけていると回答している。また、地域行事への参加が多いことなどは、地域社会と学校との連携が進んでいることや、生活科などでの学習体験が効果を上げているとも考えられる。

しかし、達成が不十分な内容として、「家事のいくつかを責任をもってやる」「一人で電車やバスを利用して近くの目的地に行かれる」があげられている。

家事の一部を責任をもってやっていなかったり、一人で交通機関を利用できないことの原因は、生活科の授業での取り扱い方が不十分なことと、社会的状況への不安感などから保護者があまり子どもにさせていないことが考えられる。

◆ 教師の教材研究を活発に行う

教師が教材の選択や学習活動への苦手意識をもったり、面倒に感じたりすると学習が十分になされなくなる。教材研究の充実と指導方法の改善が必要である。

◆ 保護者との連携協力を強化する

家庭での手伝い等については生活科と家庭での役割、機能の分担等について十分話し合い、保護者へも生活の自立を目指すという活動の趣旨を十分に伝え、理解を得て活動の機会を増やしてもらう必要がある。

(2) 学習の自立

よく身につけている内容には、「身近な草花や草木、小動物などを大切に使う」「疑問や分からない事を親に聞いたり話したりする」「興味や関心のあることに夢中で取り組んでいる」「学習に必要なものを自分から準備できる」がある。

◆ 学習の生活化に向けた充実を図る

自然との触れ合いや、疑問の解決、活動への没頭、必要な物の準備などは、生活科で取り扱ってきた学習材や活動形態などが効を奏し、生活科の学習を通じて育ててきたものと考えられる。表現力や夢中になること、自分のことは自分ですることなど、自立の基礎に結び付くことは、生活化できるまで根気強く見守る親の姿勢の大切なことを強調しておきたい。

あまり身に付いていない内容には、「身近にあるお店や近所の人に自分から声をかける」「宿題がなくても勉強する習慣がついている」「近くの図書館や児童館を利用している」がある。

自分から人に声をかけたり、勉強をしたり、公共施設を利用するなどの行為はあまり身につい

ていない。これは、自発性の不足が原因として考えられる。また、社会状況が変化し、待ちの姿勢が増えたり、人間不信があったり、面倒なことは避けたがる傾向の増加が原因していると考えられる。人とのかかわり方が欠如していることが、今日的な解決課題であることが改めて痛感させられる。

◆ 人とかかわることの楽しさを体得できるようにする

生活科を中心にして、主体性を尊重した学習方法や学習形態を取り入れていくとともに、人や物とのかかわりの楽しさを体験させるような授業になるよう工夫と改善をしていく必要がある。また、保護者においても、すぐに手や口を出さず、子どもを見守り励ます姿勢の大切なことを認識してもらい、学校と家庭とが一貫して子育て、指導にあたるよう協力関係を築く。

(3) 精神的自立

よく身につけている内容には、「してよいことと、してはいけないことの判断ができる」「与えられた仕事は、責任をもってやることができる」「自分より小さい子やお年寄りに親切にできる」がある。比較的数値の低い項目には、「友達やまわりの人のよさを話す」「自分のよいところや得意なことに気付いている」がある。

善悪の判断、責任感、思いやりはよく身に付いているが、親の願いと一致しており、家庭での指導が効果を上げていると考えられる。また、生活科でもこれらにかかわる学習をしており、その効果も考えられる。

昨今の子どもたちの問題行動が社会問題化していることを考えると、生活科で身に付けたこれらの行動傾向が、長じて失われていくことは問題である。

◆ 子どもをあたたかく見守り自分でできることをふやす

精神的自立を図るためには、教師や親があまり手を出しすぎないことが重要である。これを実現するためには、子どもを信用し、任せられるようにならねばならない。教師の側では、十分な教材研究と、子どもを支援するというかかわり方が必要であり、親の方では過保護にせず、子どもの成長を見守り、子どもに任せる事柄を増やしていくようにすることが必要である。

◆ 子どものよさをほめ、自信をもって行動できるようにする

自分の力を存分に発揮し、それが自分のよさと覚知されるとき生きる上で大きな自信となる。また友達のよさをも素直に受け入れることで、他者と協調して生きる力の基礎となる。したがって、家庭や学校で自己の力を十分に発揮できる学校環境を整えるとともに、効果的なほめ方が必要である。

2 生活科についての保護者のとらえ方

(1) 生活科についての保護者の状況

親の生活科に対する理解度は低い傾向がある。教科書を見ていなかったり、子どもとの話題に出なかったり、授業を見たことのない人が多かったりと、生活科を理解する機会に欠けている。生活科が、今の子どもたちの発達課題の解決のために新設された教科であることを考えると、本格実施6年を経た現在、こうした状況は憂慮すべきことと言える。

◆ 教師は保護者に対して、保護者会や学年便り、授業参観などを通して、生活科の趣旨やねらい、活動を伝えることにより、一層の理解と協力を求め、連携していかなければならない。

(2) 生活科の学習で必要と考える内容

動植物など自然とのかかわりは、ほとんどの親が必要と感じている。これは、人間関係の希薄化

や豊かな心の育ちが問題にされているからであろう。交通機関の利用や買い物、料理、靴・食器洗いなどについてあまり必要と思わない親が11～13%ほどいたが、家庭での価値観の違いが表れている。家庭で、こうした内容を子どもに身に付けさせるべく親が意識してやっておれば問題はないが、単に「こんなことまで子どもに」という意識があるとすれば問題である。これらの活動については、親に趣旨をよく伝えるとともに意見を聞きながらどのような活動形態をとるのがよいかを検討していかなければならない。

(3) 生活科の学習に期待すること

思いやりとやる気の形成への期待が大きい。現在の子どもたちの状況から当然の期待と言える。生活科の活動においても、これらの心が育つよう活動内容や指導方法の工夫をしていかなければならない。

また、公共心・道徳心などの内容は、あまり期待していない人が多かった。これらは、道徳教育などで指導を期待しているものと推測される。しかし、これらの内容も、生活科の中でも育っていくものなので、道徳やその他の指導と連携しながら取り扱っていく必要がある。同時に、これらの内容は、家庭でのしつけの基本的な内容でもあるので、連携・協力が重要である。

3 回答者の状況について

〈テーマ〉

生活科の教材と家庭学習に関する研究

〈調査目的〉

- (1) 自立の基礎を養うという生活科の目標に照らした子どもの学校、家庭での生活の様子をとらえる。
- (2) 小学校1・2年生について、自立の基礎のおよその傾向をとらえる。
- (3) 生活科に期待する家庭や地域の人たちの意識を明らかにする。

〈仮説と調査項目〉

(1) 仮説

- ① 学校週五日制の実施は、学校と家庭との連携が大切な課題であるが、生活科で学んだことが家庭で十分活用されていないのではないか。
- ② 現在の生活科の教材は、学校と家庭の連携をするのに十分なものとは言えないのではないか。

(2) 調査項目

- ① 生活の自立に関するもの
- ② 学習の自立に関するもの
- ③ 精神的自立に関するもの
- ④ 生活科に対する意識に関するもの

〈調査対象と標本の抽出方法〉

(1) 調査対象

小学校1・2年生児童の保護者

(2) 標本の抽出方法

- ① 標本抽出地域は、大・中都市、小都市、農・漁・山村とする。
- ② 上記の地域に位置する学校の中で、協力を得られる保護者。

〈調査方法〉

郵送調査

〈実施期間〉

平成9年7月～9月

〈回答者の人数と回答率〉

(1) 回答者数 779名

(2) 回答率 42%

〈回答者の状況〉

(1) 子どもの学年・性別

学年 \ 性別	男	女	無記入	全体
1年生	194	191	2	387
2年生	153	162	2	317
3年生以上	22	17	1	40
無記入	22	11	2	35
全体	391	381	7	779

(2) 一緒に住んでいる家族の数

(%)

学年 \ 家族	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10上	実数
1年生	0.8	0.8	5.2	41.3	21.4	19.1	7.2	3.4	0.8	0.0	387
2年生	0.3	0.6	8.5	49.2	15.8	18.3	4.4	2.2	0.3	0.3	317
3年生以上	0.0	0.0	5.0	50.0	10.0	22.5	10.0	0.0	2.5	0.0	40
無記入	0.0	0.0	8.6	45.7	22.9	17.1	5.7	0.0	0.0	0.0	35
全体	0.5	0.6	6.7	45.2	18.6	18.9	6.2	2.6	0.6	0.1	779

(3) 一緒に住んでいる家族の内訳 (その他は省略)

(%)

学年 \ 家族	父		母		祖父		祖母		兄弟姉妹				実数
	0人	1人	0人	1人	0人	1人	0人	1人	0人	1人	2人	3上	
1年生	2.1	97.9	1.6	98.4	72.0	27.4	70.0	30.0	7.8	69.0	17.3	5.9	387
2年生	1.9	98.1	1.3	98.7	78.9	21.1	74.1	25.9	10.7	73.5	11.4	4.4	317
3年生以上	0.0	100.	0.0	100.	70.0	30.0	65.0	35.0	7.5	77.5	10.0	5.0	40
無記入	0.0	100.	2.9	97.1	77.1	22.9	65.7	34.3	11.4	80.0	5.0	2.9	35
全体	1.8	98.2	1.4	98.6	75.2	24.8	71.2	28.8	9.1	71.8	14.0	5.1	779

(4) 子どもの出生順位 (%)

学年 \ 順位	1子	2子	3子	4上	不明	実数
1年生	40.1	38.8	19.6	1.6	0.0	387
2年生	37.9	45.4	14.5	1.3	0.9	317
3年生以上	57.5	25.0	17.5	0.0	0.0	40
無記入	31.4	48.6	14.3	2.9	2.9	35
全体	39.7	41.2	17.2	1.4	0.5	779

(5) 回答者の年代 (%)

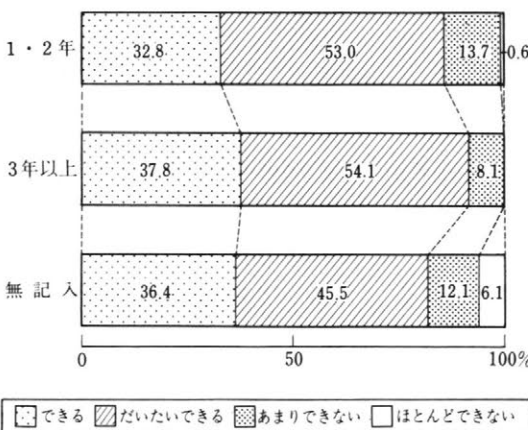
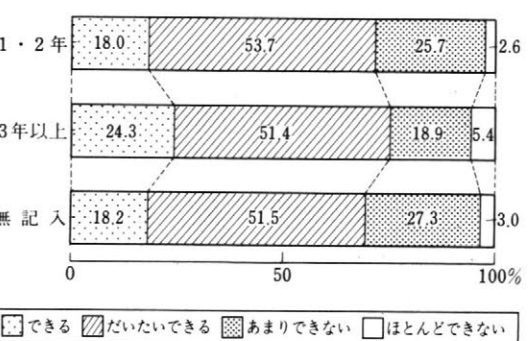
学年 \ 年代	20代	30代	40代	50代	実数
1年生	3.9	81.1	14.7	0.3	387
2年生	1.3	77.0	21.8	0.0	317
3年生以上	0.0	77.5	22.5	0.0	40
無記入	8.6	68.6	20.0	2.9	35
全体	2.8	78.7	18.2	0.3	779

(6) 回答者の居住地域 (%)

学年 \ 順位	大都	中都	小都	農村	漁村	山村	実数
1年生	4.2	28.5	48.8	16.4	0.8	1.3	379
2年生	6.4	28.2	44.6	17.9	1.0	1.9	312
3年生以上	5.1	33.3	38.5	15.4	5.1	2.6	39
無記入	2.9	26.5	38.2	32.4	0.0	0.0	34
全体	39.7	41.2	17.2	1.4	0.5	1.4	764

1. 子どもの生活の実態

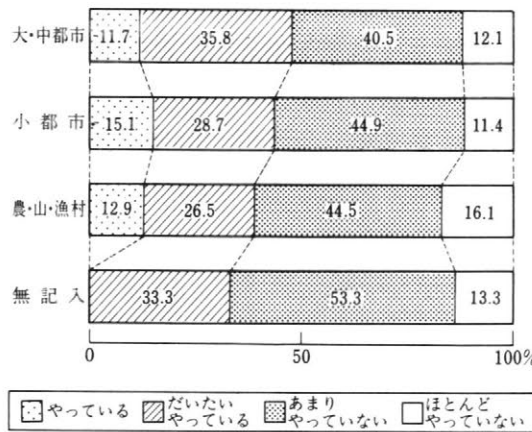
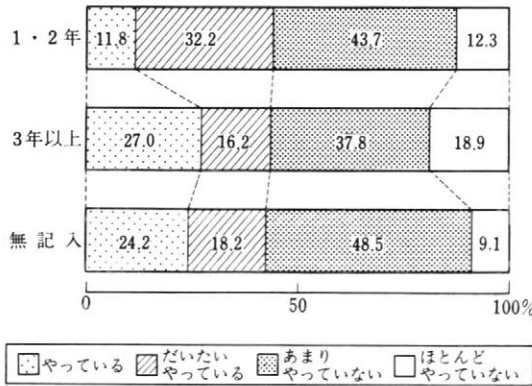
(1) 生活の自立の実態

見出し	調査結果と分析	考 察																				
あいさつや返事	<p>(1) 近所の人にあいさつや返事ができますか。</p>  <table border="1" data-bbox="294 436 816 862"> <caption>あいさつや返事ができますか</caption> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>できる</th> <th>だいたいできる</th> <th>あまりできない</th> <th>ほとんどできない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1・2年</td> <td>32.8</td> <td>53.0</td> <td>13.7</td> <td>0.6</td> </tr> <tr> <td>3年以上</td> <td>37.8</td> <td>54.1</td> <td>8.1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>無記入</td> <td>36.4</td> <td>45.5</td> <td>12.1</td> <td>6.1</td> </tr> </tbody> </table> <p>できる子の数は、学年が上がるにしたがって増えているが、30～40%の範囲である。だいたいできるが、各学年とも52%ぐらいで差がない。あまりできない子が1年生で15.5%だったのが、学年が上がり、11～10%と減少している。</p> <p>保護者へのあいさつは、幼稚園の結果では61%の子どもができています。保護者と近所の人という違いはあるが、生活科で指導していることとも合わせて考えると、低学年児童の達成度はあまり良くない。あいさつは対人関係の最も基本的な事柄であり、気掛かりなところである。</p>	学年	できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	1・2年	32.8	53.0	13.7	0.6	3年以上	37.8	54.1	8.1		無記入	36.4	45.5	12.1	6.1	<p>あいさつは、その家庭での生活習慣が影響しやすい。保護者がよくあいさつをする家庭で育てば、子どもも必然的にそれを見て学び、自分からもあいさつをするようになる。</p> <p>「あいさつができる」と言える子どもが少ないのは、保護者の影響もあると考えられる。それと同時に、生活科での指導があまり効果をあげていないことも考えなければならない。</p> <p>あいさつがあまりできないのは、町に出てあまり知った人に出会わなかったり、人とかかわる機会や必要性の減少が、あいさつの習慣を定着させない要因になっていると考えられる。</p> <p>今後は、家庭でのあいさつの習慣形成を働きかけると同時に、生活科の活動の中にもあいさつをする場面をより多く取り入れ、生活習慣化させる必要がある。</p>
学年	できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない																		
1・2年	32.8	53.0	13.7	0.6																		
3年以上	37.8	54.1	8.1																			
無記入	36.4	45.5	12.1	6.1																		
後片づけ	<p>(2) 自分で使ったものの後片付けはできるか。</p>  <table border="1" data-bbox="294 1583 816 1921"> <caption>自分で使ったものの後片付けはできるか</caption> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>できる</th> <th>だいたいできる</th> <th>あまりできない</th> <th>ほとんどできない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1・2年</td> <td>18.0</td> <td>53.7</td> <td>25.7</td> <td>2.6</td> </tr> <tr> <td>3年以上</td> <td>24.3</td> <td>51.4</td> <td>18.9</td> <td>5.4</td> </tr> <tr> <td>無記入</td> <td>18.2</td> <td>51.5</td> <td>27.3</td> <td>3.0</td> </tr> </tbody> </table>	学年	できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	1・2年	18.0	53.7	25.7	2.6	3年以上	24.3	51.4	18.9	5.4	無記入	18.2	51.5	27.3	3.0	<p>これも生活習慣の問題が大きい。家の中でのごくことで、母親の過保護的な傾向がうかがえる一面ともいえる。また、家庭で片付けをしないのは、保護者への依存があるからかもしれない。学校でも片付けがうまくできない子どもがいるが、これは学校での指導の不十分さと同時に、今までの生活習慣の問題が大きい。</p> <p>自立するためには、自分のことは自分でできるようにならなければならない。これを達成させるために、保護者がやっ</p>
学年	できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない																		
1・2年	18.0	53.7	25.7	2.6																		
3年以上	24.3	51.4	18.9	5.4																		
無記入	18.2	51.5	27.3	3.0																		

「できる」子の数が、平均で18.2%。「あまりできない」「ほとんどできない」が合わせて28%あることを見ると、学年に関係なく、全体的に片付けについてはできていない。また、幼稚園の結果で、「自分でする」が16%あったが、それから見てもあまり進歩していない。

家の仕事

(3) 家事のいくつかを責任をもってやっているか。



「あまりやっていない」、「ほとんどやっていない」子どもがどの学年も約55%おり、生活科での学習効果はあまり見られない。また、園児の結果で、お手伝いをしている子どもが21%いることを考えると、質の違いはあるだろうが、児童の調査で、やっている数が13%というのは低い。

居住地域による差はあまり認められないが、大・中都市が平均以上にやっている。

てしまう傾向を改め、自立のために必要な行動として、保護者への啓発と同時に、生活科の学習を中心に、授業中での片付けをいい加減にせず、活動の一環であることをさらに徹底すると同時に、日常生活の中でも指導していかなければならない。

生活科で指導している内容にもかかわらず、あまり結果がよくない。これは、家庭で責任を持たせているかどうかにも関係があると考えられる。

子どもがやりたいと思っても、やらせてもらえない場合もある。これは、生活科に対する親の理解が不十分であることも関係していると思われる。

一方、生活科での指導の不十分さも考えられる。家の仕事にかかわる活動は、必要と考えるが取り組みにくい活動としてあげられることが多い。

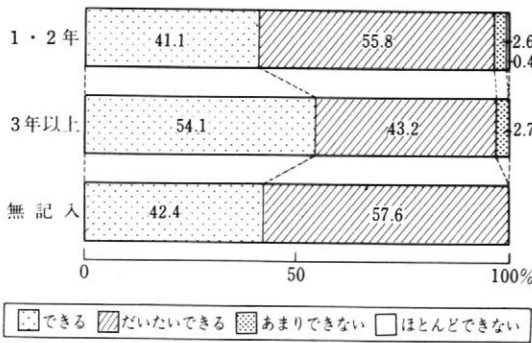
子どもたちの家事的な労働が減少している今日、生活の自立という点から家の仕事をするのは、解決課題であると言える。

保護者にもその趣旨を十分に伝え、仕事をする機会をもたせるよう啓発していく必要がある。

また、教師の側も、具体的な取り組みができるよう、継続して見守り励ましていく必要がある。

公共施設の
利用

(4) マナーを守って児童館や公園を利用できるか。



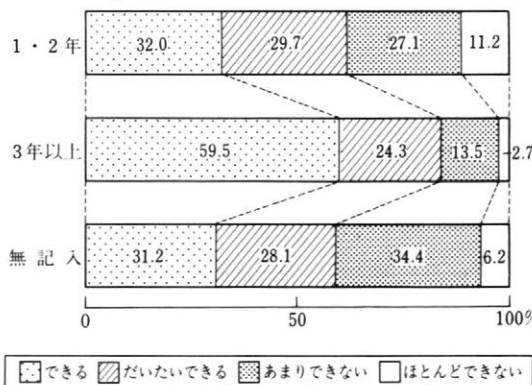
「だいたいできる」も含めると、ほとんどの子どもがマナーを守って利用している。

公共施設の利用は、幼児のころから親と一緒に行動しており、その過程でも身に付けてきていると考えられる。また、生活科でも1、2年を通して公共施設を利用する活動を取り入れているので、その効果もあると考えられる。

しかし、「できる」といえる子どもが40%前後というのは問題である。また、「できる」の内容も、人が見ていればできるということであったとすれば問題である。

必要な買い
物

(5) 必要な文房具などを自分で買いに行くことができるか。



「できる」子どもが1年生24.9%、2年生41.5%と学年が上がるにしたがって上昇している。半面、「あまりできない」「ほとんどできない」を加えると、できない子どもが平

社会の一員として責任をもって生活するためには、マナーを守って公共施設が利用できなければならない。

生涯学習社会を生きていくためにも、保護者にも施設利用の意識を高めてもらい、子どもの利用状況を知ってもらうと同時に、生活科でも公共施設を利用する活動を積極的に取り入れ、その正しい利用習慣を身に付けさせたいものである。

考え方はいろいろあるが、自分に必要な買い物ができるようになることは、自立した人間に育っていく上で、必要な力である。

意思決定のできる、賢い消費者を育てるという観点からも、教師も買い物にかかわる活動に対する意識を変えると同時に、一部の保護者に対しても啓発していかねばならない。

買い物ができるかどうかは、買い物の機会があるかどうかに関係する。また、今日の社会状況から、親の考えで子どもに買い物をさせない家庭もある。

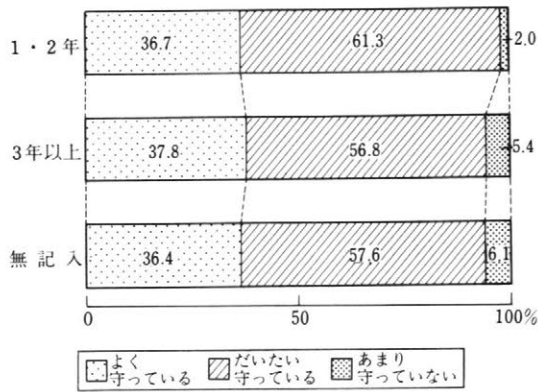
生活科でも、買い物の活動はあまり多くない。教師の調査で、「買い物が適切である」と答えているのは、62.2%であ

均で36.9%いる。

幼稚園児で「簡単なお使いができる」が80%だったことと比較すると、やや矛盾もあるが、これは、自分に必要な物と、頼まれた物との買い物の質の違いだと考えられる。

る。このことも、「できない」子どもが相当数いることの要因になっていると考えられる。

交通ルール (6) 道を歩くとき、交通ルールを守っているか。



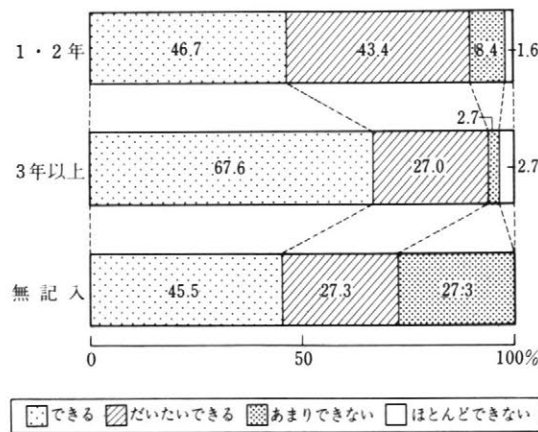
「よく守る」が、1年生32.8%、2年生40.4%と学年とともに上昇している。「だいたい守る」を含めると約90%ができている。

交通安全については、安全指導や校外学習の場を通じて繰り返し指導している結果が表れていると考えられる。

子どもの交通事故はあまり減っていない。自分の身の安全を守ることは、基本的な生活習慣の重要な柱である。生活科でも校外に出かける活動がますます増えると予想されるので、「よく守る」子どもがもっと増えるよう、指導を徹底させていかねばならない。自分の身を守るようにすることは大事な指導である。

交通安全に対する保護者の態度は、単に「気を付けなさい」で終わっている傾向はないだろうか。行動が先行する低学年の子どもには、親の目が必要である。

必要なこと (7) 自分で電話をして、必要なことを伝えたり聞いたりすることができるか。



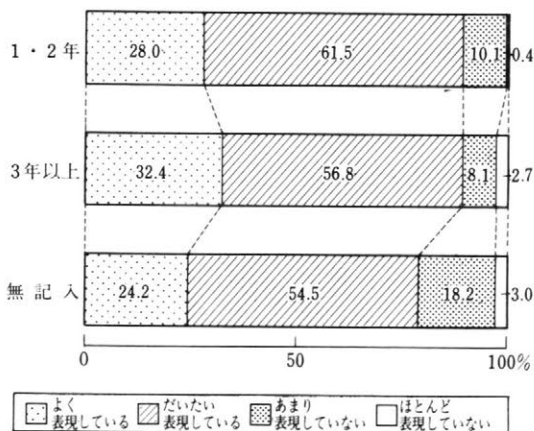
「できる」子どもは1年生43.2%、2年生51.6%と学年の上昇とともに増加している。

現代社会において、電話は重要なコミュニケーションの手段である。生活科で取り上げる場合は、適切な利用方法やマナーの指導に重点を置く必要がある。

「だいたいできる」と合わせると、1年生では87.9%、2年生では93.1%になり、かなりの達成度である。

これは、電話が普及し、日常生活の中で子どもが交友の道具として利用する機会が増えていることの結果だと考えられる。また、年齢が上がるにしたがって、親の電話をかけることへの許容度が上がることも要因として考えられる。生活科でも取り扱っているが、その程度は低く、家庭での経験が大きく役立っていると推測される。

表 現 力 (8) 自分の言いたいことや必要なことをきちんと表現しているか。



「できる」は1年生43.2%、2年生51.6%、「だいたいできる」1年生44.7%、2年生41.5%と、約90%の子どもがだいたいできている。「あまりできない」「ほとんどできない」を合わせた子どもが、1年生12%、2年生7%いる。

表現力は、だいたい身に付いていると考えられるが、あまりできない子どもが1年生2年生とも10%ほどいることは、注目しなければならない。

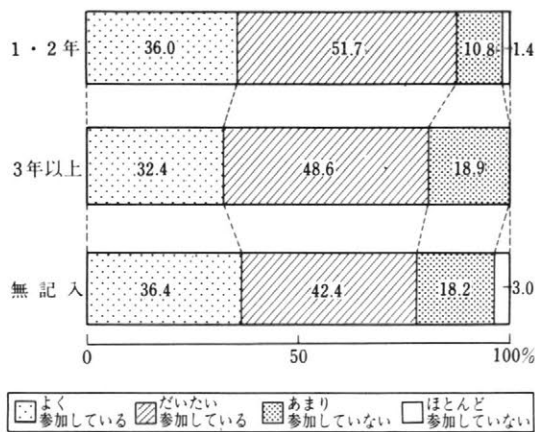
一方、子どもたちの学校生活での自己表現力を考えると、家庭での実態との落差を感じる。

このことは、発達状況や、本人の性格特性が関係しているかもしれない。しかし、自分の意思をはっきりと表現することは、自立して社会生活を送る上で重要な能力である。

集団生活の中での自己表現の弱さからの問題行動が指摘されている昨今、子どもの状況に応じて意図的な指導をしていく必要がある。

地域行事への参加 (9) 自分の住む地域の行事や催し物に参加しているか。

地域社会の中で生きていく上で、地域とのかかわりをもつことは重要な事であ

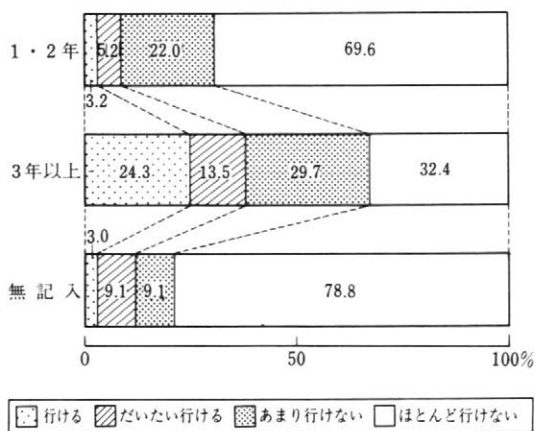


「よく参加」「だいたい参加」を合わせると、約87%いる。「あまりしない」「ほとんどしない」子どもが13.2%である。

生活科では、地域とかかわる活動を多く取り入れているが、その効果もあると考えられる。また、実態としては、子どもたちが自主的に参加するというより、保護者と連れ立ってという親の働きかけもあるのであろう。

交通機関の利用

(10) 一人で電車やバスを利用して近くの目的地に行くことができるか。



ほとんど行けない子どもの数が1年生77.1%、2年生59.2%と減少している。また、だいたい行ける子どもは、約6%から13%と学年の上昇とともに増加している。

これは、発達効果とともに、学習効果があったと考えられる。しかし、だいたい行ける子どもが少ないことは、生活科であまり扱われなかったり、利用する機会の不足や親の考えで実行できなかったりすることがあるためと考えられる。教師の結果で、この活動が

る。

学年が上がるにしたがって、習い事などが増え、地域行事への参加が減る傾向にある。しかし、地域の中で育ち、生きていくという観点から、保護者、地域住民と協力して、地域行事や催し物への参加を増やし、地域社会の一員として行動できる子どもに育てていく必要がある。

地域の特徴や安全性の問題から、あまり乗り物を利用させないことがある。だからこそ、生活科で基本的な利用方法を身に付けさせる意義がある。しかし、この活動の必要性については、様々な考えがあるので、安全を最優先にしながら、できるだけ体験する機会を持てるような活動を設定していく必要がある。また同時に、保護者との意志疎通や、教師同士での話し合いも必要である。

社会的状況に様々な問題があるにしても、「一人で」という機会を増やしていくことは、生活の自立には欠かせない事柄である。

「適切である」が53.9%、親の結果で「どうしても必要」が44.3%と他に比べて低いことも関係していると考えられる。

◎ よく身につけている内容は、「近所の人に挨拶や返事ができる」「マナーを守って児童館や公園を利用する」「道を歩くとき、交通ルールを守る」「自分で電話をして必要なことを伝えたり聞いたりする」「自分の言いたいことや必要なことをきちんと表現する」「自分の住む地域の行事や催し物に参加する」である。

達成が不十分な内容は、「家事のいくつかを責任をもってやる」「一人で電車やバスを利用して近くの目的地に行くことができる」である。

この結果を見ると、あいさつやマナーなどの基本的な生活習慣はよく達成している。また、必要なことを伝達したり、表現することも身に付いている。地域行事への参加も、学校週五日制の導入に伴い大変よい傾向である。基本的な生活習慣については、家庭での指導も効果をあげていると考えられる。自己主張のできない子どものことが話題になるが、この調査結果では、人との基本的なコミュニケーションや自己表現はよく身に付いている。また、地域行事への参加が多いことなどは、地域と学校との連携が進んでいることや、生活科などでの学習経験が効果を上げていると考えられる。

家事の一部を責任をもってやっていない、一人で交通機関を利用できないことの原因は、生活科の授業での取り扱い方が不十分なことと、社会的状況への不安などから、親があまり子どもにさせていないことが考えられる。

生活科の学習で大切なことは、人間としての生活能力や学習能力を身に付け、日常生活の自立を目指すことにある。生活科の学習時だけで、その後の生活にそれが生かされないということがあれば、学習したとは言えない。学校も家庭もこうした観点から、生活科の学習に心を寄せるべきである。

特に、教師が教材の選択や学習活動への苦手意識をもったり、面倒に感じたりすると学習が十分になされなくなる。教材研究の充実と指導方法の改善が必要である。また、保護者へも生活の自立を目指すという活動の趣旨を十分に伝え、理解を得て活動の機会を増やしてもらう必要がある。

(2) 学習の自立の実態

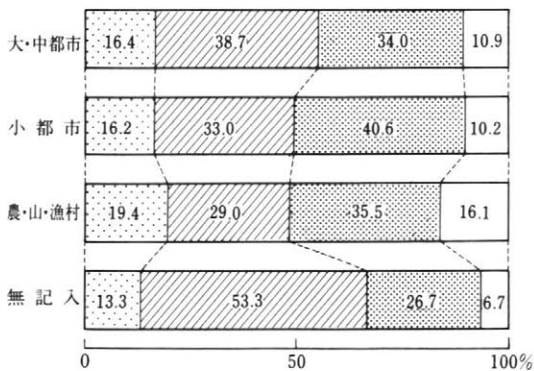
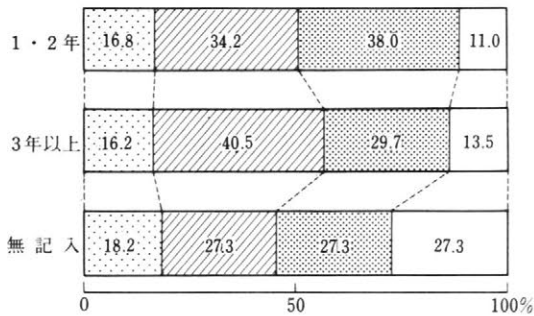
見出し	調査結果と分析	考察																
動植物を大切に 大切にする	<p>(11) 身近な草花や草木、小動物などを大切にしているか。</p> <table border="1"> <caption>身近な草花や草木、小動物などを大切にしているか</caption> <thead> <tr> <th>年齢</th> <th>大切にしている (%)</th> <th>だいたい大切にしている (%)</th> <th>あまり大切にしている (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1・2年</td> <td>48.3</td> <td>45.3</td> <td>6.3</td> </tr> <tr> <td>3年以上</td> <td>54.1</td> <td>35.1</td> <td>10.8</td> </tr> <tr> <td>無記入</td> <td>36.4</td> <td>54.5</td> <td>9.1</td> </tr> </tbody> </table> <p>0 50 100%</p> <p> <input type="checkbox"/> 大切にしている <input checked="" type="checkbox"/> だいたい大切にしている <input type="checkbox"/> あまり大切にしている </p>	年齢	大切にしている (%)	だいたい大切にしている (%)	あまり大切にしている (%)	1・2年	48.3	45.3	6.3	3年以上	54.1	35.1	10.8	無記入	36.4	54.5	9.1	<p>身近な自然とのかかわりは、子どもの成長にとって、特に今日的課題である「生命の尊重」ということから、大変重要な体験である。</p> <p>ここでの結果をふまえ、生活化するよう指導を充実させていく必要がある。</p>
年齢	大切にしている (%)	だいたい大切にしている (%)	あまり大切にしている (%)															
1・2年	48.3	45.3	6.3															
3年以上	54.1	35.1	10.8															
無記入	36.4	54.5	9.1															

1年生、2年生とも傾向は同じで、「大切にしている」が48.3%「だいたいする」が45.2%でよくできている。園児の結果で、「好き」「とても好き」の子どもが、約72%であることと比較すると、生活科の効果があったと考えられる。

生活科では自然とのかかわりを大切にしているが、その効果が表れていると考えられる。また、教師がよく行う活動の筆頭にもあがっており、その関係が裏付けられる。

近所の人に
声をかける

(12) 身近にあるお店や近所の人に、自分から声をかけることがあるか。



「よくかける」「だいたいかける」を合わせた数と、「あまりかけない」「ほとんどかけない」を合わせた数はほぼ同数である。学年による差もあまり見られない。居住地域の差は、大・中都市がよく声をかけている。

この原因としては、人との出会いの機会の少なさや、生活科での取り組みの不十分さが考えられる。地域社会が変化しており、変質者が出没するなど自由に声をかけられない状

生活科では、状況に応じた声のかけ方や、日頃からの町の人々とのコミュニケーションの確立に力を入れた活動を充実させていく必要がある。

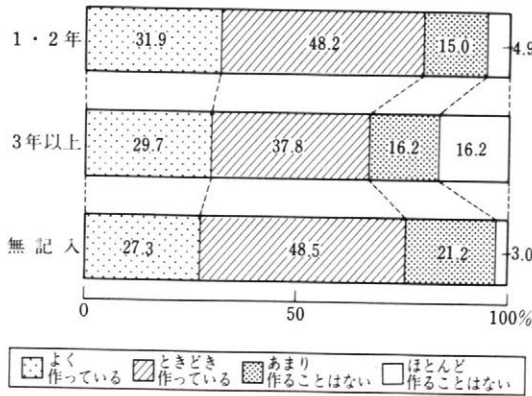
また、保護者に対しても近所付き合いの必要性を訴えていかねばならない。

況もある。

しかし、困ったことが生じた時など、自分から声をかけられることも重要である。

使うものを作る

(13) 自分から遊びや生活に使うものを作ることがあるか。

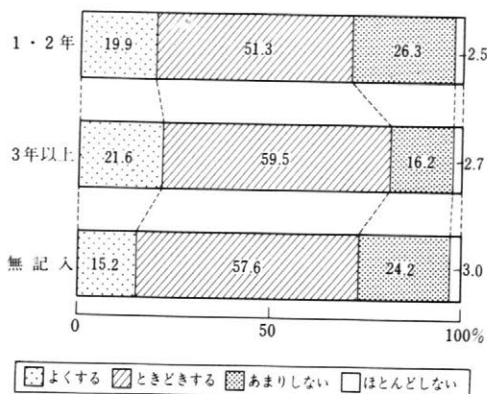


「よく作る」31.9%「時々作る」48.2%で、合わせると約80%が作ることができる。その状況に学年による差は見られない。園児の結果の「よく遊ぶ」47.8%と比較すると児童の「よく作る」31.5%は低い。

これは、遊びの形態の変化が関係していると考えられる。園児は様々な物に対する興味関心が強く、何でも遊び道具にしてしまうことが多い。小学生になると遊びの変化に伴い、作って遊ぶことよりも、でき合いの物での遊びを覚えるからではないだろうか。一方、親の意識もさることながら、子どもたちの学校外での生活の忙しさにも起因していると考えられる。

自分から解決しようとする

(14) 分からない事や疑問に思ったことがあるとき、自分から解決しようとするか。



学校では楽しく活動しているのだから、それを生活の中でも生かせるよう「既製品で遊ぶよりも楽しい」という経験を数多くさせ、創造性を養っていかねばならない。

生活科では、身近な材料を活用して自分の生活を豊かにすることをねらっているが、その指導がまだ十分でないことが考えられる。

家の中で遊ぶ傾向が強い子どもたちの生活実態を変えていくためにも、「自分で作る」という体験の場を増やしていく必要がある。

そのためには、家庭においても、欲しがるものをすぐに買い与えるのではなく自分で工夫して作って遊ぶような対応をする必要がある。また、家族や地域の人から作り方や遊び方を教わる経験をするにより、作る楽しさを覚えるようになる。

家庭や地域との一層の連携が必要である。

この結果は、保護者の過保護、過干渉、子離れのできない保護者の増加とも関係していると思われる。子どもが自分で解決しようとする前に、保護者の方が手を差し出していないか、教師の側も、じっくり待たずに先に答えを教えてしまっていないかということを反省する必要がある。

自分で問題を発見し解決する力は、よりよく生きていく上で、重要なものである。

この力を身に付けさせるために、教師

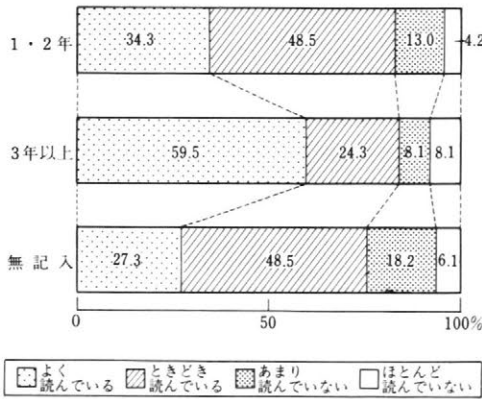
「よくする」19.9%「ときどきする」51.3%「あまりしない」26.3%「ほとんどしない」2.5%。この結果から見ると、あまり達成できていない項目である。幼稚園の結果の「困ったときにはじめから助けを求める」23%と比較しても進歩が少ない。

このことは、子どもたちの依存傾向が強く、それが改善されていないことを示している。現代の子どもたちの指示待ち傾向を考え合わせても、自立という点からは大きな問題である。

主導の与える指導から、自分で選択できる指導に変えていかねばならない。失敗を積み重ねることにより、自ら判断し解決する力が育ってくる。

また、保護者も直ぐに答えを教えるのではなく、自分で考えるのを待ったり、考える方法を教えたり、一緒に考えたりするようにしなければならない。

読書量 (15) 教科書以外のいろいろな本を手にとって読んでいるか。



「よく読む」34.3%「ときどき読む」48.5%で、比較的良好に読んでいる。しかし、あまり読まない子どもが17.2%いる。このことは、テレビ、ファミコン、マンガなど、家庭での生活のあり方に関係していると思われる。

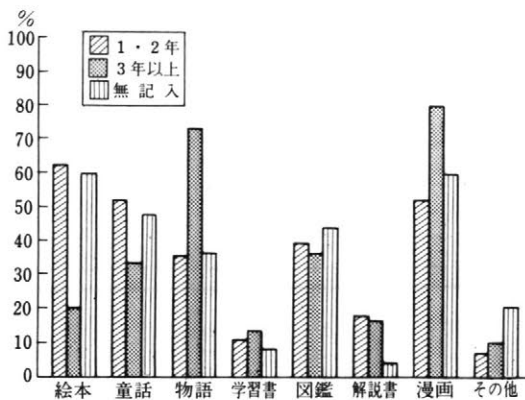
活字離れは、低学年の子どもに限ったことではない。中高生や大学生などについてもよく問題にされることである。

その一方、読書好きで図書館を頻繁に利用している児童もいる。

教科書以外の本を読むかどうかは、本のおもしろさを知っているかどうかが大きく関係する。学校での読書指導が十分行われていないことも考えられる。また、保護者が子どもに読み聞かせをしているかどうか、子どもの読書意欲に大きく影響する。

楽しむ本、調べる本など、様々な分野の図書に興味や関心をもてるよう働きかけたり、触れる機会を設けていかねばならない。

読書傾向 ◇「読んでいると答えた方にお聞きします。主にどんな本を読んでいるか。(最大3つまで複数回答)



生活科や他の教科においても、調べ学習などに図書室を活用できるよう読書指導を充実させ、学習の自立を目指していく必要がある。また、家庭における文化的環境の整備も必要である。

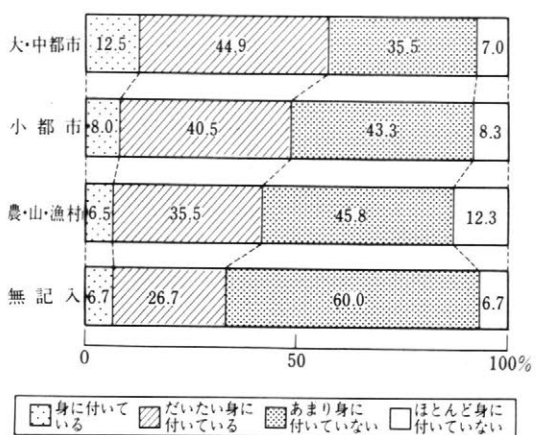
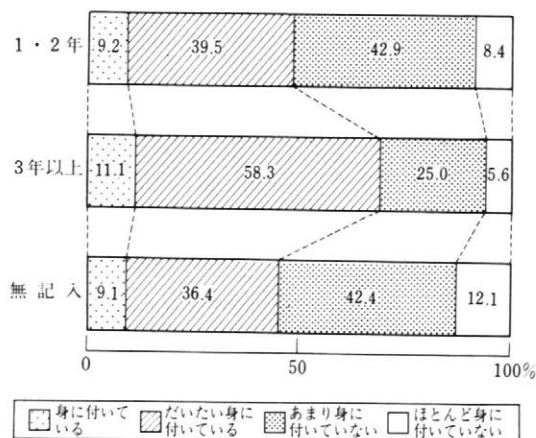
図鑑、解説書、学習書の順である。学習関係の本についての、学年間の傾向に差は無い。

1年生は絵本、童話が多いが、2年生になると物語、図鑑、マンガが増える。学習書についてはあまり変化がない。教科書中心の家庭学習や、活字離れの傾向と関連していることがうかがわれる。

自分の世界を広げる上で、読書は重要な役割をしている。読書離れが問題にされるが、この調査結果からも読書量の少なさが読み取れる。また、問題解決には、学習書や図鑑などが役に立つが、あまり活用されていない。

学習習慣

(16) 宿題がなくても勉強する習慣が身に付いているか。



学習習慣は、「だいたい身に付いている」を含めても約50%である。1、2年生ではあまり身に付いていない。居住地では、大・中都市が他の地域に比べてよく身に付いている。

これは、習い事などのために自分で勉強する時間がとれなかったり、低学年のうちま

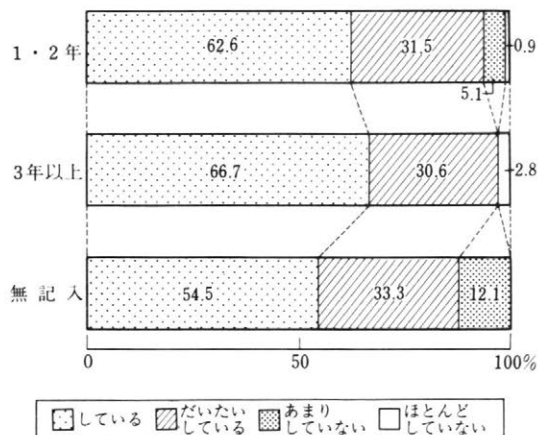
指示されて学習するのではなく、自分の必要によって自発的に学習する習慣を身に付けることは、変化に対応して生きていく上で重要なことである。

そのために、学ぶことの楽しさが味わえたり、学び方が身に付くような学習活動が展開できるよう、工夫をしなければならない。また、家庭においても親が子どもの学習に関心を示し、与える学習から求める学習に変化させるよう、指導助言していく必要がある。

だ遊ばせたいという保護者の意識が原因として考えられる。

疑問を質問する

(17) 疑問に思ったことや分からないことなどを、親に聞いたり話したりしているか。



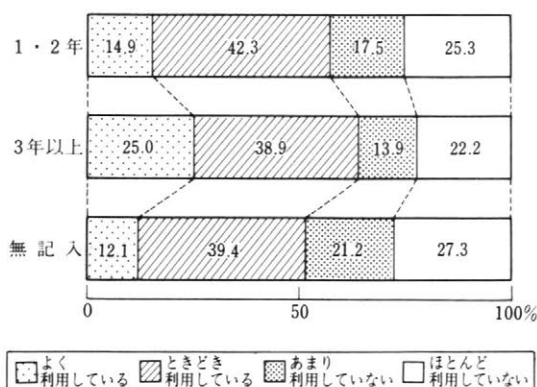
1、2年生とも約94%がだいたいしている。

この事は、好奇心の表れと考えられ、よい傾向である。また、学校での実態とは状況が違うが、親と子の信頼関係がよくできていると考えられる。

いつも聞いてばかりでは、依存心が強くなり、自分で解決する力が育たなくなる。親に聞いたり話したりするなかで、自分なりの解決方法を見つけられるように育っていかなければならない。そのため、答える側も答えをそのまま与えるのではなく、自力で解決できる方法を教えることも考える必要がある。

公共施設の利用

(18) 近くの図書館や児童館などを利用しているか。



利用の度合いは、学年が上がるほどに上昇している。しかし、利用率は、「ときどき」も含めて57%とあまり高くない。

その原因として、習い事が多かったり、親の利用経験不足が考えられる。

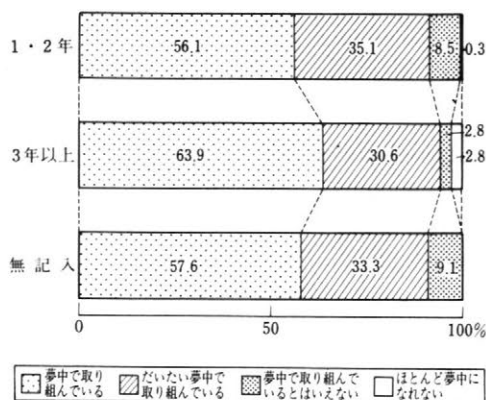
地域の一員として、地域にある施設とかかわることは重要なことである。特に図書館は、自ら学ぶためにも利用できるようになることが望ましい。

生活科の活動にも公共施設の利用を積極的に取り入れ、子どもたちが親しみをもち、自分のために活用できるようにしていかなければならない。また、保護者にも施設の利用を呼びかけ、利用が日常化するように働きかけていくことが大切である。

夢中で取り組む

(19) 興味や関心のあることに、夢中で取り組んでいるか。

多様な活動や体験を授業に取り入れることにより、その子の「よさ」を認め、



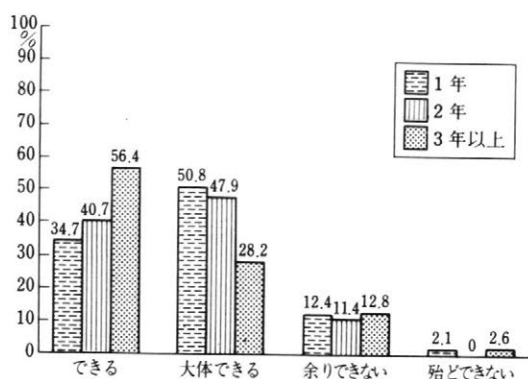
90%以上が、夢中か、大体夢中で取り組んでいる。半面、夢中になれない子どもが8.8%いる。

しかし、この数字は、夢中になる対象が何であるかが問題であり、学習の自立という観点からの見直しも課題であろう。

子どもは本来好奇心の固まりで、興味や関心をもったことには夢中で取り組む。一方夢中になれない子どもがいることは問題である。保護者の干渉が多いことも要因の一つであろう。

必要な物を準備する

20) 学習に必要なものを自分から準備できるか。



「できる」は、1年生34.7%、2年生40.7%と学年が上がるにしたがって増えており、87%位の子どものがだいたいできている。その反面、あまりできない児童が、12%ほどおり、学年が変わっても変化していない。このことは、できない子どもはできないままにしていると考えることができる。母親の社会進出が要因になっているのであろうか。また、朝の起床とも関係しているのであろうか。

励まし、子どもにいろいろな目をもたせる必要がある。

その中から、自分に合ったものを見つけ出せるよう支援していく必要がある。

子どもが何かに夢中になっているとき、周りからの口出し、手出しは厳につしむよう、保護者も教師も心すべきであろう。

保護者が何でも手を出すことにより、子どもは自分から準備しようとしなくなる。自分のことは自分でやるという習慣形成は、子どもが自立する上で重要なことである。

生活科の学習の中でも、自分で判断して実行する場面を設け、自分から行動を起こせるようにしていかなければならない。

こうした状況への親の対応はどうか、一考を要する問題と言える。

◎ よく身に付いた内容は、「身近な草花や草木、小動物などを大切に作る」「疑問やわからない事を親に聞いたり話したりする」「興味や関心のあることに夢中で取り組んでいる」「学習に必要なものを自分から準備できる」である。

あまり身に付いていない内容は、「身近にあるお店や近所の人に自分から声をかける」「宿題がなくても勉強する習慣が付いている」「近くの図書館や児童館を利用している」である。

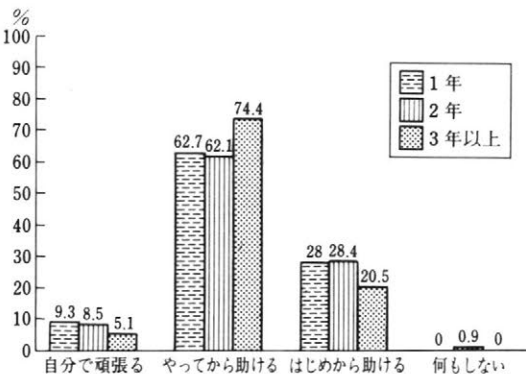
自然との触れ合いや、疑問の解決、活動への没頭、必要な物の準備などは、生活科で取り扱ってきた学習材や活動形態などが効を奏し、生活科の学習を通じて育ってきたものと考えられる。表現力や夢中になること、自分のことは自分ですることなど、自立の基礎に結び付くことは、生活化できるまで根気強く見守る親の姿勢を強調しておきたい。

自分から人に声をかけたり、勉強をしたり、公共施設を利用したりするなどの行為はあまり身に付いていない。これは、自発性の不足が原因として考えられる。また、社会状況が変化し、待ちの姿勢が増えたり、人間不信があったり、面倒なことは避けたがる傾向の増加が原因していると考えられる。人とのかかわり方が欠如していることが、今日的な解決課題であることが改めて痛感させられる。

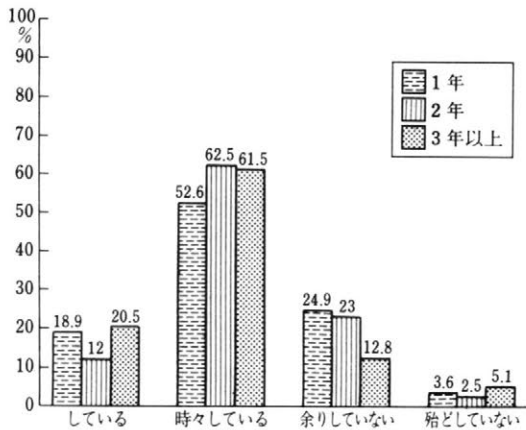
生活科を中心にして、主体性を尊重した学習方法や学習形態を取り入れていくとともに、人や物とのかかわりの楽しさを体験させるような授業になるよう工夫と改善をしていかなければならない。

また、保護者との連携をとり、すぐに手や口を出さず、子どもを見守り励ます姿勢を身につけてもらう必要がある。

(3) 精神的自立の実態

見出し	調査結果と分析	考察																				
<p>困難への出会い</p>	<p>(21) 困ったことに会ったとき、どうしているか。</p>  <table border="1"> <caption>困ったことに会ったとき、どうしているか (単位: %)</caption> <thead> <tr> <th>行動</th> <th>1年</th> <th>2年</th> <th>3年以上</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自分で頑張る</td> <td>9.3</td> <td>8.5</td> <td>5.1</td> </tr> <tr> <td>やってから助ける</td> <td>62.7</td> <td>62.1</td> <td>74.4</td> </tr> <tr> <td>はじめから助ける</td> <td>28</td> <td>28.4</td> <td>20.5</td> </tr> <tr> <td>何もしない</td> <td>0</td> <td>0.9</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table> <p>「初めから助けを求める」子どもが27.3%おり、精神的自立の不足が見られる。この傾向は、幼児の22.5%と比べても悪い。この結果は、今日の子どもたちの依存傾向を如実に表している。</p> <p>生活科の学習で、子どもに任せる活動の中で教師の対応の仕方が、子どもたちの生活の中で生かされていないと言える。</p>	行動	1年	2年	3年以上	自分で頑張る	9.3	8.5	5.1	やってから助ける	62.7	62.1	74.4	はじめから助ける	28	28.4	20.5	何もしない	0	0.9	0	<p>問題解決能力は、精神的自立をする上で大切な力である。初めから助けを求める状態は、親への依存心の表れだと考えられる。この状況は、子どもの依存心が強い場合と、親が子どもの主体性を待たず、手を出してしまう場合にも生じる。</p> <p>子どもが精神的に自立するためにも、困難な状況に出会った際、すぐに手助けをせず、自分で問題解決をする努力をさせる習慣付けが必要である。</p> <p>保護者に対しても、忙しさということもあろうが、子どもを見守ることの大切さを指導助言していかなければならない。</p> <p>また、「自分でがんばる」のもよいが状況の判断力を備えていないと、不都合が生じる場合もあるので、子どもに対して、対応方法を指導する必要もある。</p>
行動	1年	2年	3年以上																			
自分で頑張る	9.3	8.5	5.1																			
やってから助ける	62.7	62.1	74.4																			
はじめから助ける	28	28.4	20.5																			
何もしない	0	0.9	0																			

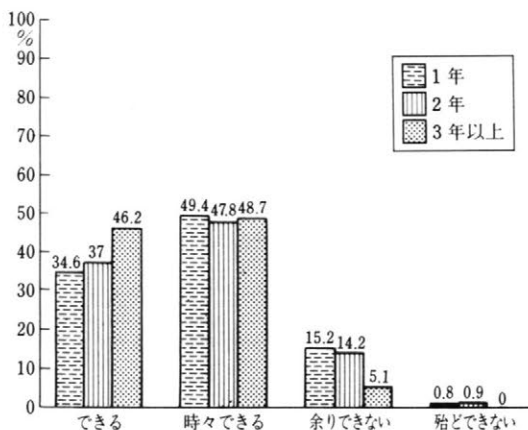
反省と努力 (22) 自分のしたことを反省し、それを直そうと努力しているか。



あまりできない子どもが27%ほどおり、自省心の不足が見られる。

生活科では、振り返りの活動を重視しているが、この結果から見ると指導の不十分さが考えられる。また、自己中心的な考え方が抜けていない子どもがいることも示している。親の側に、自分の子育てに自信が持てず、わが子にあまり注意しない傾向とも関係しているのではなかろうか。

自分の考えで行動する (23) 人や友だちに惑わされなくて、自分の考えを持って行動しているか。



「ときどき」以上にできる子どもが84.4%おり、だいたいできていると考えられる。反面「あまり出来ない」「ほとんどできない」子どもが15.6%いることも考慮しなければならない。学校での状況から見ると、このこと

これらは、発達に依存する部分もあるが、生活科での指導を通して自省心を養い、他と共存できるような指導を進めていかなければならない。

また、保護者に対しても叱るだけでなく、何がいけなかったのかを子どもに話し、自ら反省し改善しようとする態度を育成するような接し方を勧める必要がある。

生活科などの学習や日常の指導の中でその子のよさを自覚させ、自信をもって行動できるように支援していかなければならない。

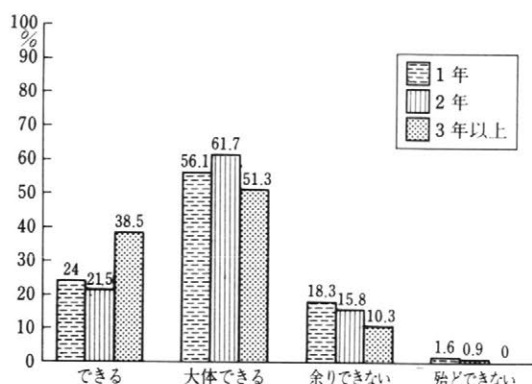
保護者に対しても、子どもの行動にあまり口を出さず、見守り、よさを伸ばすことの必要性を指導・助言していく必要がある。

自立して生きていくためには、判断力や主体性等を育てなければならない。人に惑わされていると、自分の考えがもてず、依存心の強い子どもに育ってしまう。「自分の考えをもって行動する」ことは、生きる力の中心的な柱である。家庭の教育力の低下が指摘されている今、この力の育成を生活科の学習を通して呼びかけることが大切である。

に対する保護者の評価は甘いようにも感じられる。

異なる考えの受け入れ

(24) 自分のことを主張するだけでなく、他人の意見や考えを受け入れることができるか。

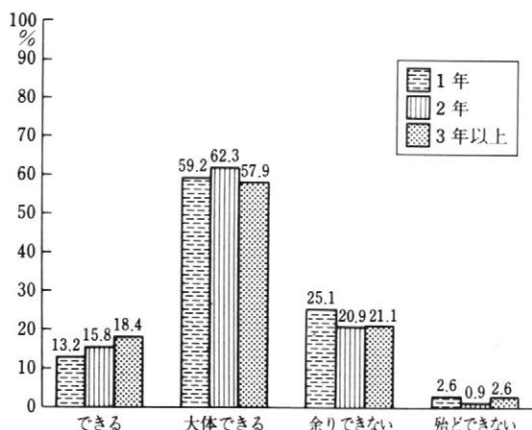


「だいたいできる」「できる」子どもが81.6%おり、かなりできている。他方「あまりできない」「ほとんどできない」が18.4%いる。学校での状況から見ると、このことに対する親の評価は甘いようにも感じられる。

他と共存していくためには、他の考えも受け入れられなければならないが、まだ自己中心性から抜けきれない子どもが、この18.4%だと考えられる。いわゆるわがままな状態である。

わがままを抑える

(25) 自分のわがままを抑えて行動できるか。



「できる」14.6%「だいたいできる」60.6%「あまりできない、ほとんどできない」が

近年の子どもたちの問題行動は、この資質に欠けることに起因していることが多いので、学校でも家庭でも大きな関心を寄せ、子どもに寄り添う指導をすることが大切である。

他の人の考えを受け入れることは、集団生活を送る上で重要なことなので、様々な機会をとらえながら、他のよさにも気付く指導を一層充実させていかなければならない。

他と共存していくためには、わがままではなく、自分の考えをはっきりと言えるようにする必要がある。また、自制心も育てなければならない。

教師は、共同作業などの場面を通して問題が起きた状況をよく把握し、わがままであるかどうかを判断し、本人に伝え押さえる努力をさせるような指導をしなければならない。

保護者に対しても、同様な指導をしていく必要がある。特に子どもの甘やかし、子どもへの迎合傾向には、警鐘を鳴らす必要がある。

生活科が始まってから、わがままな子

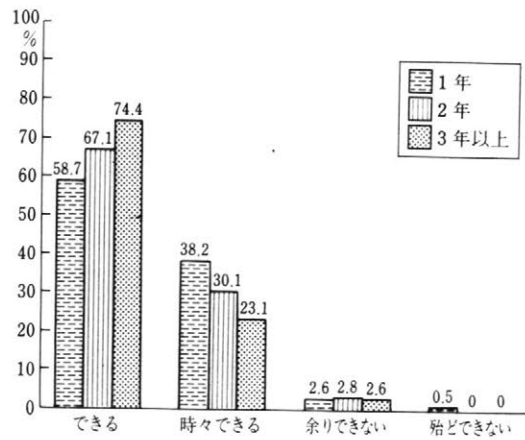
24.8%おり、わがママを押しえられない子どもの多さが目立つ。幼稚園の結果の「できない」子が11%であるのと比べると、できない子どもが増加している。

発達から言えば、小学生では減少しなければならないはずなのに、増加している。これは、保護者の過保護の傾向を示しているのかもしれないが、自己主張の増加とも考えられる。したがって、わがママの質を検討しなければならない。

子どもが増えたように言われることがあるが、自己主張ができるようになったことが、わがママととらえられている場合もある。

善悪の判断

(26) してよいことと、してはいけないことの判断ができるか。



「できる」1年生58.7%、2年生67.1%
 「ときどきできる」1年生38.2%、2年生30.1%と学年があがるにしたがって達成度が上がっている。他の項目に比べ、できる子どもが多い。

幼稚園の結果でも、してはいけない事をしたときにだいたい謝る子どもが91%おり、幼児のころから身に付いてきていると考えられる。

これは、家庭でのしつけの問題が大きく関係していると考えられる。どの家庭でも善悪の判断についてはきちんとしつけていると考えられる。また、学校においても善悪の判断は常に取り上げていることである。子ども自身も、年齢とともに善悪の判断力が高まってくるのが読み取れる。

課題としては、今日の問題行動とも照らし合わせ、頭での判断に終わることなく行動に表せるような指導をしていく必要がある。

昨今の子どもたちの生活行動には、体験不足が大きな要因となっている。特に人のかかわり経験の不足は、自己抑制力と大きく関係しているので、子どもたちの生活全般は「かかわり」体験の場を増やしていく必要がある。

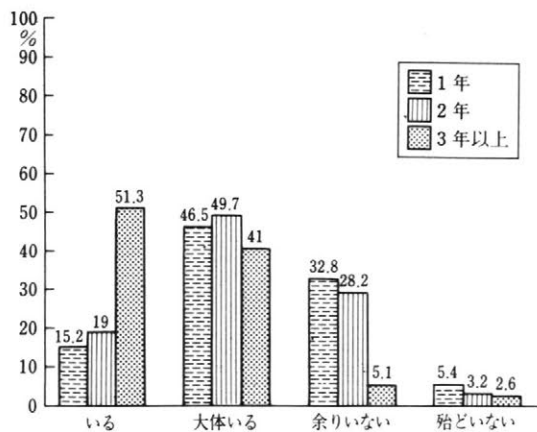
自分のよさ

(27) 自分のいいところや得意なことに気付

自分のよさや得意なことに気付き、伸

への気付き

いているか。



「気付いている」1年生15.2%、2年生19.0%、「だいたい気付いている」1年生46.5%、2年生49.7%、「あまり気付いていない」1年生32.8%、2年生28.2%である。

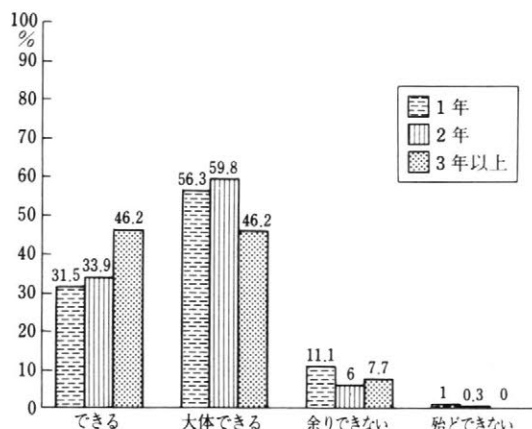
この結果から見ると、学年が上がるにしたがって気付くようになる子どもが増えているが、あまり気付いていない子どもが多い。

生活科では、自分自身への気付きも大切にして指導してきているが、その効果があまり表れていないことになる。

この調査は、保護者対象であるので、保護者自身が子どものよさに気付いていないことも考えられるが目に見えない部分が多いと思われる。

責 任 感

(28) 与えられた仕事は、責任をもってやる
ことができるか。



「できる」1年生31.5%、2年生33.9%、「だいたいできる」1年生56.3%、2年生59.8%と学年が上がるにしたがって達成度が上

ばしていくことは個性の伸長の意味からも重要な課題である。

生活科の学習などを通して、子どもを一層肯定的にとらえるようにし、子ども自身が自分のよさや得意なことに気付くような教育を行わねばならない。

保護者に対しても学校でとらえた子どものよさを積極的に伝えていく必要がある。特に、今までの子育てでは、マイナス傾向を取り上げ、それをプラスにしていこうとする子育てをしてきたことを指摘し、子どものよさを見取りイキイキメッセージを送る子育てを啓蒙していくべきである。

学校生活においても一層責任をは果たせよう、一人一人の役割を明確にして、指導していく必要がある。

特に、家庭においては、お手伝いの場が少なくなっていると言われるが、それはむしろ、保護者の姿勢にあるのではなからうか。

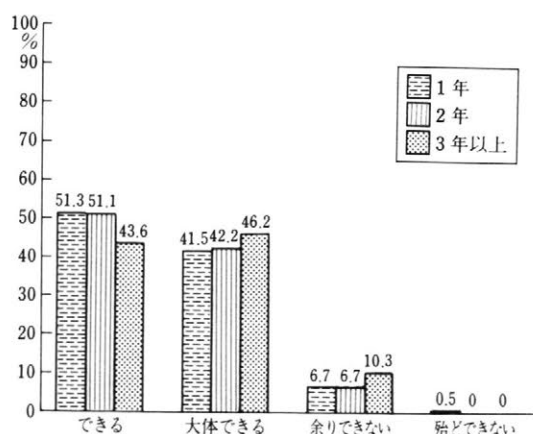
子どもの自立という観点からは、お手伝いを仕事として位置づけ、失敗経験を生かしながら、責任ある仕事を成し遂げる経験を提供していくことが大切である。

がっている。約90%の子どもがだいたいできている。

責任感は、社会の一員として生活するため大切なことである。また、自立の観点からも自分のやるべきことに責任をもつことは重要である。学校生活では、責任感のなさが気になることが多いが、家庭では責任をもってやっているであろう。これは、活動や体験を学習の目標としている生活科の学習の成果と見ることもできる。

親 切

(29) 自分より小さい子やお年寄りに親切にできるか。

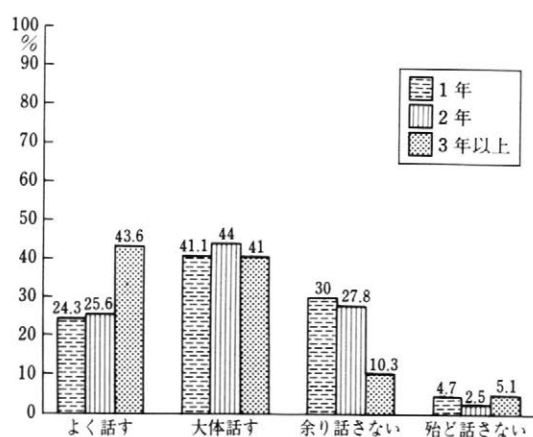


「できる」51.5%、「だいたいできる」41.7%で、よく身に付いている態度である。

幼稚園の結果でも、自分より小さい子に親切にできる子が93%いることから考えると、幼児期から身に付いてきていると考えられる。

他の人のよ
さへの気付
き

(30) 友達やまわりの人の「よさ」を話すか。



これは、保護者の育て方とともに、この時期の発達特性によるところが大きいようである。生活科でも、異年齢の人々とのかかわりをもてる活動を取り入れているが、さらに充実させ、長じてもできるようにこの態度を定着させていく必要がある。

保護者に対して、子どものよさに目を向ける意義についてしっかりと伝え、家庭での話題にできるよう働きかける必要がある。

人とのかかわりが希薄になっている状況の中では、自分のよさはもとより他人のよさに気付くことがないのは当然のことと思われる。自己認識の不足が、子どもたちの精神的自立を遅らせている要因ともなっていると思われることから、特に、保護者には、このことを強く指摘していく必要がある。

「あまり話さない」が29%、「ほとんど話さない」が3.8%あり、他の人のよさに目があまり向いていない傾向が見られる。

これは、友人に対して無関心なのか、親の見る目に影響を受けているのか、よさに目があまり向いていないことが考えられる。

生活科において自分や他の人のよさに目を向ける指導をしてきているにもかかわらず、このような状況があることは問題である。ただ、本人は気付いていても親に対して話さないだけかもしれない。

(4) まとめ

- ◎ よく身につけている内容は、「してよいことと、してはいけないことの判断ができる」「与えられた仕事は、責任をもってやることができる」「自分より小さい子やお年寄りに親切にできる」である。

善悪の判断、責任感、思いやりはよく身に付いているが、親の願いと一致しており、家庭での指導が効果を上げていると考えられる。また、生活科でもこれらにかかわる学習をしており、その効果とも考えられる。

昨今の子どもたちの問題行動が社会問題化していることを考えると、生活科で身に付けたこれらの行動傾向が、長じて失われていくことは問題である。

精神的自立を図るためには、教師や親があまり手を出しすぎないことが重要である。これを実現するためには、子どもを信用し、任せられるようにならなければならない。教師の側では、十分な教材研究と、子どもを支援するというかわり方が必要であり、親の方では過保護にせず、子どもの成長を見守り、子どもに任せる事柄を増やしていくようにすることが必要である。

2. 子どもたちの行動についての保護者の考え

(1) 許せないこと

見出し	調査結果と分析	考察																																				
許せないこと	<p>☆ 近ごろの子どもたちの行動について、どのように考えておられるかお尋ねいたします。次のことについて、自由にお書きください。</p> <p>(1) 近ごろの子どもたちについて、このことはどうしても許せないということは、どんなことですか。</p> <p>自由記述で得た回答を、児童指導要録の「行動の状況」の項目にしたがって分類集計した。以下はその結果である。</p>																																					
許せないことの傾向	<table border="1" data-bbox="289 873 885 1990"> <thead> <tr> <th>許せないこと（669人）</th> <th>人</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①基本的な生活習慣</td> <td>325</td> <td>48.6</td> </tr> <tr> <td>②明朗・快活</td> <td>23</td> <td>3.4</td> </tr> <tr> <td>③自主性・根気強さ</td> <td>23</td> <td>3.4</td> </tr> <tr> <td>④責任感</td> <td>8</td> <td>1.2</td> </tr> <tr> <td>⑤創意工夫</td> <td>2</td> <td>0.3</td> </tr> <tr> <td>⑥思いやり</td> <td>147</td> <td>22.0</td> </tr> <tr> <td>⑦協力性</td> <td>39</td> <td>5.8</td> </tr> <tr> <td>⑧自然愛護</td> <td>1</td> <td>0.1</td> </tr> <tr> <td>⑨勤労・奉仕</td> <td>0</td> <td>0.0</td> </tr> <tr> <td>⑩公正・公平</td> <td>49</td> <td>7.3</td> </tr> <tr> <td>⑪公共心</td> <td>52</td> <td>7.8</td> </tr> </tbody> </table> <p>許せないこととして、「基本的な生活習慣」</p>	許せないこと（669人）	人	%	①基本的な生活習慣	325	48.6	②明朗・快活	23	3.4	③自主性・根気強さ	23	3.4	④責任感	8	1.2	⑤創意工夫	2	0.3	⑥思いやり	147	22.0	⑦協力性	39	5.8	⑧自然愛護	1	0.1	⑨勤労・奉仕	0	0.0	⑩公正・公平	49	7.3	⑪公共心	52	7.8	<p>「許せないこと」にあげられている項目は、保護者の関心が高い事項であると考えられる。</p> <p>低学年児童であるので、基本的な生活習慣を気にかけられていると考えられる。次に思いやりがあげられるのは、いじめ問題などを意識してのことと考えられる。</p> <p>生活科の学習においても、基本的な生活習慣を重視し、あらゆる活動の中でその育成に努めているが、実際の生活場面ではまだ十分に身に付いていないことの代表であり、保護者の願いでもあると考えられる。</p> <p>しっかりと身に付けさせていくためには、学校の中だけでは不十分である。保護者との連携を図りながら、あらゆる場面を通して育てていかなければならない。</p> <p>生活科でも人とのかかわりの中で、思いやりについて取り上げているが、その育成に一層力を入れる必要がある。</p>
許せないこと（669人）	人	%																																				
①基本的な生活習慣	325	48.6																																				
②明朗・快活	23	3.4																																				
③自主性・根気強さ	23	3.4																																				
④責任感	8	1.2																																				
⑤創意工夫	2	0.3																																				
⑥思いやり	147	22.0																																				
⑦協力性	39	5.8																																				
⑧自然愛護	1	0.1																																				
⑨勤労・奉仕	0	0.0																																				
⑩公正・公平	49	7.3																																				
⑪公共心	52	7.8																																				

「思いやり」「公共心」「公正・公平」「協力性」に関する内容が多くあげられている。このことから、保護者は自分のことがきちんとでき、人に対して思いやりをもって接する子どもを望んでいると言える。

基本的な生活習慣

①基本的な生活習慣	3 2 5	%
命を大切にしない	1 2	3.7
テレビゲームばかりしている	5 6	17.2
物・金・時間を大切にしない	4 7	14.5
かたづけをしない	3	0.9
わがまま	2 9	8.9
しつけができていない	1 6	4.9
あいさつができない	7 0	21.5
言葉づかいが悪い	9 2	28.3

許せないことの1番にあげられた「基本的な生活習慣」の中身を見ると、「言葉づかいの悪さ」「あいさつができない」ことが、上位にあげられている。

次が、「テレビゲームばかりしていて外で遊ばない」「物、お金、時間を大切にしない」「わがまま」と続いている。

子どもたちは、母親との密着度が高いため、身の回りのことや、言葉づかいが保護者にとって一番気になることである。このことは、しつけの内容にもつながっていく。

人とのかかわりにおいて、言葉づかいやあいさつがきちんとできることは重要なことである。学校生活の中でも、このことについて一層の指導をしていかねばならない。

また、テレビゲームについての批判も多かったが、けじめのある生活ができていないことが問題である。学校週五日制の実施により、休日の過ごし方が問題となっているが、時間の上手な使い方や、遊びの指導をする必要がある。

物やお金、時間を大切にしていないのは、わがままにも通じるころがある。自分を律し、計画的にきまりよい生活ができるよう、一層の指導をしなければならない。

しかし、これらの行動は家庭生活の中で多く見られるものである。学校での指導と共に、家庭、地域ぐるみの指導が大切である。様々な機会をとらえて保護者を啓発していかねばならない。保護者や地域の教育力に負うところが大きい。

明朗・快活

②明朗・快活	2 3	%
陰ひなたがある	3	13.0

子どもたちをよりよく育てていくためには、学校、保護者、地域住民が力を合わせていく必要がある。注意しても聞かないからと放っておく

素直に注意を聞かない	16	69.6
のびのびしていない	2	8.7
うそをつく	2	8.7

明朗・快活に関して許せないことをあげた保護者は、669名中23名(3.4%)と多くはない。

その中の中心は、注意をしても素直に聞かないことに関することであった。

自主性・根気強さ

③自主性・根気強さ	23	%
自主性・積極性がない	5	21.7
自分の考えが言えない	3	13.0
意欲がない・面倒がる	11	47.8
根気がない	4	17.4

これも669名中23名(3.4%)と多くはない。その中の中心は、意欲がなかったり、面倒がることである。

責任感

④責任感	8	%
無責任・無関心	8	100.0

責任感をあげた保護者は8人と非常に少ない。そのすべてが無責任な行動や無関心さである。

創意工夫

⑤創意工夫	2	%
創造性・工夫がない	2	100.0

創意工夫に関しては、2人と非常に少ない。

のでは、子どもは育たない。反抗的な態度に対しても、大人たちが根気強く指導をしていかなければならない。

保護者にもこの事を十分に理解してもらい、取り組んでもらう必要がある。

何かするとき、「面倒くさい」ということをよく口にする子どもがいる。

保護者は、子どもに意欲的に物事に取り組んで欲しいと願っているが、意に反する行動に対するはがゆさが表れている。

子どもが意欲的になる方法を親とともに考え、指導する必要がある。

責任感に対して許せないことが少ないのは、小学校低学年の児童では、それほど責任をもつ事柄がないからであろう。また責任をもたされれば、誠実に実行しようとする姿勢があるためと思われる。

許せない対象とはなっていない。どうしてもできていなければというものは判断されていないからであろう。

思いやり

⑥思いやり	147	%
思いやり不足・いじめ	136	92.5
やさしさが無い	5	3.4
感謝、敬う気持ちがない	6	4.1

思いやりは、基本的な生活習慣に次いで多くの指摘があった項目である。いじめ問題にも関連して気になっている事項だと考えられる。保護者の関心が高い項目である。

わが子は、人に優しく他の人を思いやれる子であってほしいという保護者の願いがよく表れている。

この願いをしっかりと受け止め、保護者と協力しながら心の教育を進めていかねばならない。子どもの健全育成で重要な事項である。

協力性

⑦協力性	39	%
協調性・協力性がない	5	12.8
仲間で遊べない	34	87.2

協力性の中では、仲間で遊べないことが多くあげられている。

基本的な生活習慣の中で、テレビゲームばかりしていることがあげられていたが、これとも関連している。保護者は、ゲームばかりしているのではなく、外で元気良く友達と遊ぶことを強く願っている。

社会性を身に付けるためには、人とのかかわりが重要である。子どもは、仲間と遊ぶことにより社会性を養うことができる。

先に出てきた「思いやり」も仲間で遊ぶことにより育成できる。生活科においても、友達との協力を重視した活動を多く取り入れているが、一層充実させ、協力性を育てていかなければならない。

自然愛護

⑧自然愛護	1	%
自然体験が不足	1	100.0

1人の保護者が自然体験の不足をあげていた。

保護者は、自然体験よりも人とのかかわりに関心を寄せていると考えられる。

勤労・奉仕

⑨勤労・奉仕	0	0
--------	---	---

勤労・奉仕に関する指摘は全くなかった。

保護者は子に対して、勤労・奉仕に関して期待していることがあまりないことを示している。また、低学年であることが理由であろう。

公正・公平

⑩公正・公平	49	%
相手の良さを認めない	6	12.2
自己中心的・損得で行動する	43	87.8

自己中心的な行動や損得で行動する事に対して批判がある。小児に見られる自己中心性が問題にされている。

自己中心性は、低学年児童に見られる発達の状態であるが、保護者の目からすると気になっている点である。生活科の活動などを通して、少しずつ身に付けさせていく必要がある。

公共心

⑪公共心	52	%
迷惑をかける	3	5.8
交通ルール、ゴミを捨てる	30	57.7
公共物を大切にしない	19	36.5

保護者から3番目に注目されている事項である。交通ルールを守らなかったり、ゴミをどこにでも捨てたりしていることに対して注目している。

公共心は、実際の生活の中で実践されて初めて価値をもつ。生活科の活動においても、取り上げていることであり、実践化に重点を置いた指導が重要である。

家庭においても、保護者が手本を示すなど生活の中で育てるよう啓発していく必要がある。

(2) 伸ばしてほしいこと

伸ばしてほしいこと ☆ 近ごろの子どもたちについて、このことはこれからもどんどん伸ばしてほしいとお考えのことは、どんなことですか。

全体の傾向

伸ばしてほしいこと	588	%
①基本的な生活習慣	63	10.7
②明朗・快活	70	11.9
③自主性・根気強さ	143	24.3
④責任感	0	00.0

伸ばしてほしいことにはげられる項目は、子どもに不足していると考えている力または、身に付けさせたい力、姿だと推測される。

第1位の内容からすると、保護者は子どもに自分から進んで意欲的に物事に取り組むようになることを願っている。

指示されないと行動できない子どもが増えていることが問題にされているが、保護者もそのことを感じて

⑤創意工夫	6 1	10.4
⑥思いやり	6 1	10.4
⑦協力性	4 0	6.8
⑧自然愛護	4 7	8.0
⑨勤労・奉仕	1 0	1.7
⑩公正・公平	3	0.5
⑪公共心	1 0	1.7
その他	8 0	13.6

伸ばして欲しいことの第1位は、「自主性」、第2位は「明朗・快活」、以下「基本的生活習慣」「創意工夫」「思いやり」「自然愛護」「協力性」と続いている。「許せないこと」と異なり、多様になっている。

基本的生活習慣

①基本的生活習慣	6 3	%
健康・外遊び	3 5	55.6
命を大切に・安全	4	6.3
物・金・時間を大切に	4	6.3
かたづけ	1	1.6
規則正しい生活・わがまま	3	4.8
しつけ・常識	1	1.6
道徳心	5	7.9
あいさつ	1 0	15.9

おり、主体的に行動できることを期待しているからだと考えられる。

「思いやり」「基本的生活習慣」は、許せないことの上位にあげられていたがここでも3番目、4番目にあげられている。

これは、保護者が「基本的生活習慣」「思いやり」を重要視しているからだと考えられる。同様に「明朗・快活」「創意工夫」も期待が大きい。

これらから推測される保護者が期待する子ども像は、自主的に意欲的に行動し、明るく元気で基本的生活習慣がしっかりと身につけており、創意工夫が旺盛で、人や動植物に対して思いやりのある子どもである。

学校教育においても、このことを踏まえた教育をしていく必要がある。生活科においても、かなり達成できる内容である。

保護者は、子どもがテレビゲームばかりしていて外遊びをしないことをとても憂慮している。

健康でのびのびと育ててほしいというのが保護者の願いにあるが、テレビゲームをやめさせて外で遊ばせることに困難を感じているようである。

本来は家庭の問題であるが、自分の生活を豊かにするという観点から、生活科の学習においても、遊びの工夫や時間の使い方を指導していく必要がある。

それと同時に、保護者にも協力を求め、遊びに工夫ができるようにしてもらわなければならない。

あいさつも重要視されている。あいさつは、人とのかかわりで大変重要なことである。あいさつができるようになるかどうかは、家庭でのあ

「健康・外遊び」に関する内容が一番多く、基本的な生活習慣のうちの55.6%を占めている。次が、「あいさつ」に関することである。

健康に対する願いが強いことがうかがわれる。

明朗・快活

②明朗・快活	70	%
明るく・陰ひなた	30	42.9
素直・注意を聞かない	9	12.9
のびのび	30	42.9
正直・うそをつかない	1	1.4

明朗・快活は2番目に多かった項目である。その中でも、「明るさ」と「のびのび」が期待されている。

自主性・根気強さ

③自主性・根気強さ	143	%
自主性・積極性	24	16.8
自己主張・発言・自分の考え	60	42.0
自信	3	2.1
興味・探究心	9	6.3
やる気・意欲・面倒がらない	35	24.5
根気よく・あきらめず・努力	12	8.4

保護者の願いで一番多かった項目である。その中でも特に「自分の考えをしっかりと話せること」が期待されている。次が「意欲」である。

すなわち、意欲をもって主体的に取り組む姿勢が求められていると考えられる。

いさつの実施状況が大きく影響する。家庭で習慣化していれば、外でも自然とあいさつの言葉が出てくる。このことを保護者にしっかりと伝え協力を求めなければならない。

「明るくのびのび」は、子どもへの願いで合言葉のようなものである。これが、子ども本来の姿だと認識されているからであろう。

自分の生活を豊かにしていく上で、「明るくのびのび」は、欠かせない要素である。これを実現させるためには、一人一人のよさや可能性が十分尊重される必要がある。個が大切にされることにより、「明るさ」や「のびのびさ」が育つと考えられる。

このことを保護者にもしっかりと伝え協力して取り組む必要がある。

これからの世の中を、主体的に充実させて生きていくためには、「自分の考えをしっかりと主張できること」が重要である。

また「意欲」も不可欠な要素である。根気強さがなければ、学び続けることはできない。意欲をもって主体的に学ぶ児童を育成するためには、それが可能となるような環境を整えねばならない。

生活科での学習と同様、他教科の中でも自分で判断する場面を設定したり、主体的な行動が可能になるように支援したりする必要がある。本人のがんばりを尊重し、評価することにより、意欲を育てていくことができる。

そのためには、他の子どもと比較するのではなく、その子の能力や努力、成果を尊重する姿勢が必要である。

責任感

④責任感	0	0
------	---	---

責任感を伸ばしてほしいと望む保護者は、一人もいなかった。

保護者にも同じ姿勢で接してもらいように働きかけることも重要である。

責任感は、社会の中で生きていく上で重要な要素であるが、伸ばしてほしい事柄には入っていない。本人の問題と考えているからであろうか。

責任ある行動がとれることは、主体的に生きる上で重要なことである。学校に望むことに入っていないのは、家庭で十分対応できると判断したか、他の要素に比べて重要度が低いと判断されたためと考えられる。もしそうでないとするならば、保護者にも責任感の重要性に対する認識をもってもらわなければならない。

創意工夫

⑤創意工夫	61	%
個性尊重	29	47.5
才能を見付け伸ばす	24	39.3
創造性・工夫	6	9.8
想像力・発想	2	3.3

個性を伸ばしたり、才能を見付け伸ばすことへの期待が大きい。

個性や才能に対する親の期待は大きいことがわかる。学校教育においても、個性尊重の教育を推進しているが、保護者の期待に応えられるよう、一層力を入れる必要がある。

個性は学校だけでなく、家庭でも見出し伸ばさねばならない。このことを保護者にも認識してもらい、協力して取り組んでいかなければならない。

思いやり

⑥思いやり	61	%
思いやり	46	75.4
やさしさ	15	24.6

人に対する「思いやり」を望む声が非常に多い。これに関連して「やさしさ」も望まれている。

「いじめ」が大きな社会問題になっているが、保護者の関心もここに向いている。

「育児で大切にしていること」では、「思いやり」が一番であったが、学校への期待では4番目である。これは、家庭で育てる部分の大きいと認識しているためであると推測される。

協力性

⑦協力性	40	%
協調性・協力	11	27.5
友達と仲良く	13	32.5
仲間遊ぶ・友達とかかわる	16	40.0

友達と遊んだりかかわったりすることへの希望が多い。

「協力性」に関する希望は、全体の6.8%であるが、「思いやり」と関連していると考えられる。

「基本的な生活習慣」にもあらわれていたが、保護者はゲームばかりしていて友達と遊ばないことを危惧している。

生活科の活動でも、人ととかかわる活動を多く取り入れているが、協力性という観点からも一層充実させていく必要がある。

保護者にも、友達と一緒に遊べる機会を増やすよう働きかけなければならない。

自然愛護

⑧自然愛護	47	%
動植物を大切に	3	6.4
自然体験	43	91.5
環境への関心	1	2.1

自然体験を増やしてほしいという希望が圧倒的に多かった。

テレビゲームの流行や都市化の進行などで、子どもたちが自然とかかわる機会が減少している。保護者もこのことを大変心配している。

生活科の活動でも自然とのかかわりを重視しているが、保護者の指示を受けていると考えられる。これからも、自然とのかかわりを一層充実させ、豊かな心を育てていかなければならない。

環境に対する希望は少なかったが、これからは、環境への関心を高める指導も必要である。

勤労・奉仕

⑨勤労・奉仕	10	%
お手伝い	1	10.0
ボランティア	9	90.0

全体の1.7%で、伸ばしてほしい希望としては少ない。

生活科で家の仕事を受け持って取り組む活動を取り入れているが、お手伝いに対する希望が少ないのは意外である。あまり価値を見出されていないのだろうか。

ボランティアを望む声が少数ながらあったが、低学年児童でもできるボランティア活動を生活科の中で取り入れていくことも必要である。地域とのかかわりの中で、お年寄りと触れ合う活動や、公園や町をきれいにする活動などが考えられる。

公正・公平

⑩公正・公平	3	%
自己中心的・損得で行動する	3	100.0

公正・公平に関する希望は少なかった。全体で3件だけである。

公正・公平に関する希望は少なかったが、これは「基本的な生活習慣」や「思いやり」の中に関連することが含まれているためと考えられる。

公共心

⑪公共心	10	%
マナー・ルール・ゴミを捨てる	10	100.0

伸ばしてほしいこととしては、希望が少ない。

許せないことでは、指摘があったが、伸ばしてほしいことでは少ない。公共心は、家庭で身に付けさせるものという考えが強いのかもしい。

その他

⑫その他	80	%
勉強・スポーツ	8	10.0
ワープロ・パソコンの能力	47	58.8
情報選択能力	6	7.5
読書	6	7.5
夢	2	2.5
国際性	7	8.8
英語	3	3.8
生活の中の知識・知恵	1	1.3

その他の中で群を抜いて多かったのは、「ワープロ・パソコンの能力」を伸ばすことであった。

子どもたちは、テレビゲームに夢中になっている。保護者は、やり過ぎに対しては批判しているが、その効用も認めている。コンピュータリテラシーとしてとらえているのである。

これからの世の中は情報化が一層進展すると考えられるが、その中に生きていく子どもたちには、コンピュータリテラシーが必要だと考えているのであろう。

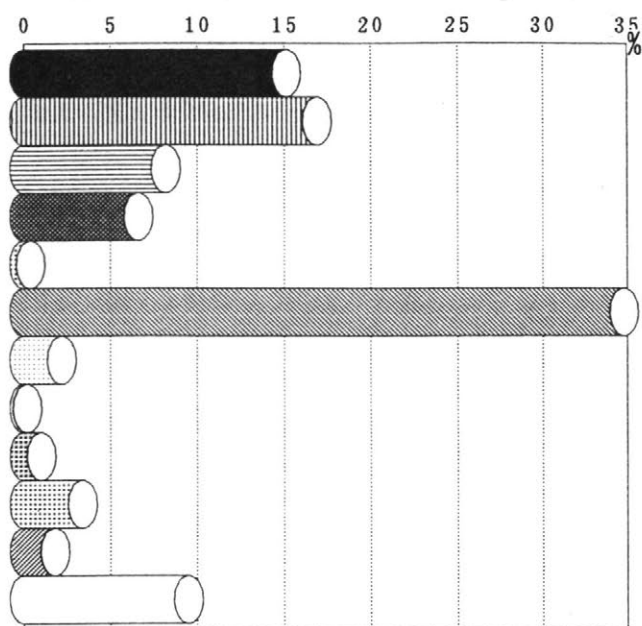
学校教育にもコンピュータが導入されてきているが、生活科の学習においてもコンピュータを活用した活動を取り入れていく必要がある。

また、国際性や情報活用能力を望む声もあるが、総合学習の導入にもらみ、これらに関する活動も考える必要がある。

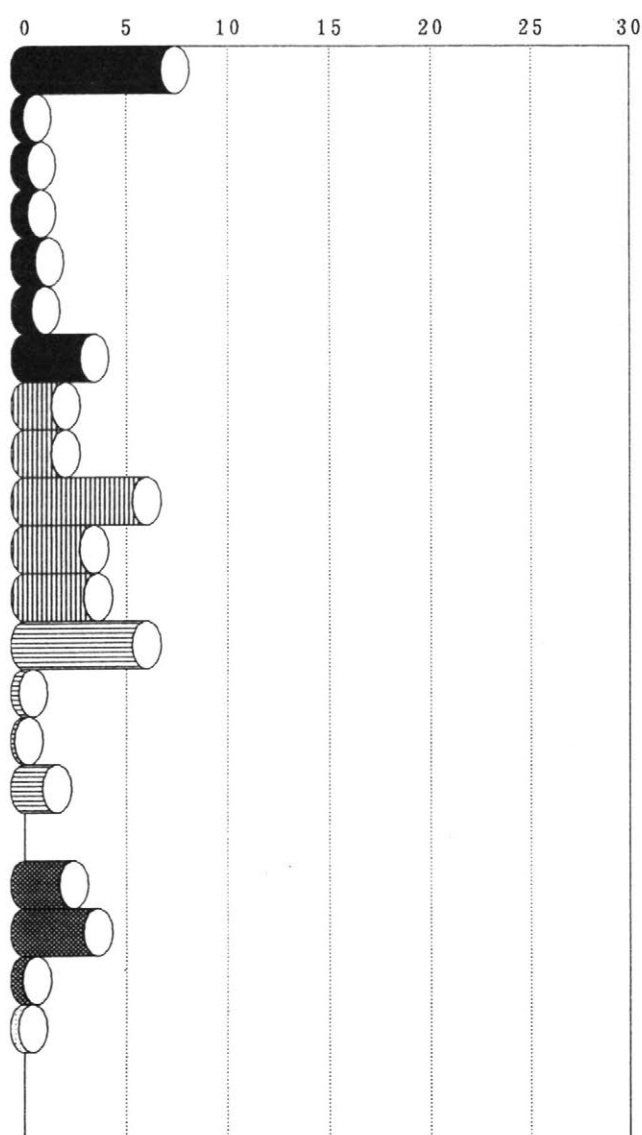
現状でも、活動形態や地域への目の向け方を変えれば、十分取り入れられる活動である。

	幼稚園	小学校	小学校	小学校	幼稚園	小学校	小学校	小学校
	育児で 大切	育児で 大切	許せぬ こと	伸ばし たい	育児で 大切%	育児で 大切%	許せぬ こと%	伸ばし たい%
①基本的な生活習慣	1 5 7	7 6	3 2 5	6 3	19.2	15.1	48.6	10.7
②明朗・快活	1 3 4	8 5	2 3	7 0	16.4	16.9	3.4	11.9
③自主性・根気強さ	6 0	4 1	2 3	1 4 3	7.3	8.2	3.4	24.3
④責任感	2 0	3 3	8	0	2.4	6.6	1.2	00.0
⑤創意工夫	3 4	2	2	6 1	4.2	0.4	0.3	10.4
⑥思いやり	2 4 6	1 7 5	1 4 7	6 1	30.0	34.8	22.0	10.4
⑦協力性	1 7	1 1	3 9	4 0	2.1	2.2	5.8	6.8
⑧自然愛護	6	1	1	4 7	0.7	0.2	0.1	8.0
⑨勤労・奉仕	6	5	0	1 0	0.7	1.0	00.0	1.7
⑩公正・公平	2 3	1 7	4 9	3	2.8	3.4	7.3	0.5
⑪公共心	3 3	9	5 2	1 0	4.0	1.8	7.8	1.7
その他	8 3	4 8	0	8 0	10.1	9.5	00.0	13.6
総 数	8 1 9	5 0 3	6 6 9	5 8 8	100.0	100.0	100.0	100.0

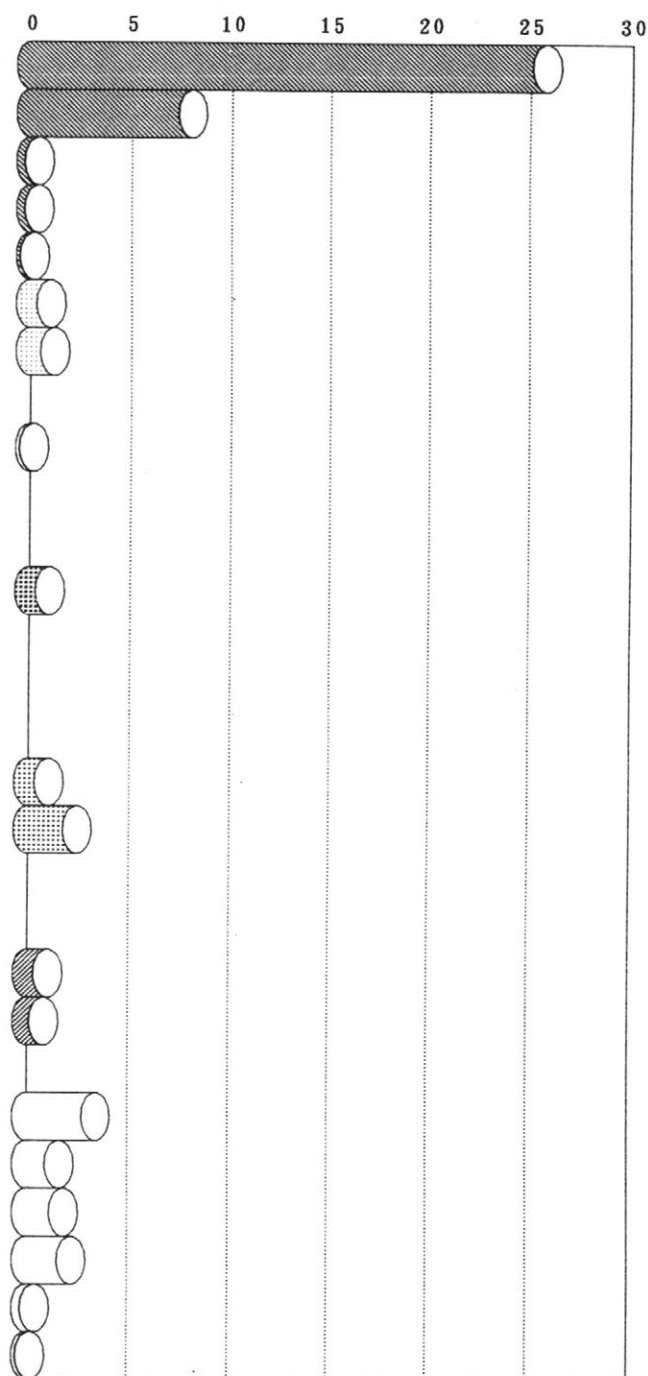
観 点	実 数	%
①基本的な生活習慣	76	15.1
②明朗・快活	85	16.9
③自主性・根気強さ	41	8.2
④責任感	33	6.6
⑤創意工夫	2	0.4
⑥思いやり	175	34.8
⑦協力性	11	2.2
⑧自然愛護	1	0.2
⑨勤労・奉仕	5	1.0
⑩公正・公平	17	3.4
⑪公共心	9	1.8
その他	48	9.5
	503	



	実 数	%	
①基本的な生活習慣	健康・外遊び	37	7.4
	命を大切に・安全	3	0.6
	ゲームばかりしない・競渡・けじめ	4	0.8
	物・金・時間を大切	4	0.8
	規則正しい生活・かま	6	1.2
	しつけ・常識	5	1.0
	あいさつ	17	3.4
②明朗・快活	明るく・陰ひなた	10	2.0
	はっきり言う	10	2.0
	素直さ	30	6.0
	のびのび	17	3.4
	正直・うそをつかない	18	3.6
③自主性・根気強さ	自主性・積極性	30	6.0
	自信	2	0.4
	やる気・意欲・面倒がらない	1	0.2
	根気よく・おきらめ・努力する	8	1.6
④責任感	自分で出来ることは自分でする	12	2.4
	人に迷惑をかけない	18	3.6
	約束を守る・証・恥	3	0.6
⑤創意工夫	2	0.4	



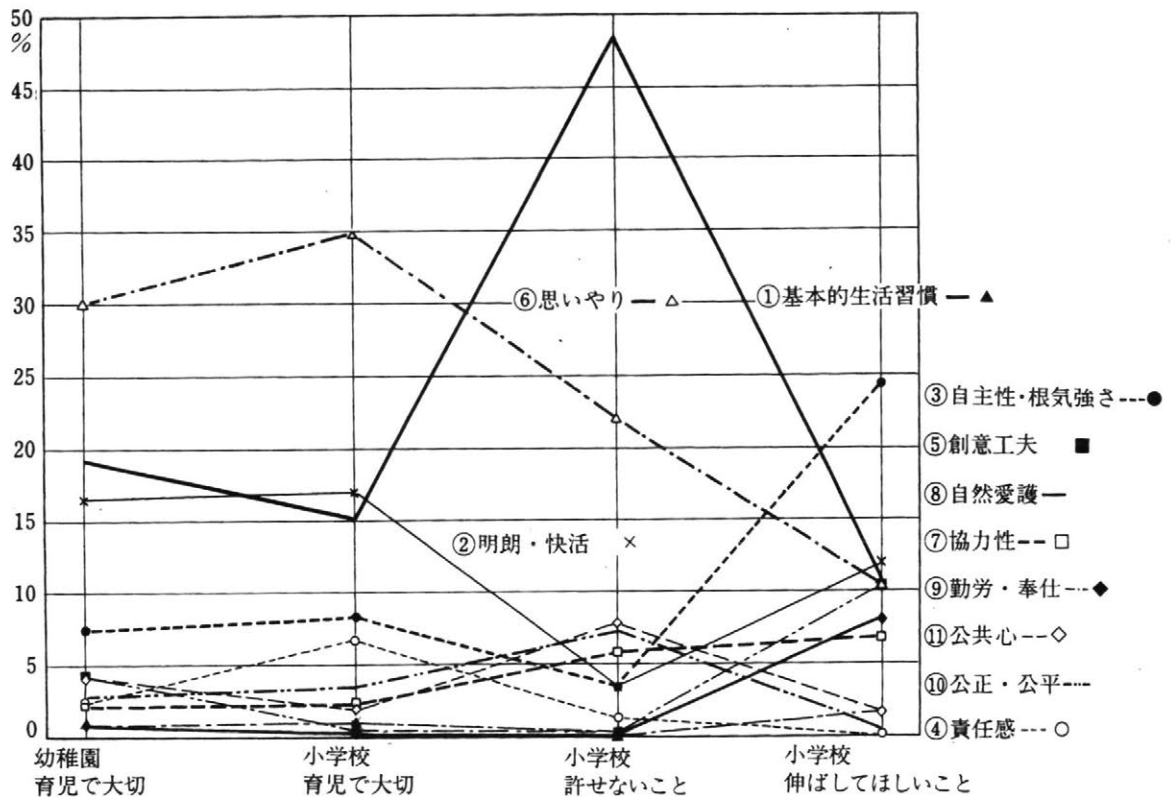
		実数	%
⑥ 思いやり	思いやり・いじめ	130	25.8
	やさしさ	40	8.0
	親切	2	0.4
	感謝 敬う	2	0.4
	情緒	1	0.2
⑦ 協力性	協調性・協力	5	1.0
	友達と仲良く	6	1.2
⑧ 自然愛護	動植物を大切に	1	0.2
⑨ 勤労・奉仕	お手伝い	5	1.0
⑩ 公正・公平	自他の尊重	5	1.0
	善悪の判断・正義	12	2.4
⑪ 公共心	迷惑をかける	5	1.0
	公共物を大切に	4	0.8
⑫ その他	親子の会話・家族のだんらん	17	3.4
	スキンシップ・愛情	8	1.6
	ほめる	9	1.8
	子どもの話を聞く・子どもの考えを大切に	11	2.2
	分け隔てなく育てる	2	0.4
	勉強 スポーツ	1	0.2
総計		503	



子どもを育てる上で一番大切にしていることは、「思いやりの心」34.8%である。次は「明朗・快活」16.9%、「基本的な生活習慣」15.1%と続いている。

特に「思いやり」については、25.8%の保護者が大切にしている。以下、「やさしさ」8.0%、「健康に気をつけ外遊びをさせる」7.4%、「自主性」6.0%、「素直さ」6.0%の順である。

小学校低学年の親が期待する子ども像は、思いやりがあり、明るくのびのびとしており、健康で外遊びがよくでき、積極性がある自分から主体的に行動できる子どもである。



(3) まとめ

◎ 親は、子どもたちの「基本的生活習慣」(48.6%)と「思いやり」(22%)が育っていないことを許せないことと考えている。特に「基本的生活習慣」の中では、「言葉づかいが悪い」(28.3%)「あいさつができない」(21.5%)「テレビゲームばかりして外で遊ばない」(17.2%)「物・金・時間を大切にしない」(14.5%)でも気にしている。学校への期待も大きい。

「育児で大切にしていること」では、「思いやり」(34.8%)が1番、次が「明朗・快活」(16.9%)、3番目が「基本的生活習慣」(15.1%)であった。「許せないこと」で、「基本的生活習慣」が48.6%と圧倒的に多いのは、ある程度日常の育児の中で育っていくと考えていたものが、十分育っていないと感じていることを意味していると考えられる。また、「思いやり」については、幼児のころから育児で大切にきてきているが、まだまだ不十分だと感じているようで、学校への期待も大きい。

「許せないこと」として登場してくるのは、意識して指導しているがなかなか我が子に身に付かない、または、自分の家の子はできているが、他の家の子はできておらず、腹立たしく思っているということを表していると考えられる。

これらの態度は、家庭生活だけでなく、学校生活の中でも見られる現象である。教師は、これらの問題を家庭教育の不十分さに原因を求めることがあるが、家庭だけでは対応しきれない状況があると考えなければならない。生活科の学習や、特別活動、道徳教育においてもこれらの内容を取り上げ、その実践化に取り組んでいるが、家庭と協力して一貫した指導をして育てていかなければならない。

学校と保護者、保護者同士の共通理解がなければ、これらの指導は効果を得ない。保護者会や、PTA活動、地域組織などを通して、共に考え一致した態度で指導していく必要がある。

特に「思いやり」に対しては、「いじめ問題」が社会問題となっている今日、子どもの健全な発達のためにも、学校、家庭、地域社会が一体となって取り組むべき問題である。

「伸ばしてほしいこと」というのは、子どもに必要と感じ、学校教育に期待する内容である。「自主性・根気強さ」が一番多いが、これは学校での学習を意識したものであろう。次いで、「明朗・快

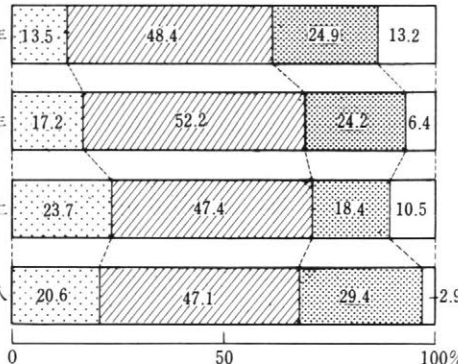
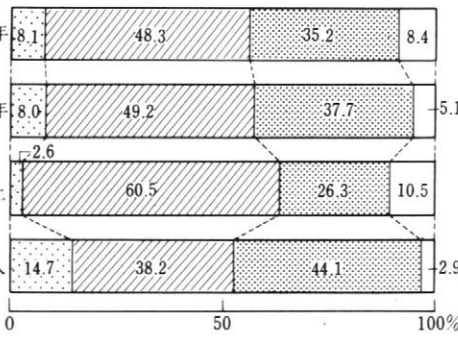
活」「創意・工夫」「自然愛護」「協力性」が学校生活に期待されている。家庭でも育てられる事柄であるが、友達とのかかわりの中で育ったり、親が対応しきれていないと考えたためであろう。家庭でも育てられる部分についても数多くあるので、どのように取り組むのがよいか相談にのっていく必要がある。

学校教育において、特に生活科の学習を通して育てられる部分が数多くあるので、指導計画に盛り込みながら意識して取り組んでいかねければならない。

伸ばしてほしいことの内容で、パソコン・ワープロに関する能力が数多くあげられていたことも見逃せない。生活科の活動においても、これらの機器を活用できる場面を検討し、表現活動のための道具として使用したり、調べ活動での情報源として活用できるよう指導していく必要がある。そのためには、教師の側でしっかりとコンピュータやワープロの可能性を把握しておかなければならない。

3. 生活科についての保護者のとらえ方

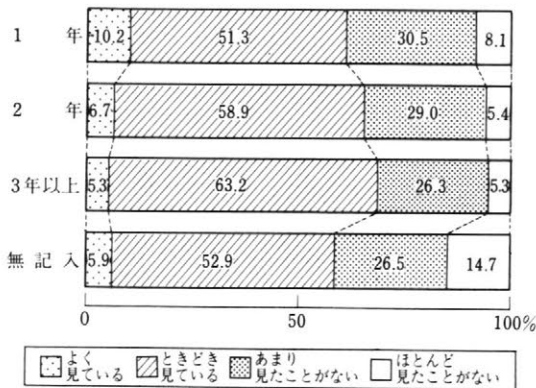
(1) 生活科に対する保護者の状況

見出し	調査結果と分析	考 察																									
生活科の授業についての会話	<p>(1) お子さんは、生活科の授業のことを家で話すか。</p>  <table border="1" data-bbox="393 486 846 851"> <thead> <tr> <th>年数</th> <th>よく話す</th> <th>ときどき話す</th> <th>あまり話さない</th> <th>ほとんど話さない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>13.5</td> <td>48.4</td> <td>24.9</td> <td>13.2</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>17.2</td> <td>52.2</td> <td>24.2</td> <td>6.4</td> </tr> <tr> <td>3年以上</td> <td>23.7</td> <td>47.4</td> <td>18.4</td> <td>10.5</td> </tr> <tr> <td>無記入</td> <td>20.6</td> <td>47.1</td> <td>29.4</td> <td>2.9</td> </tr> </tbody> </table> <p>「よく話す」15.1% 「ときどき話す」50.2% で、あまり話していない。</p> <p>生活科の準備等で話題にする機会が多いと思われるが、なされていない。また、子どもの好きな教科にもあげられているが、親の忙しさからか、保護者と子の対話のなさからか、家庭では話題にしていないようである。話さないということは、生活科の学習の楽しさに関係しているのであろうか。</p>	年数	よく話す	ときどき話す	あまり話さない	ほとんど話さない	1年	13.5	48.4	24.9	13.2	2年	17.2	52.2	24.2	6.4	3年以上	23.7	47.4	18.4	10.5	無記入	20.6	47.1	29.4	2.9	<p>生活科は、家庭の協力が大切である。この現状をふまえ、さらに生活科の趣旨や学習状況、家庭での協力について家庭に情報を伝え、連携する必要がある。</p>
年数	よく話す	ときどき話す	あまり話さない	ほとんど話さない																							
1年	13.5	48.4	24.9	13.2																							
2年	17.2	52.2	24.2	6.4																							
3年以上	23.7	47.4	18.4	10.5																							
無記入	20.6	47.1	29.4	2.9																							
生活科の生活化	<p>(2) お子さんは、生活科で学んだことを家で生かしているか。</p>  <table border="1" data-bbox="393 1526 846 1869"> <thead> <tr> <th>年数</th> <th>生かしている</th> <th>ときどき生かしている</th> <th>あまり生かしていない</th> <th>ほとんど生かしていない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>8.1</td> <td>48.3</td> <td>35.2</td> <td>8.4</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>8.0</td> <td>49.2</td> <td>37.7</td> <td>5.1</td> </tr> <tr> <td>3年以上</td> <td>2.6</td> <td>60.5</td> <td>26.3</td> <td>10.5</td> </tr> <tr> <td>無記入</td> <td>14.7</td> <td>38.2</td> <td>44.1</td> <td>2.9</td> </tr> </tbody> </table> <p>「生かしている」8.0% 「ときどき生かしている」48.5% で、あまり生かされていない。</p>	年数	生かしている	ときどき生かしている	あまり生かしていない	ほとんど生かしていない	1年	8.1	48.3	35.2	8.4	2年	8.0	49.2	37.7	5.1	3年以上	2.6	60.5	26.3	10.5	無記入	14.7	38.2	44.1	2.9	<p>生活科が子どもの自立の基礎を養う教科ということからは、一日の生活の大半を過ごす家庭で、その学習が生かされていないという状況は学校側の責任であるとも言える。</p> <p>生活科の学習が生活に生かされるよう家庭との連携を一層密にしていかなければならない。</p>
年数	生かしている	ときどき生かしている	あまり生かしていない	ほとんど生かしていない																							
1年	8.1	48.3	35.2	8.4																							
2年	8.0	49.2	37.7	5.1																							
3年以上	2.6	60.5	26.3	10.5																							
無記入	14.7	38.2	44.1	2.9																							

生活科で学んだことが生活化することを願って授業を進めている。しかし、「あまり生かされていない」、ということは大変残念な結果である。ただ、前問の結果に見られるようにあまり子どもが話していないために、保護者が生活科の内容を理解していないことも考えられる。

教科書への
関心

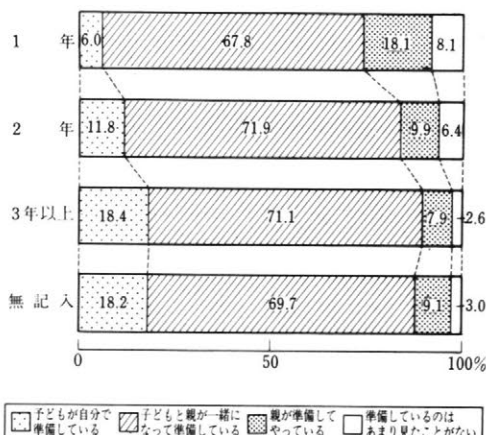
(3) 生活科の教科書を見たことがあるか。



「ある」1年生21.8% 2年生34.3%で、2年生で増えてはいるものの、見たことがない人が非常に多い。国語や算数等、知的教科に偏った意識の表れであろうか。

材料・用具
の準備

(4) 生活科で使う材料や道具は、だれが準備しているか。



「子どもが」1年生6.0% 2年生11.8% 「子どもと親で」1年生67.8% 2年生71.9% 「親が」1年生18.1% 2年生9.9%である。学年が上がると、自分で準備する子どもが多少増えているが、保護者がかかわっている場合が多い。

保護者が子どもの教科書を見ることはあまりないかもしれないが、内容を理解してもらう上では、教科書は有効な資料である。

保護者には全く経験のない教科である。保護者会や、学年頼り等で保護者に働きかけ、生活科と子どもの自立という観点から理解してもらう必要がある。

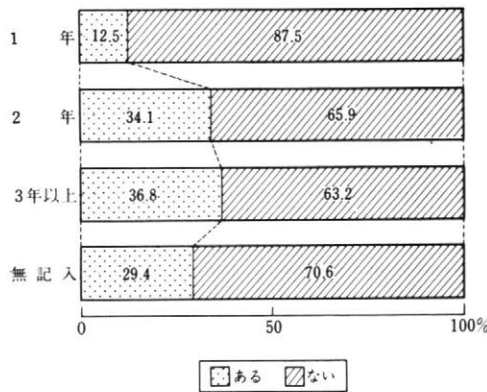
生活科の材料の準備は、自立の観点から、基本的には子ども自身がすべきである。内容によっては保護者の協力を求める必要があることもあるが、準備する主体は子どもでなければならない。

前項の「生活科のことを話すか」「教科書を見たことがある」との結果とは矛盾する数字となっているが、保護者は、生活科の学習ということは意識しないで、材料の準備を手伝っているのであろうか。

保護者に、生活科の趣旨をよく説明し一層の理解を求める必要がある。

授業参観経
験

(5) 学校での生活科の授業を見たことがあるか。



「ある」1年生12.5% 2年生34.1% で、見たことのある保護者が非常に少ない。

1年生については、調査時期が1学期末であるため少なかったとも考えられるが、予想に反する結果である。生活科が子どもたちの自立の基礎を養うことを目標としていることから、学校側のあり方が問題である。

具体的には、教師の生活科の授業に対する考え方に問題があるのかもしれない。

例えば、何をやっているのか理解されにくい、收拾がつかなくなりそう、教師の指導が見えにくい、生活科をあまり理解していないのでやりにくい等が授業を見せない理由として考えられる。

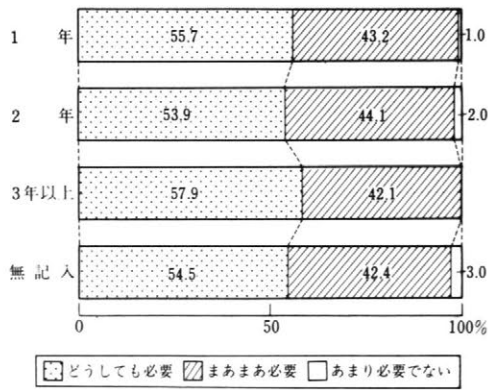
教師は、授業を通して保護者に理解してもらおうよう努力しなければならない。活動によっては、保護者も巻き込んで行う授業もある。教師の意識改革が必要である。

- ◎ 保護者の生活科に対する理解度は低い傾向がある。教科書を見ていなかったり、子どもとの話題に出なかったり、授業を見たことのない人が多かったりと、生活科を理解する機会に欠けている。生活科が、今の子どもたちの発達課題の解決のために新設された教科であることを考えると、本格実施6年を経た現在、こうした状況は憂慮すべきことと言える。

教師は、保護者会や学年便り、授業参観などを通して保護者に生活科の趣旨やねらい、活動を伝え、一層の理解と協力を求めていかねばならない。

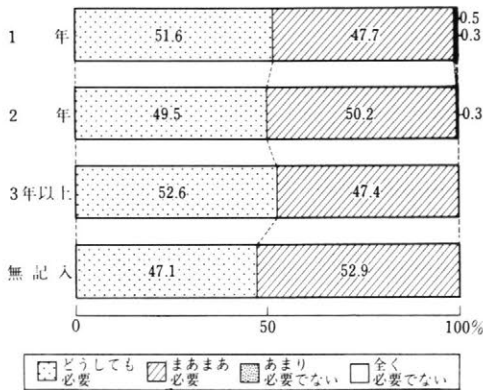
(2) 生活科の学習で必要と考える内容

見出し	調査結果と分析	考察
小動物の飼育	<p>(6) 生活科では、以下のようなことを学習することがありますが、これは必要なことだと思いますか。</p> <p>① 小動物の飼育</p>	<p>動植物の飼育栽培についての必要性は高い支持を得ている。都市部に限らず自ら自然にかかわる機会が少なくなってきた現状からは、せめて学校でそうした機会と体験をとという保護者の願いがあ</p>



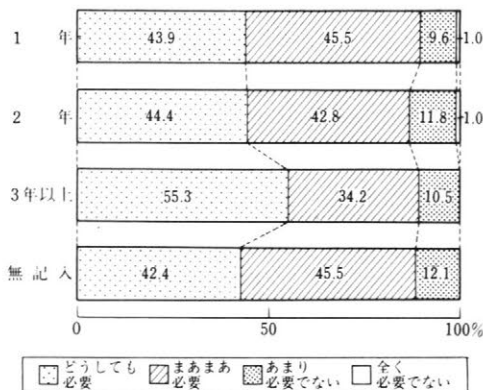
植物の栽培

② 植物の栽培



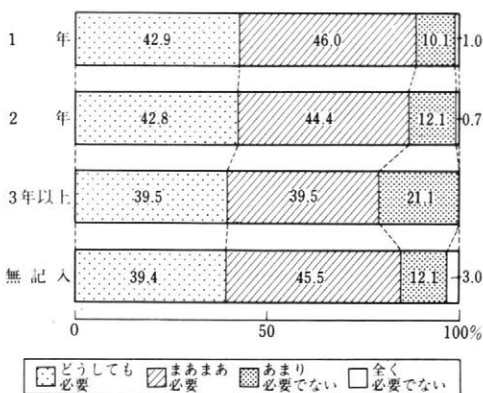
交通機関の利用

③ 電車やバスの利用



買い物

④ 近所の店での買い物



るものと受け取ることができよう。

子どもたちの「心の教育」が問題となっている状況の中で、自然とかかわる活動の重要性を再認識し、生活科の内容としてより充実させていくことが大切である。

「電車やバスの利用」の内容については、1割強の保護者が必要であるとはしていない。自家用乗用車の普及や社会的状況（交通事故の危険性）等がその背景にあると思われる。

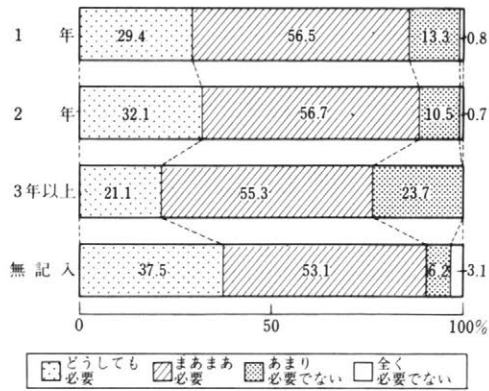
しかし、単に危険であるということだけで必要でないとするのであれば、子どもたちの生活の自立という観点からは問題である。

「買い物」「料理」「靴洗い、食器洗い」についても1割強の保護者が必要とは考えていない。家庭での学習や体験の機会が多いということがその背景にあるのであろうか。3年生以上になると2割強になっていることからそれが伺える。

しかし、この内容を家庭での「手伝い」という観点でとらえるならば、手伝いの機会が少なくなっている現状と合わせ、「子どものできることを増やす」という自立の方向で保護者を啓蒙していくことが大切ではなかろうか。

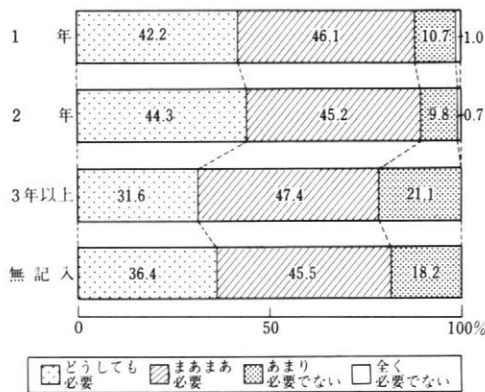
料理

⑤ 簡単な料理



家の仕事

⑥ 自分の靴洗いや食器洗い



保護者会などを通して、生活科の活動について理解を求め、学校と家庭が子どもの自立という観点から共に活動を創っていく必要がある。

①小動物の飼育、②植物の栽培については、ほとんどの親が必要と考えている。

③電車やバスの利用、④近所の店での買い物、⑤簡単な料理、⑥自分の靴洗いや食器洗いについては、あまり必要と思っていない親が11～13%ほどいる。特に料理については、「どうしても」という親が少ない。子どもがやった後をやり直すので面倒だ、まだやらせられない、などの意識があるのであろうか。

飼育、栽培など、自然とかかわる活動は、思いやりや優しさに関連するので、より必要と思われるのかもしれない。

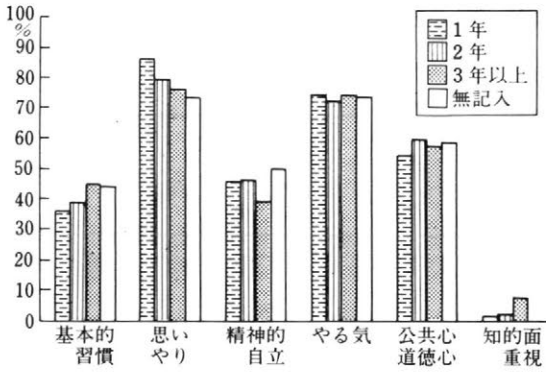
他の活動については、そこまでやる必要がないとか、家庭ですることであるなどの理由が予想される。

◎ 動植物など自然とのかかわりは、ほとんどの親が必要と感じている。これは、人間関係の希薄化や豊かな心の育ちが問題にされているからであろう。

交通機関の利用や買い物、料理、靴洗い・食器洗いなどについてあまり必要と思わない保護者が

11～13%ほどいたが、家庭での価値観の違いが表れている。家庭で、こうした内容を子どもに身に付けさせるべく親が意識してやっておれば問題はないが、単に「こんなことまで子どもに」という意識があるとすれば問題である。これらの活動については、保護者に趣旨をよく伝えるときともに意見を聞きながら、どのような活動形態をとるのがよいかを検討していかなければならない。

(3) 生活科の学習に期待すること

見出し	調査結果と分析	考察
これからの生活科への期待	<p>(7) これからの生活科の学習にどのようなことを期待するか。 (最大3つまで複数回答)</p> <p>ア. 基本的な生活習慣や生活技能の指導をしてほしい。 イ. 友だちや他人への思いやりの心が育つように指導してほしい。 ウ. 精神的な自立やたくましさを身に付けるように指導してほしい。 エ. 直接体験の機会を多くし、やる気が育つように指導してほしい。 オ. 公共心や道德心を養うように指導してほしい。 カ. もっと知的な面を重視してほしい。</p>  <p>①思いやりが82.5%と一番求められている。これは、いじめなどの友人関係の問題が起きていることに関係しているのであろう。 ②やる気73.1%である。これは、自主的、自発的な行動を求めていると考えられる。 ③公共心・道德心、④精神的自立、⑤基本的な生活習慣は低い。特に基本的な生活習慣が低い。これらは、道德教育の範疇であると考えられているのか、親自らが家庭で育てればよい</p>	<p>「思いやり」「やる気」についての期待が他の項目に比べ高い率を示している。低学年の子どもたちは、本来この要素は備えているはずであるが、今日的な子どもたちの状況が反映しているのであろう。</p> <p>一方、「知的面の重視」への期待がわずか2%強ということ。「3項目」までの選択を制限したためであろうか。生活科といえども、知的面を抜きにしては成り立たないはずであるが、数字に表われる知的な要素は期待しないということであればよいが…。</p> <p>「基本的な生活習慣」への期待が4割弱ということにも注目する必要がある。今の子どもたちに最も欠けている発達課題であり、生活の自立、精神的自立、学習の自立の基盤になる内容だけに気になるところである。「心の教育」を優先させている結果とも受けとれる。基本的な生活習慣の習得は、生活科だけで行うべきことではないが、「自立」という観点からもう少し保護者に関心を持つように問いかけていく必要がある。</p>

と考えていることが予想される。生活科への
関心の薄さが気になるところである。

(4) まとめ

- ◎ 「思いやりとやる気」の期待が大きい。現在の子どもたちの状況から当然の期待と言える。生活科の活動においても、これらの心が育つよう活動内容や指導方法の工夫をしていかねばならない。
- また、公共心・道徳心などの内容は、あまり期待していない人が多かった。これらは、道徳教育などでの指導を期待しているものと推測される。しかし、これらの内容も、生活科の中でも育っていくものなので、道徳やその他の指導と連携しながら取り扱っていく必要がある。同時に、これらの内容は、家庭でのしつけの基本的な内容でもあるので、連携・協力が重要である。

4. 保護者の意識のまとめ

(1) 子どもの生活と生活科のかかわり

自立の基礎となる、社会生活を送る上で必要な、あいさつや、マナーを守って公共施設を利用したり、交通ルールを守ったりなどの基本的な生活習慣は比較的よく身に付いている。また、電話などを利用して必要なことを伝達したり、自分が言いたいことを表現したりすることも身に付いている。地域行事への参加も積極的に行われており、学校週五日制の本格的導入に向け、よい傾向である。

学習の自立に関しては、身近な草花や、小動物などを大切にしたり、興味や関心のあることに夢中で取り組んだりすることはできている。一方、家事の一部を責任を持ってやったり、一人で交通機関を利用したり、積極的に公共施設を利用したりすることは、あまりなされていない。

これらは、保護者が何でも先回りしてやってくれるため、自発性が不足したり、指示待ちの姿勢が増えたり、面倒なことを避けたがる傾向や、人とかかわる機会の不足などに起因していると考えられる。

精神的自立に関しては、善悪の判断ができたり、与えられた仕事は、最後まで責任を持ってやったり、小さい子や年寄りに親切にできたり、というようなことはよく身に付いている。これらは、生活科での成果もさることながら、保護者の願いと一致しており、家庭での指導も効果をあげていると考えられる。

精神的自立を図るためには、教師や保護者があまり手を出しすぎず、適切な支援をしつつ見守る姿勢が大切である。

(2) 保護者・学校・生活科のかかわり

保護者の生活科に対する理解度は低く、教科書を見ていなかったり、授業を見たことがなかったり、子どもと話題にしたりしたことがないなどの現状が見られる。保護者は生活科を経験していないため、子どもと一緒に生活科で使う材料を用意していても、生活科のために用意しているとは意識していないようである。

生活科の内容に関する意識では、動植物など、自然とのかかわりはほとんどの保護者が必要と感じている。これは、人間関係の希薄化や豊かな心の育ちが問題にされており、保護者も強い関心をもっているからであろう。心を豊かにする活動は、これからも大切に扱っていきたい。

一方、買い物や料理、靴洗い、食器洗いなどの活動は、あまり必要と思っていない保護者が1割

強いが、家庭での価値観の違いが表れているためであろう。

保護者の生活科に対する理解度が低い傾向があるが、今の子どもたちの発達課題の解決のために新設された教科であることを考えると、こうした状況は憂慮すべきことと言える。学校としては、積極的に生活科の授業を公開したり、保護者会や学年便りなどで、その趣旨やねらいを伝え、一層の理解と協力を求めているかなければならない。

また、保護者の願いの中には、情報化や国際化、環境に関するものも多く見受けられた。これからの生活科の中では、これらに関する内容も取り上げ、子どもたちの意識を育てていく必要がある。

(3) これからの生活科

教師が教材の選択や学習への苦手意識をもったり、面倒に感じたりすると学習が十分になさなくなる。教師は、十分な教材研究を行うとともに、子どもを支援するというかわり方を身に付けなければならない。また、保護者に活動の趣旨をよく伝えるとともに、意見を聞きながら、どのような活動を取り入れるのか、どのような活動形態を取るのが望ましいのかを検討していかなければならない。主体性を尊重した学習方法や、学習形態を取り入れていくとともに、人や物とのかかわりの楽しさを体験させるような授業になるよう、工夫と改善をしていかなければならない。

さらに、保護者と連携をとり、すぐに手や口を出さず、子どもを見守り、励ます姿勢を保護者にも身に付けてもらう必要がある。保護者会などを通して、生活科の活動について理解を求めていく。学校と家庭が子どもの自立という観点から、共に活動を創っていく必要がある。

保護者の価値観が多様化する中で、「こんなことまで子どもに」という意識をもたれるような場合など、活動の趣旨をよく伝え、理解と協力を求めるとともに活動形態を検討していく必要がある。

「思いやり」と「やる気」を伸ばしてほしいという保護者の願いが大きい。生活科や道徳その他の教科の指導と連携しながら取り扱っていく必要がある。同時にこれらの内容は、家庭での育児やしつけの基本的な内容なので、連携協力が重要である。子どもを過保護にせず、成長を見守り、子どもに任せる事柄を増やしていくことの必要性を知らせ、啓発していかなければならない。

生活科は、子どもたちの自立への基礎に結び付く学習である。子どもたち一人一人が生活化できるまで、根気強く見守る親や教師の姿勢が大切である。

学校、家庭、地域が連携をとりながら、生活科で学んだことが、家庭や地域の中で生かしていけるような家庭生活や、地域行事のあり方などについて、三者で話し合っていく必要がある。

生活科が子どもの成長にとって有効な学習になるには、教師は自分の好き嫌いや既成の枠で学習を考えていたのではだめである。常に子どもの生活を見つめながら、今の子どもたちに何が必要なのか、子どもたちや親は何を求めているのかをしっかりと把握して活動を構成し、展開していかなければならない。活動の原点は子どもの生活にあることを、さらには、家庭や地域の中で学んだことが生活化していくことの重要性を強く肝に命じておく必要がある。

V 生活科の学習に対する教師の意識

■ 調査研究の結果の概要

子どもたちの自立を意識して指導している様子が分かるが、反面、そのための有効な手だてである自己評価は、あまり実施されていない。このことは、具体的な指導の方策が、正しく理解されていないのではないかと考えられる。

また、自立についての認識も、興味・関心・意欲や自己表現などが意識されているが、集団とのかかわりの中での育ちについては、あまり意識されていない様子がうかがわれる。また、基本的な生活習慣を身に付けることが、生活科の大きな目標であることについて、意識を新たにすることが大切である。

生活科の学習の成果として、身近な素材に対する興味・関心、行動力、自発性、表現力などがあげられている。反面、自制心・選択力、集中力、持続力などが育っていないという結果が見られる。このことは、学習上の自立といった生活科の主たるねらいが達成されていないと言える。一方、具体的な指導の場面では、子ども一人一人に自信をもたせる、よさを認め合う、その子らしさを発揮できるようにする、目当てをもってかかわりを深めるなど、ポイントを押さえた指導を心がけている様子が分かる。また、合科的指導や他学年との合同学習、地域や保護者との連携等、これからの学校教育の方向を見据えた指導が行われている様子が見られる。

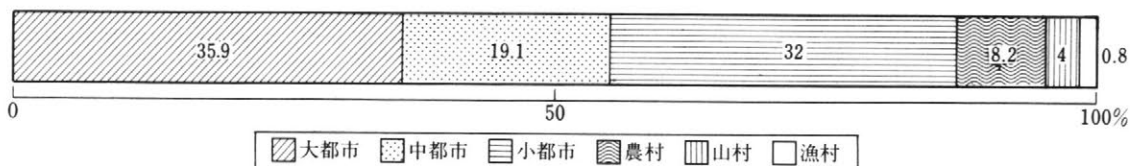
生活科学習の成果のとらえ方が、教師と保護者で大きくかけ離れている。教師は、子どもの変容を肯定的にとらえていると言える。反面、保護者の見方は厳しい。

生活科学習における家庭との連携の様子では、教材の準備、体験の機会の増加、学習の生活化などが大きく取り上げられている。しかし、学習内容の生活化など、生活科の学習の様子を保護者に正しく、十分に知らせるとともに、その趣旨を理解してもらうことが必要である。

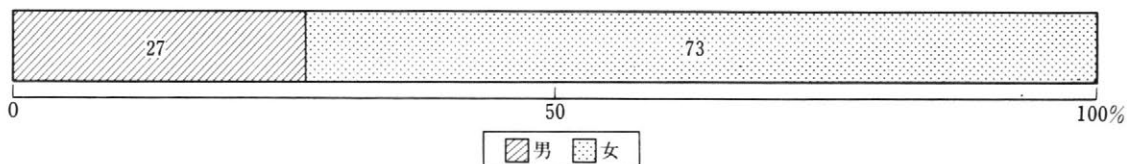
〔回答者の状況〕

本調査の回答教師数は254人である。全回答者の状況は次の通りである。

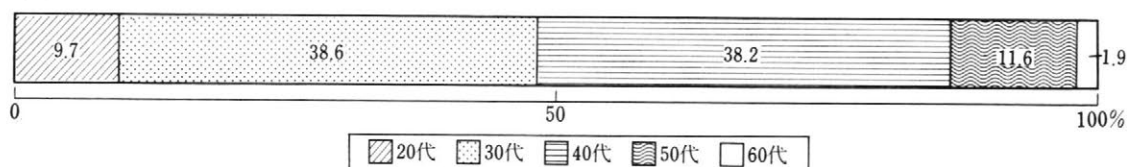
(1) 勤務地域 * (1)~(4)を帯グラフ



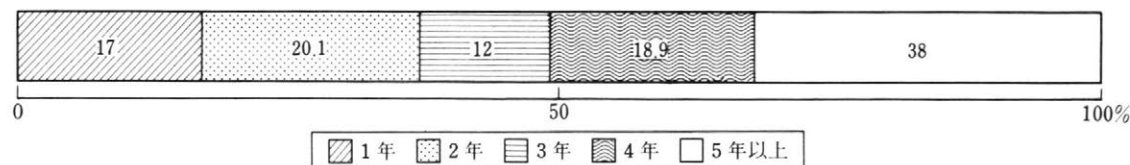
(2) 性別



(3) 年代



(4) 「生活科」の指導経験

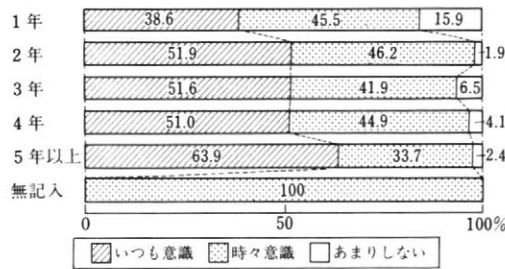


1. 生活科の目標や評価に対する考え方

(1) 自立に対する意識

見出し	調査結果と分析	考察								
自立の基礎を養うことへの意識	<p>11 生活科の目標である「自立の基礎を養う」をどの程度意識して指導しているか。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>意識の程度</th> <th>割合 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>いつも意識</td> <td>53.1</td> </tr> <tr> <td>時々意識</td> <td>41.5</td> </tr> <tr> <td>あまりしない</td> <td>5.4</td> </tr> </tbody> </table> <p>自立の基礎を養うことを「いつも意識している」「ときどき意識している」を合わせると、94.6%となり、目標への意識が非常に高い。</p> <p>これを、回答者の指導経験とクロスさせると、次のような結果である。</p>	意識の程度	割合 (%)	いつも意識	53.1	時々意識	41.5	あまりしない	5.4	<p>生活科は「自立の基礎を養う」ことを究極の目標としている。このことが多くの教師に意識づいているということは、生活科の学習が定着しつつあることが読み取れる。</p> <p>「自立」には、当初、指導者としての教師には戸惑いがあった。自立の文言をどう解釈し、具体的にどのような子どもにするのかといった論議が盛んであった。</p> <p>しかし、全面実施6年を経過したことが生活科の定着の方向にあることを示している。</p> <p>目標を十分認識していることは大変結</p>
意識の程度	割合 (%)									
いつも意識	53.1									
時々意識	41.5									
あまりしない	5.4									

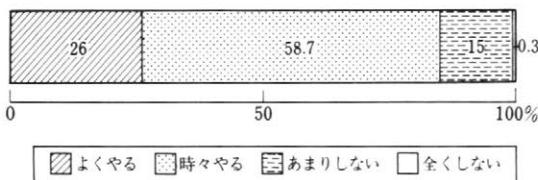
設問11と(4) 「自立の基礎を養う」を意識して指導する人と生活科の指導経験



「いつも意識している」をみると、指導経験が多くなるほど高いといえよう。「いつも意識している」というのは、かなり意識的に指導しているときに回答すると想定できるので、指導経験が多くなるほど、自立を意識した指導が行われていることがうかがえる。

授業後の自己評価の実施程度

15 授業中または授業後の自己評価（振り返り）は、どの程度やっているか。



自己評価への取り組みは、「ときどきやる」「よくやる」を合わせると84.7%と、かなり高い。

しかし、「ときどきやる」というのは、年間数回程度でも「ときどき」となるから、「よくやる」だけを見ることが実態に近いと思われる。すると、実態としては、高いとはいえない難くなる。

自立の基礎のとらえ方

12 生活科の目標である「自立の基礎」はどんなことであるか。（最大5つまで複数回答）

構なことである。しかし、具体的な子ども像とか、自立の基礎を養うための具体的な活動が具体化されているかどうか、教師の指導意識は課題である。

自分自身を振り返り、できたこと・できなかったこと等を明らかにさせていくことは、自分自身への気付きにつながる。

自立意識の育成にとって、自分自身への気付きは不可欠のものである。自立の基礎を養う上で、自己評価能力を付けさせることは大事なことと言えよう。

自己評価があまりやられていないとしたら、「生活科の目標を周知している（設問11）の「目標」が、お題目になっているのではなかろうか。

こうした結果になった背景には、

- ・自己評価の目的が理解されていない。
- ・何をどう評価していいのか分からない。
- ・自己評価に時間をとれない。

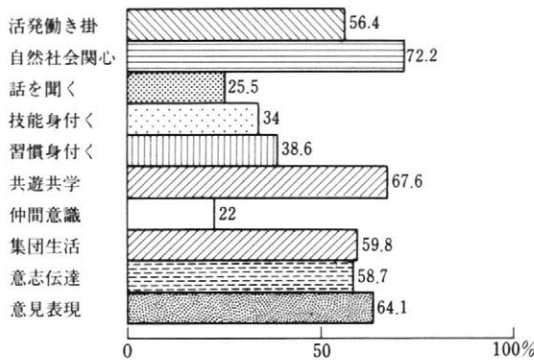
等があるのではないか。

生活科の指導書や指導資料等で自立の基礎を養う上で大切なことが解説されているが、上位グループは指導書に上げられたものとなっている。指導書の影響力が大きいことを物語っている。

また、下位の「帰属意識」や「人の話を聞く」ことは、人間が生活していく上で基盤となるものである。さらに、「日

教師がとらえた「自立した子ども像」とは、「自然や社会に積極的にかかわる意欲や関心をもち」「共に遊び、共に学んでよりよい生活ができる」「自分の考えや意見をはっきりいえる」「集団や社会の一員として集団生活ができる」「自分の意志を人に伝えることができる」子どもが浮かび上がってくる。

反対に下位グループは、「仲間意識や帰属意識をもつ」「人の話を聞く」「日常生活に必要な技能を身に付ける」「日常生活に必要な習慣を身に付ける」となっている。



常生活に必要な技能を身に付ける」ことは、生活科の目標にあげられているにもかかわらず、教師は重要とはとらえていない。

特に、「帰属意識」がこうした結果であることは気にかかる。子どもたちは、地域の人たちとふれあい、地域の人たちの生きざまにふれたりする中で、自分自身とのかかわりや自分の生き方を振り返ったりする。自立の基礎は、こうした中で養われていく。地域への帰属意識をもつことは、自立への基礎を養う上で大きな意味をもつものである。

下位グループとなったものの原因として、

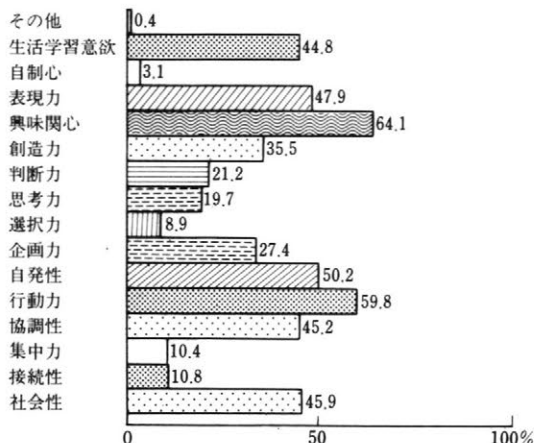
- ・「仲間意識や帰属意識」が、子ども一人一人の自立を養うことにつながることを意識していない。
- ・「基本的生活習慣」は本来、家庭が行うべきもので学校がそこまでやらなくてもよいという意識がある。
- ・「仲間意識」や「人の話を聞く」ことは個より集団を重視しているととらえており、個性重視の生活科にそぐわないという意識が強い。

等が考えられる。

(2) 生活科で育つ力

生活科で育つ力 13 生活科の指導を通して、子どもたちにどんな能力が培われたと思っているか。

(最大5つまで複数回答)



行動力に富むということと、自制心が低いということをどうみたらよいのだろうか。

3年になって「生活科で育った子どもたちはわがままである」といった教師の言葉が聞かれるが、この結果と符号する。

自制心を「わがまま」ととらえているならば、教師の子ども観が問題ではなからうか。むしろ、それは、活動意欲や知的好奇心ととらえるべきではないかとも考えられる。

このことは、「集中力」や「持続力」が低い数値となっていることから裏付

教師は、生活科を学んだ子どもは「興味・関心」をもち、「行動力」「自発性」「表現力」を発揮し「社会性」に富むととらえている。

次いで数値が高いのは「生活や学習への意欲」「協調性」「創造力」である。

反面、低いのは「自制心」「選択力」「集中力」「持続性」である。

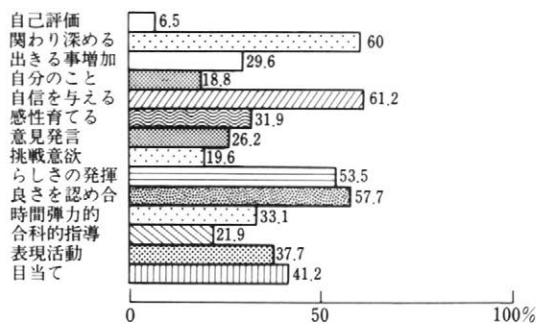
生活科を学んだ子どもたちは「興味・関心」が高くなることは、各方面の調査からも明らかになっている。しかし、「興味・関心」は学習への窓口であるから、「行動力」や「自発性」という能力が育ったということは、好ましい結果である。

けられる。子どもは好きなことには熱中して取り組む。集中力や持続性に欠けるということは、見方をかえれば夢中にさせる活動ではないともいえる。教師主導になっている、待ちきれずすぐ助言する、裏方に徹していない、子どもへの信頼感をもっていないといった教師の指導上の問題とも受け取れる。この懸念は「企画力」や「判断力」にも通ずることである。

(3) 教師の指導観

生活科の授業で大切にしていること

14 生活科の授業ではどんなことを大切にしながら指導しているか。(5つ選択)



教師が生活科の授業で大切にしていることは、「自信をもたせる」「かかわりを深める」「よさを認め合う」「その子らしさの発揮」「目あてを持たせる」である。

下位グループは、「自己評価ができる」「自分のことは自分でできる」「挑戦意欲を引き出す」である。

生活科は、一人一人の子どもに即した指導を大切にしている。従来の教師主導ではなく、子どもの側に立つ指導である。

即ち、教師の子ども観や指導観、評価観を変えることを求めている。

上位にあげられたものをみると、生活科の目標に沿うものであり、子どもの側に立つ指導観に立ったものといえる。

しかし、下位をみると子どもの育ちを援助する(自立の基礎)という生活科の目標からは、教師の指導法に問題があると言えよう。

こうした結果になった背景には、

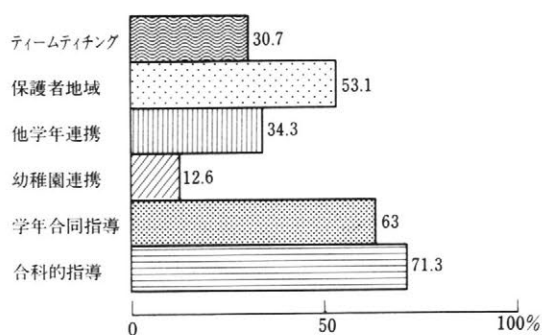
- ・一斉指導の習慣が抜けきらない。
- ・子どもを手放す活動に勇気がない。
- ・生活科の指導のあり方が理解できていない。
- ・自己評価、気付き、意欲といった新しい観点に未だなじんでいない。

等、生活科の授業観が確立していないことがあるのではなかろうか。

生活科の学習形態の工夫

20 生活科の学習形態でどのような工夫をしているか。(最大3つまで複数回答)

生活科は従来の学習形態を変えたと言われる。学校外学習が多くなるため学年合同授業としたり、TTを取り入れる等の工夫が見られる。また、効果的な学習



上位グループは、「合科的指導」「学年合同の指導」「保護者・地域の人とのかかわりを強める」である。低学年でしかできない生活科という教科が、保護者・地域への啓蒙、他学年との連携に役立っていることがうかがえる。

一方、下位グループは、「幼稚園や保育園との連携」である。生活科は幼稚園と小学校との接続を円滑にすることも考慮して新設された。実態は連携が強化されたとはいえない。

とするため、合科的指導もよくなされている。調査結果からもこのことが裏付けられている。これらの点は、総合的な学習や学校週五日制にもつながる視点でもある。

一方、幼小の連携が強化されていないことは、生活科新設の趣旨からも重要な課題である。

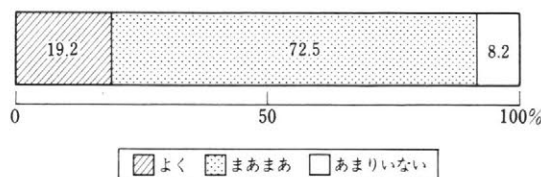
連携を阻害する背景には、

- ・近くにないという地理的な要因
 - ・互いの忙しさ
 - ・目標を照らし合わせることの煩雑さ
 - ・互いの教育課程に踏み込まないという遠慮
 - ・連携する意義を認めない
- 等が、推測される。

こうした要因を取り除き、幼小の円滑な接続を図り、異年齢とのかかわりで自立の基礎を養うことが課題である。

(4) 学習の生活化

生活科の生活化 19 生活科で学習したことが子どもたちの生活に生かされていると思うか。



教師は、「まあまあ生かされている」「よく生かされている」を合わせて91.7%が生かされていると回答している。

これに対し、小学校保護者は、「ときどき生かしている」「生かしている」を合わせて56.5%である。

(小学校保護者への質問☆2 p. 78参照)
「よく生かしている」だけをみても教師19.2%に対して、保護者8.0%と半分以下である。教師と保護者の見方のズレはかなり大きい。

生活科の活動は子どもの生活をより豊かにし、よき生活者をつくるためになされるので、学習結果は子どもの生活に返っていかねば学習成果とは言えない。

家庭は、自立の基礎を養う実践の場である。学校と家庭が連携し、子どもの実践を支援していくことが大切である。

しかし、調査結果から保護者は生活科で学んだことを家庭で生かしているとは思っていない。教師と保護者にズレが生じた要因として、

- ・生活科をやっている教師は、子どもや保護者を肯定的に見ている。
 - ・教師として生活科をよくやってきたという自負がある。
 - ・保護者に生活科を理解してもらうことに対する努力が十分でなかった。
 - ・保護者は、子どもを甘やかす反面、自分の子どもを厳しく見ている。
- 等が考えられる。

(5) まとめ

1 「自立の基礎を養う」という教師の意識を高めていく

調査結果から、教師は「自立の基礎を養う」生活科の目標については周知しているが、そのための指導のあり方や考え方には未だ十分な理解が得られていないということがうかがえた。そのため、以下のような点を推進していくことが大切であろう。

◆自立した子ども像をもつ

「自立した子ども」とは、具体的にどのような子どもなのかを教師が明確にしておくことが大切である。昨今、生活科の研究会に集まる教師が少なくなったと聞く。新設教科の生活科が何をめざし、そのためどのような指導が必要かという論議を初心にかえて行っていくことが、今こそ大切である。

◆自己評価を積極的に授業に取り入れる

自立の基礎を養うために自己評価の意義や果たす役割について、教師自身が十分に認識し、自己評価を学習の中に日常的に位置づけていくことが必要である。

自己評価に当たっては、評価の補助手段としてではなく、子どもが自分自身の学習を振り返るといった観点から、評価内容を考慮することが大切である。そのためには、学習が楽しかったか、何を作ったか等を聞くだけでなく、めあて通りにできたか、できなかったとすればその理由は何かを考えさせたり、がんばったことやできるようになったことは何かを振り返らせたりすることを問う内容としていきたい。

2 自立の基礎を養うために、「仲間意識や帰属意識」「基本的生活習慣」の視点も重視する

教師がとらえた「自立した子ども像」は、生活科指導書にそうものとなっている。反面、「仲間意識や帰属意識」「基本的生活習慣」については、あまり意識されていない。そのため、例えば以下のような観点から指導の改善を図る必要がある。

- ・集団で活動したり学び合う場の設定を増やし、子ども同士のかかわりを増やす指導を取り入れる。
- ・より積極的に地域にでて「地域で一番好きなことを見つけよう」といった学習を展開する。
- ・指導計画に「基本的生活習慣を身に付けさせること」を明確に位置づけて指導していく。
- ・家庭との連携を密にして、家庭でやるべきことを保護者に意識づけて、学校と家庭が協力して子どもへの定着を図る。

3 子どもの側に立つ指導法や指導形態の改善を図る

子どもの側に立つ指導への転換が図られている一方で、従前の教師主導の指導を行っている実態もみられた。そのため、以下のようなことをポイントにして指導の改善を図ることが重要である。

◆子ども観をとらえ直す

- ・子どもの思いや願いを見取る。
- ・子どもの発達への理解を深める。
- ・子どもを見取る教師の目を育てる。

◆子どもの願いを基に授業を展開する

- ・子どもを信頼して任せる、子どもに教材や活動を選択させることを心がけた指導を行う。
- ・子どもの自己評価の観点に「学習への満足感」や「学習への集中度」等を問うことを加え、教師自身が指導を振り返る。

◆中・高学年担任の生活科への授業参加の機会を増やす

生活科は保護者・地域への啓蒙、他学年との連携や子どもの側に立つ学習指導の改善に役立っていたことが調査から明らかになった。こうした生活科の役割を、全教職員に理解してもらうことが大切である。そのため、生活科に対する確かな理解と指導観を確立する全校的な体制での取り組みが大切

である。

◆幼小の接続を円滑にし、子どもの育ちを支援する

生活科は幼稚園と小学校の接続を円滑にし、子どもの育ちを支援していくこともねらいとしている。したがって、以下のような点を推進していくことが重要であろう。

- ・幼小連携のメリットを子どもの育ちや子どもの見取りを通して明確に示していく。
- ・地域の校長・園長会で連携への道筋をつけていく。
- ・幼小連携の教育課程を具体的に作成し授業公開していく。

4 保護者に積極的に働きかけ、学習の生活化を進める

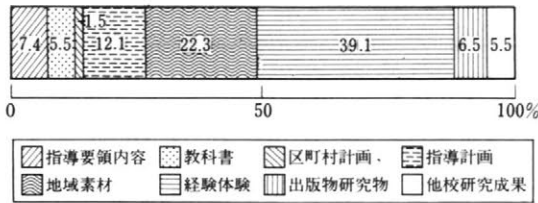
生活科で学んだことを生活に生かしているかについては、教師と保護者とのズレがかなり大きい。生活科で学んだことを生活の中で生かす子どもを育てるためには、家庭の協力なしには不可能である。そのため、保護者会や学校・学級通信や日々の連絡帳、授業参観等を通して、生活科で学んだことや子どもの変容、協力してほしいことを知らせ、子どもが実践する場を意図的に設定していくことが大切である。

学校週五日制は、家庭教育の充実を前提にしており、学校側は積極的に家庭へ働きかけていくことが肝要であろう。

2. 教材に対する考え方

(1) 指導内容選択のよりどころ

見出し	調査結果と分析	考 察																																				
指導内容選択のよりどころ	<p>1 生活科の指導内容を選択するとき、下記のどれに重点をおいてするか。</p> <p>「度合いの順序」</p> <table border="1"><tr><th>項目</th><th>割合</th></tr><tr><td>指導要領内容</td><td>31.5</td></tr><tr><td>教科書</td><td>11.2</td></tr><tr><td>区町村計画</td><td>16.2</td></tr><tr><td>指導計画</td><td>27.3</td></tr><tr><td>地域素材</td><td>15</td></tr><tr><td>経験体験</td><td>8.5</td></tr><tr><td>出版物研究物</td><td>0.2</td></tr><tr><td>他校研究成果</td><td>0.1</td></tr></table> <p>度合いの順序を一番にあげたものをみると、「学習指導要領から」「学校の指導計画から」「地域素材から」と続く。</p> <table border="1"><tr><th>項目</th><th>割合</th></tr><tr><td>指導要領内容</td><td>5</td></tr><tr><td>教科書</td><td>5.8</td></tr><tr><td>区町村計画</td><td>5</td></tr><tr><td>指導計画</td><td>20.4</td></tr><tr><td>地域素材</td><td>48.5</td></tr><tr><td>経験体験</td><td>14.5</td></tr><tr><td>出版物研究物</td><td>0.4</td></tr><tr><td>他校研究成果</td><td>0.4</td></tr></table> <p>度合いの順序の二番にあげたものをみると、「地域素材から」「学校の指導計画から」「子どもの経験や体験をもとに」と続く。</p>	項目	割合	指導要領内容	31.5	教科書	11.2	区町村計画	16.2	指導計画	27.3	地域素材	15	経験体験	8.5	出版物研究物	0.2	他校研究成果	0.1	項目	割合	指導要領内容	5	教科書	5.8	区町村計画	5	指導計画	20.4	地域素材	48.5	経験体験	14.5	出版物研究物	0.4	他校研究成果	0.4	<p>学習指導要領がよりどころの一番にあげられたのは、新設教科生活科ならではと思われる。他教科ならたぶん教科書が一番のよりどころであろう。新設教科だけに内容選択の基本として学習指導要領がよく読まれているのではなかろうか。</p> <p>それと共に、学校の指導計画や地区の指導計画、教科書等もよりどころとなっている。</p> <p>また、「学校や見近な地域素材から」「子どもの経験や体験をもとにしながら」が選択のよりどころの上位に入っていたのは、地域とのかかわりや子どもの経験・体験を重視する生活科にとって好ましい結果と言えよう。</p> <p>指導内容の選択にあたっては、「学習指導要領から」と教師の指導経験に相関がみられた。</p> <p>これは、指導経験が多くなるにつれ、生活科の目標と内容との関連を考える能</p>
項目	割合																																					
指導要領内容	31.5																																					
教科書	11.2																																					
区町村計画	16.2																																					
指導計画	27.3																																					
地域素材	15																																					
経験体験	8.5																																					
出版物研究物	0.2																																					
他校研究成果	0.1																																					
項目	割合																																					
指導要領内容	5																																					
教科書	5.8																																					
区町村計画	5																																					
指導計画	20.4																																					
地域素材	48.5																																					
経験体験	14.5																																					
出版物研究物	0.4																																					
他校研究成果	0.4																																					



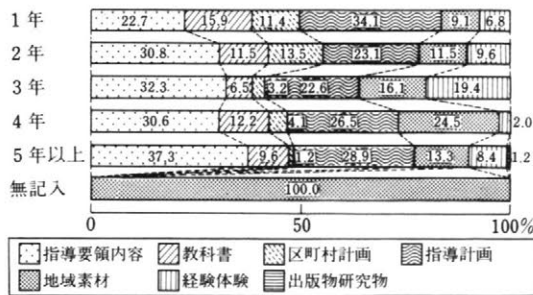
力が高まり、学習指導要領に基づき自分で指導内容を選択するようになるためと解釈できる。

度合いの順序の三番にあげたものをみると、「子どもの経験や体験をもとに」「地域素材から」「学校の指導計画から」と続く。

これらのことから、「学習指導要領」がまず、基本にあり、ついで「地域素材」「学校の指導計画」「子どもの経験や体験」が選択にあたってのよりどころとなっていることがうかがえる。

また、数値としては多くはないが、教科書もよりどころとなっている。

指導内容選択と教師の指導経験年数をクロスさせてみると、
設問1と(4) 生活科の指導内容選択の度合いの順1番と教師の指導経験

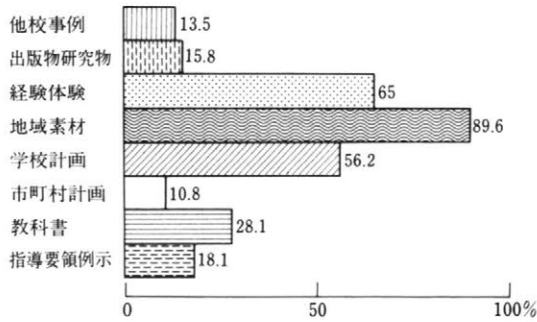


指導経験1年の教師は、学校の指導計画から指導内容を選択することが多く、2年以上になると学習指導要領から選択することが多い。生活科を一年間指導すると、学習指導要領をもとに学校の指導計画、地域教材や子どもの経験・体験から指導内容を選択していることがうかがえる。

学習指導要領から選択するのは、指導経験5年以上が最も多い。指導経験が多くなるにつれ、学習指導要領から選択する傾向がみられる。

(2) 教材選択の視点

教材選択の視点 2 生活科の指導に必要な教材の選択はどのようにするか。(最大3つまで複数回答)



上位に「地域素材から」「子どもの経験や体験から」「学校の指導計画から」があげられている。

特に、「地域素材から」が群を抜いて高い。

「学習指導要領の例示から」は「教科書にあるものから」を下まわっている。学習指導要領より教科書に依存している実態がうかがえる。

調査結果で、「地域素材から」が群を抜いて高かったことは、地域を学習の場とする生活科の目標に沿うものである。また、「子どもの経験や体験」を大事にしている。

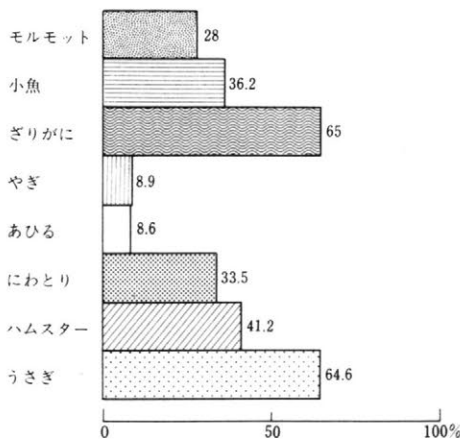
教材選択に際し、学習指導要領より教科書に依存していることは、指導内容選択にあたり「学習指導要領から」が一番だったこと(設問1)と矛盾すると思われる。これは、学習指導要領で指導内容をおさえ、具体的な教材を教科書の例示に求めたと推測される。

全般には、数値をみる限り、好ましい結果がでていと言えよう。

問題は、学校の指導計画に沿って、同じ地域素材を使って指導し、子どもの実態が後になっていないかということである。学習する子どもは、毎年異なる。教材選択にあたっては、子どもの実態を十分ふまえ、適した地域素材を選び、指導後は学校の指導計画を修正し、改善していくことが大切である。

(3) 教材の適否

飼育教材 7 動物の飼育教材として子どもの学習に適する動物は、次のうちどれがよいと思うか。(最大3つまで複数回答)



飼育教材は、「ザリガニ」「ウサギ」が多く、ついで「ハムスター」「小魚」である。「ニワトリ」「モルモット」と続く。

生活科で飼育栽培が取り上げられるのは、子どもが自ら育てることにより動植物の成長を実感したり、生命の大切さに気付いたり、感性を豊かにしたりする等のねらいがある。

飼育教材を選択する際に、教科書で取り上げられていることが影響することは十分考えられる。生活科の教科書に取り上げられているのは、10社中、

・ザリガニ 9社 ・ウサギ 9社
 ・ハムスター 3社 ・ニワトリ 9社
 ・モルモット 3社であり、教科書の影響があるといってもよいと思われる数値である。

最も飼育されていたザリガニは、回答者1名の漁村を除くと、大都市で一番多

飼育教材と地域性をクロスしてみると、
設問7と(1) 飼育教材と地域性

く飼育されている。生育できる場所がないことから、教材として業者から購入し

	無記入	ウサギ	ハムスター	ニワトリ	アヒル	ヤギ	ザリガニ	小魚	モルモット	その他	記入者の数
全体	---	64.6	41.2	33.5	8.6	8.9	65.0	36.2	28.0	0.0	100.0
〔勤務地域別〕											
大都市	---	47.8	56.5	19.6	9.8	5.4	77.2	20.7	48.9	0.0	100.0
中都市	---	68.8	31.2	35.4	8.3	8.3	60.4	43.8	27.1	0.0	100.0
小都市	---	73.2	32.9	46.3	9.8	14.6	61.0	40.2	13.4	0.0	100.0
農村	---	76.2	23.8	38.1	4.8	4.8	57.1	57.1	4.8	0.0	100.0
山村	---	100.0	44.4	33.3	0.0	11.1	22.2	66.7	11.1	0.0	100.0
漁村	---	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	100.0
無記入	---	100.0	50.0	50.0	0.0	0.0	50.0	25.0	25.0	0.0	100.0

ザリガニは「漁村」の100%をはじめ、「大都市」「中都市」「農村」では6割以上もしくは6割近く飼育している。

ウサギは「山村」「農村」「小都市」に多い。回答者1名の漁村を別にすると、次に低い数値の「大都市」でも5割近い。飼育教材によく取り上げられていることが伺える。

ハムスターは「漁村」「大都市」「山村」が多いが「漁村」の回答者は1名なので、それを別にすると、目立った地域差はなくなる。

小魚は「漁村」「山村」「農村」が多い。「中都市」「小都市」と続き、「大都市」は最も少ない。

ニワトリは「小都市」「農村」「中都市」が多く「大都市」は最も少ない。

モルモットは「大都市」が群を抜いて多く、「中都市」が続く。「農村」は5%にも満たない。

- このことを、地域性から整理すると、
- ・大都市では、「ザリガニ」「ハムスター」「モルモット」が多く、「ザリガニ」「ウサギ」「小魚」が多い他地域と異なっている。
 - ・モルモットの飼育は大都市の特徴となっている。
 - ・どの地域でも比較的飼育されているのは、ザリガニやウサギ、小魚である。
 - ・アヒルやヤギは、あまり選ばれていない。

たり、教師自ら近郊で入手したりしているのだろう。

ウサギは、キャラクターにもなっており、今まで学校で飼われていたことが多く、子どもにとって身近に感じられるからであろう。

モルモットはおとなしく、かわいらしいことが都市で世話をするのに適切と思われるためだろうか。

飼育教材の選択では、大都市は他地域と極めて異なる様相を示している。ザリガニやハムスター、モルモットといったおとなしく、広い場所を必要としないものを選んでいいる。ウサギのように、土を必要とし、子どもをたくさん生む、エサが大量に必要である、臭いといったものを避けがちであったが、生活科でその様相が変わってきている。

飼育教材の選択には、入手方法や飼育条件等が考慮されるから飼育教材と地域性に相関がでることは、当然と言えよう。

生活科のねらいに照らし、飼育活動を適切ととらえている教師は非常に多い。

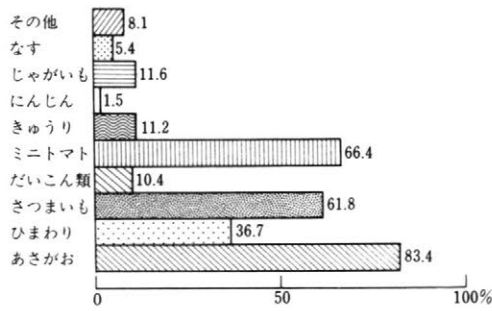
(設問10-④)

飼育教材の選択には苦勞しつつ、大事な活動だからと自らを納得させて指導している教師の実状が想像できる。

栽培教材

8 植物の栽培教材として子どもの学習に適する植物は、次のうちどれがよいと思うか。(最大3つまで複数回答)

栽培植物が全国一律であることは、地域の実態に応じた指導を推進する生活科にあって好ましいこととは言えない。



栽培教材をみると、「アサガオ」「ミニトマト」「サツマイモ」が、次の「ヒマワリ」を大きく引き離している。

栽培教材と地域性をクロスしてみると、設問7と(1) 栽培教材と地域性

	無記入	アサガオ	ヒマワリ	サツマイモ	ダイコン類	ミニトマト	キュウリ	ニンジン	ジャガイモ	ナス	その他	記入者の数
全体	...	83.4	36.7	61.8	10.4	66.4	11.2	1.5	11.6	5.4	8.1	100.0
(勤務地域別)												
大都市	...	89.1	39.1	57.6	20.7	59.8	9.8	1.1	10.9	3.3	8.7	100.0
中都市	...	81.6	30.6	61.2	4.1	69.4	10.2	0.0	6.1	6.1	14.3	100.0
小都市	...	82.9	35.4	63.4	3.7	74.4	8.5	3.7	12.2	8.5	6.1	100.0
農村	...	71.4	42.9	81.0	0.0	61.9	33.3	0.0	9.5	0.0	0.0	100.0
山村	...	70.0	40.0	70.0	30.0	50.0	10.0	0.0	20.0	0.0	10.0	100.0
漁村	...	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
無記入	...	75.0	25.0	25.0	0.0	100.0	0.0	0.0	50.0	25.0	0.0	100.0

地域にかかわらず、アサガオ、ミニトマト、サツマイモで占められている。栽培教材が全国一律になっていることが裏付けられる。

教科書の栽培事例をみると、10社中
 ・アサガオ 全社 ・サツマイモ 9社
 ・ミニトマト 8社

選択にあたっては、教科書教材を取り上げていると言えよう。

しかし、教科書には他にもいろいろな野菜が取り上げられている。むしろ、教師が同じようなものを選択した結果と考えられる。育て方が楽で、丈夫なものを選んだ結果ではないだろうか。かつて理科で育てさせたという教師の経験が選択の基準になっているとも考えられる。

調査結果をみると、その他の欄には、7.9%あがっており、種類も豊富であっ

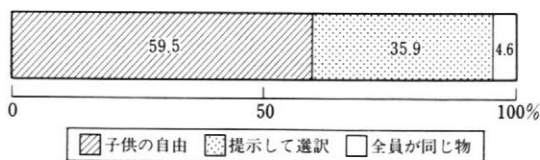
(%)

た。こうした栽培事例を広げていくことが大切である。

(4) 子どもの教材選択

子どもの教材選択の程度

6「作って遊ぶ」の単元を展開するとき、どんなものを作るかは、どのようにしているか。



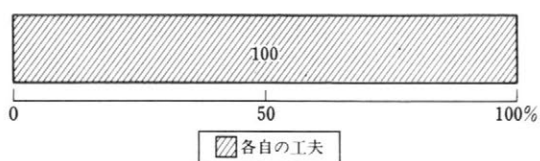
「子どもの自由」と「提示して選択」を合わせて95.4%が子どもの自由選択を行っている。

子どもに教材を選択させることは、自分の課題をもって意欲的に学ぶ態度を育成する上で大切なことである。

調査結果をみると、教材選択には子どもの意志がかなり反映されていると言えよう。しかし、「子どもに選択力や集中力、持続力が育っていない」（設問13）を合わせ考えると、教師の指導が優先しがちなのだろうか、本当の意味で選択力が育っていないとも解釈できる。

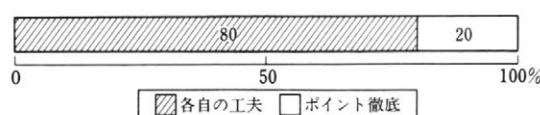
「子どもの自由にする理由」の結果をみると、子どもの学ぶ意欲を認め、やりたいことをやらせるといふ「子どもありき」の教師の姿勢がみえる。

6-① 子どもの自由にする理由



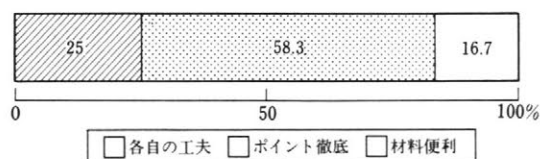
子どもの好きなものを自由に選択させる理由をみると、全員が「子どもの工夫が分かる」をあげ、「子どもたちが考えようとしなから」をあげたのは全くいない。

6-② 提示して選択させる理由



「子どもの工夫が分かる」が「指導のポイントが徹底できる」を大きく離している。

6-③ 同じものを作らせる理由



「指導のポイントが徹底できる」が一番多い。「子どもの工夫が分かる」をあげたのは、同一のものの方が優劣がつけやすいという教師の都合が前面にでたものととらえられる。

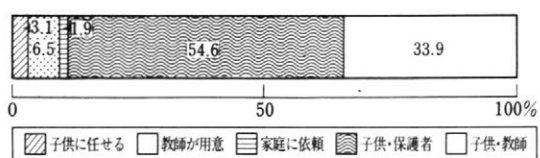
逆に、「全員同じものを作らせる理由」に「指導のポイントが徹底できる」があがっていることに、教えるという姿勢が垣間みえる。

生活科指導を通して、子どもの側に立つ指導観をもつようになった教師がいる一方で、従前の教師主導の指導観から抜けきらない教師がいることがうかがえる。

(5) 教材の準備

教材の準備

3 学習に必要な材料は、主にどのようにしてそろえているか。



材料の準備は、「教師も用意するが、子どもと保護者に任せることが多い」が最も多く、「子どもも用意するが、教師が用意することが多い」が続く。

材料を、子ども・保護者・教師が単独でそろえるというのは、合わせても10%強である。

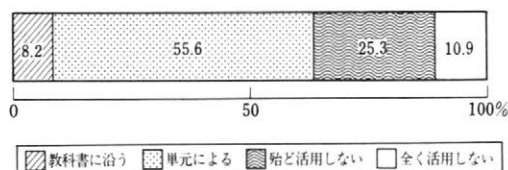
子どもが自分で学習の準備することは学習の自立にとって大事なことである。学習は材料をそろえることから始まっている。

「教師も用意するが、子どもや保護者に任せる」が、材料のそろえ方としては最も好ましいと考えられる。それは、子どもの主体性を促しつつ、子どもの発想を広げるために教師も用意することが必要だからである。しかし、この回答は、5割強で多いとはいえない。また、教師主導型といえる「教師が用意する」も見逃せない数値となっている。

(6) 教科書の活用状況

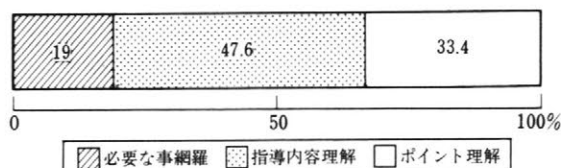
教科書の活用状況

4 生活科の教科書の活用状況は、次のどれに当たるか。



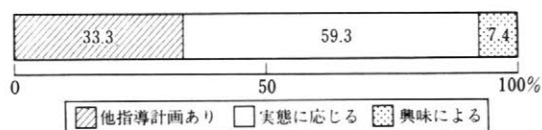
教科書の活用状況は、「単元によって利用する」「ほとんど活用していない」「全く活用していない」と続き、「教科書に沿って指導」は最も少ない。「ほとんど活用していない」「全く活用していない」を合わせると、教科書をあまり活用しない教師は36.2%いる。

4-1 教科書にそって指導している理由



理由の一番に「生活科の指導内容がよく分かる」をあげている。

4-2 全く活用しない理由

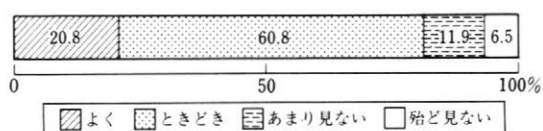


活用しない理由は、「子どもや地域の実態に応じた指導が大切だから」が多い。

(7) 子どもの教科書への関心

子どもの教科書への関心

5 生活科の教科書を子どもたちは見ているか。



教科書を「ほとんど」「全く」活用しない教師は36.2%いる(設問4)。それに対

調査結果からは、単元によって活用していることが一番多かった。しかし、教科書に沿って指導しているのも8%強で見逃せない数値である。子どもの興味・関心に応じて活動を構成していくべきところであるが、教科書の活動例をなぞっている実態もあることがうかがえる。

教室生活科への危惧が感じられる。

一方、教科書を全く使用しないというのも10%強いる。それには、指導計画立案能力が欠かせないが、「自分の計画をもつ0%」という回答は気になる。実際の指導にあたっては、学校や地区の指導計画に沿っているということであろう。目の前の子どもの実態に応じて自分で指導計画を立案していくことが望まれる。

生活科の教科書は従来の教科書のイメージを変えたといわれる。イラストやキャラクターが豊富であり、吹きだしで語る、書き込みができる、詩や物語で展開する等、子どもに分かりやすいように、子どもが親しめるようにと各社が工夫している。子どもの立場に立って編集しようという意図からであろう。

調査結果から、教師は子どもに「使う

して、子どもは「ときどき見ている」「よく見ている」を合わせて81.6%いる。多くの子どもたちは教科書を見ている。

かもしれないので教科書も持ってくるように」と言っている、もしくは子どもが自主的に持ってきているという状況が想定できる。生活科の時間にあまり開くことはないが、時間割をそろえる時、授業が始まる前、何か教科書にヒントがないかと探す時等に、子どもたちは教科書を広げているのではないか。

多くの子どもたちが教科書を見ている状況をふまえ、かつ教科書は使用義務があることを考慮すると、教科書は生活科の学習への意欲づけに活用するのが望ましいと言えよう。

(8) まとめ

1 学習指導要領を指導内容の選択のよりどころにして、指導計画立案能力を高めていく

調査結果より、指導内容の選択にあたって、学習指導要領が一番のよりどころとなっていた。

最も望ましいことは、学習指導要領に基づき、子どもの実態に応じて地域素材を活用した指導計画を立案し、子どもの願いをもとに弾力的に指導していくことである。

生活科指導を通して、教師が指導計画立案能力を高めていくことが望まれる。

2 地域素材や子どもの経験・体験をもとに教材を選択し、学校の指導計画を修正していく

教材選択に際して、「地域素材から」が群を抜いて高く、「子どもの経験や体験から」「学校の指導計画から」が続いた。今後は、さらに、子どもや地域の実態をふまえ、学校の指導計画をその都度、修正していくことが重要である。

3 飼育栽培教材の選択にあたっては、地域性を生かし、子どもが無理なく育てられるものを選択する。

飼育教材の選択にあたっては、地域性との相関が見られた。栽培教材は、全国一律の傾向であった。学校という環境上の制約や学校の置かれている条件から、選択には苦慮していることがうかがえた。

選択にあたって、次のような観点も考慮したい。

◆飼育教材の選択の観点

- ・子どもが抱いたり、触ったりでき、生きていることが実感できる
- ・その時期だけかかわるのではなく、長くかかわることができる
- ・表情がある
- ・子どもの手に負えるもので、子どもが主になって飼育できる

◆栽培教材の選択の観点

- ・成長の過程をよく見取ることができる
- ・世話を欠かさず、命あることを実感できる
- ・幼稚園等での栽培経験が生かせる
- ・ニンジン、ジャガイモ等、掘ってみなければ分からないようなものではなく、花のように育てる励みがある

4 子どもに教材を選択させ、子どもの側に立つ指導を進めていく

調査結果より、教材選択には子どもの意志がかなり反映されていた。子どもの側に立つ教師がいる

一方で、従前の教師主導の指導観から抜けきらない状況にあることもうかがえた。こうした状況に対し、教師の指導観を変えることになお一層の努力が必要である。

そのためには、学校全体で学年協力教授やTTといった指導体制を取り入れ、他の教師と指導法の検討をせざるをえない状況を設定することも効果的であろう。

5 学習に必要な材料は子ども自身にそろえさせる。

材料を「教師が用意する」という実態も見られた。「学習に必要な材料を子ども自身がそろえることが学習の自立である」ことを、十分自覚していることが大切である。

6 教科書は、生活科の学習の意欲づけに活用する。

教科書をあまり活用しない教師が3割強いる一方で、多くの子どもたちは教科書を見ている実態がある。生活科の教科書は子どもの立場にたって編集しようと工夫されており、子どもの一人学びにとっても有効と思われる。教科書は、生活科の学習への意欲づけに活用していきたい。

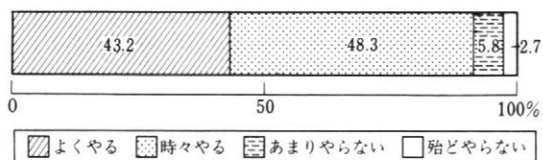
3. 生活科の活動や体験に対する意識

(1) 活動や体験の程度

見出し	調査結果と分析	考察
活動や体験の程度	<p>9 生活科の学習で次のような活動や体験はどの程度やっているか。</p> <p>9-① 地域の人とのかかわりを深める活動</p> <p>一番多い「ときどきやる」で52%強で、次は、「よくやる」と「ほとんどやらない」が同ポイントである。「ときどきやられる活動」というところか。</p> <p>人とのかかわりを重視している生活科にあってはもっと高い数値を期待したい。</p> <p>9-② 地域の店や公共施設を訪ねる活動</p> <p>「ときどきやる」が最も多く、「よくやる」「ほとんどやらない」と続く。地域を学</p>	<p>「地域の人とのかかわりを深める活動」は、活動の頻度としては、多い部類ではない。その背景としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師自身が地域の人とかかわり、話を聞いたり、依頼したりすることを煩雑に思っている。 ・地域の人材リストのようなものが未整備で、適切な人材を活用できない。 ・地域の人というのを店や農家の人等、限定的にとらえ、指導内容を十分理解していない。 <p>等が推測される。</p> <p>「地域の店や公共施設を訪ねる活動」と「まちの中を探検する活動」は「比較的やられている活動」である。</p> <p>地域を学習の場とするという生活科の趣旨は理解されており、子どもの探検したいという願いが強いことが選択の基準となっていると思われる。</p> <p>反面、教師の意識に</p>

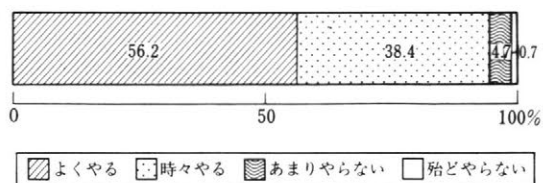
習の場とする生活科で、地域の店や公共施設をあまり訪れていないということは、どこを学習の場としているのだろうか。教師の指導上の問題が見え隠れする。

9-③ まちの中を探検する活動



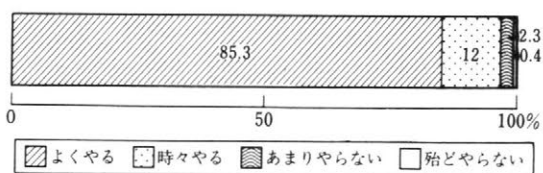
「ときどきやる」に次いで、「よくやる」が続く。合わせて90%をこえており、「比較的やられている活動」といってもよいだろう。

9-④ 地域の公園や野原で遊ぶ活動



「よくやる」が一番多く、「ときどきやる」を大きく引き離している。合わせて95%弱であることから、「よくやられている活動」と言えよう。

9-⑤ 自分たちが主になって動植物を育てる活動



「よくやる」が圧倒的に多い。「あまりやらない」「ほとんどやらない」を合わせても2%強である。ほとんどの学校で行われている活動と言えよう。

- ・実施にあたっては、事前の安全点検や店、公共施設等への協力の依頼が煩わしい。
 - ・子どもだけでグループ行動させることに不安がある。
 - ・地域に探検したくなるような店や公共施設がない。
- 等々、選択することを規制しているのではなかろうか。

「地域の公園や野原で遊ぶ活動」や「自分たちが主になって動植物を育てる活動」は、よくやられていた。

共通する背景として次の点があげられる。

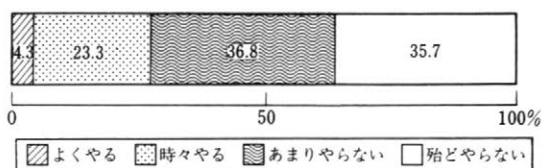
- ・生来、子どもたちが好む活動である。
- ・一人一人の子どもの対象へのかかわり方がよくみえる。
- ・活動場所が安全である。公園は行政によって整備され、トイレ・水飲み場等の施設もある。

「一人一人の子どものかかわり方がみえる」「子どもが好む」といった子どもの側に立って活動を選択していることは大変好ましいことである。

しかし、気になる点もある。学習対象が「動植物」「もの」「遊具や虫」というように、人以外である。もっとも、活動を通して、友だちとのかかわりは当然なされていようが、第一の学習対象ではない。

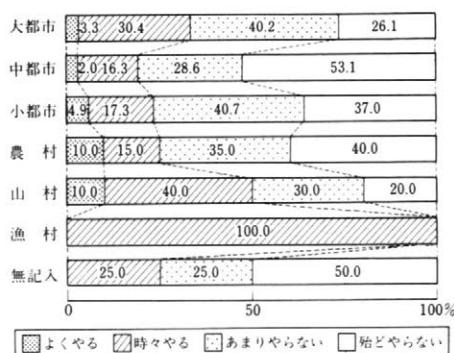
ものをいわぬ、交渉しないで済むといった対象を選んでいるとは思いたくないのだが。

9-⑥ 地域の行事等に参加する活動



「あまりやらない」に僅差で「ほとんどやらない」が続く。合わせて73%強である。この数値から、「あまりやられていない活動」と言える。

これは、地域性によるものかクロスしてみると、設問9-⑥と(1)「地域の行事に参加する活動」と地域性

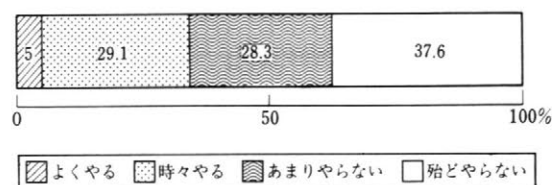


「よくやる」が多いのは「農村」「山村」である。

「ときどきやる」が多いのは、「漁村」「山村」である。

「農山漁村」の方が「大中小都市」より、地域行事に参加する活動を行っている。

9-⑦ 幼稚園や保育園等とのかかわる活動



「ほとんどやらない」が一番多く、「ときどきやる」が「あまりやらない」と僅差で続く。

「ほとんどやらない」「あまりやらない」合わせて66%弱と高い数値である。あまりや

「地域の行事に参加する活動」は、なぜ、あまりやられていないのだろうか。地域性とクロスすると、「大中小都市」より、「農山漁村」の方が地域の行事に参加していた。これは、農山漁村の運動会に見られるように地域が学校行事に参加することがよく行われているので、学校も地域行事に自然に参加しやすい状況にあるのではないだろうか。

一方、小学校保護者への調査結果と比較すると、子どもは地域行事に「よく参加している36.0%」「大体参加 50.8%」と出ている。つまり、保護者はよく参加させているが、教師は参加させていない。しかし「地域の公園や野原で遊ぶ活動」はよくやっている。このことから、次のような状況が推測できる。

一つには、教師は地域を学習の舞台にすることに煩雑さを感じている。

もう一つには、教師自身が連絡・連携等で地域の人とのかかわることを避けている。

このことは、「地域の人とのかかわりを深める活動」が「ときどきやられている活動」程度だったことと符号する。

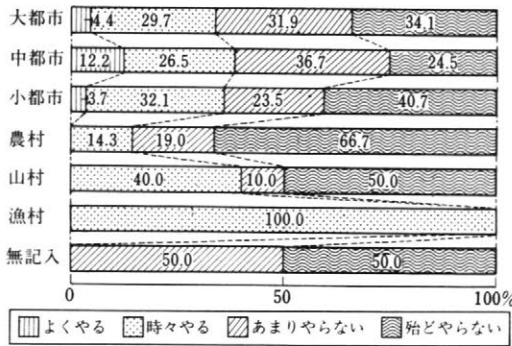
設問20からも幼稚園との連携があまり行われていないことが明らかになっている。その要因についても、既に述べたが、互いの忙しさ、目標を照らし合わせることの煩雑さ、互いの教育課程に踏みこまないという遠慮、連携する意義を認めない等が推測できる。

また、これは地域性が関係しているものか、「幼稚園や保育園等とのかかわる活動」とクロスした結果、相関がでなかった。つまり、地域性とはかかわりなく、全国的な傾向であると言えよう。

られていない活動の部類に入るのではないか。

これも、地域性によるものかクロスしてみると、

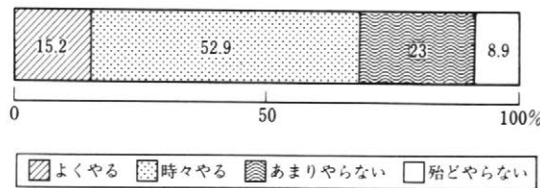
設問9-⑦と(1)「幼稚園や保育園とかかわる活動」と地域性



幼稚園や保育園とかかわる活動は、「よくやる」をみると中都市が最も多いが、「ときどきやる」をみると「漁村」が100%で、「山村」「小都市」と続く。

「幼稚園や保育園とかかわる活動」と地域性の相関はないといってもよいと思われる。

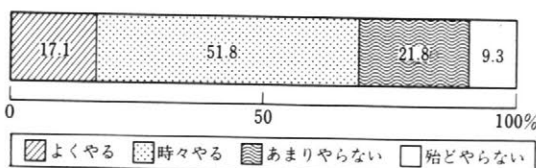
9-⑧ 自分たちより年上の人とかかわる活動



「ときどきやる」が半数を占め、「あまりやらない」「よくやる」と続く。

「ときどきやられている活動」というところか。

9-⑨ 乗り物を利用する活動



「ときどきやる」が半数を占め、「あまりやらない」「よくやる」と続く。

「自分たちより年上の人たちとかかわる活動」が「ときどきやられている活動」程度である背景としては、

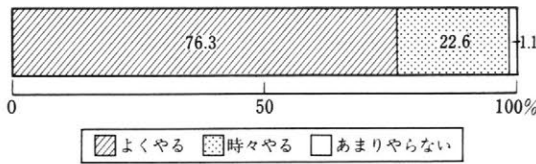
- ・生活科の学習が2年生までということ、1・2年生の交流はあっても、3年以上との交流が少なくなっている。
- ・教師が、生活科の学習は3年以上の教科内容と合致しないと考え、交流の意義を認めない。
- ・生活科の趣旨が全校の教師に理解されておらず、かかわる時間設定が難しい。等の背景が想定される。

「乗り物を利用する活動」については

- ・適切な目的地が見つからない。
 - ・適切な交通機関がない。
 - ・目的地までの安全確保が難しい。
- ということが教師から指摘されている。しかし、教師自身が子どもたちだけで乗り物に乗って目的地へ行くことに不安をもちたり、駅の人との交渉を厭い消極的

⑧と同じような数値で、これも、「ときどきやられている活動」と言えよう。

9-⑩ いろいろなものを製作する活動



「よくやる」が「ときどきやる」を大きく引き離している。「あまりやらない」「ほとんどやらない」を合わせても1%強である。「よくやられている活動」と言える。

9-⑪ 手紙を書いたり、電話を使ったりする活動



「ときどきやる」が半数で、「よくやる」と「あまりやらない」が僅差で続く。

⑧⑨と同じような数値である。「ときどきやられている活動」というところか。

になったりしていることも見逃せない。

この活動は、一人一人の子どもの対象へのかかわりがよく見え、その子らしさも表れるので、その子に応じた支援もできる。

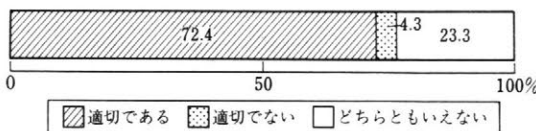
こうした活動を選択していることは好ましい。

- この活動が選択される背景としては、
- かつて社会科で「郵便局の人の仕事」として指導した経験がある。
 - 年賀状の時期に合わせて指導しやすい。
 - 郵便を学校内に配達することにより、全校児童とかかわりをもたせることができる。
 - 電話は子どもの生活の中でよく利用されている。
- 等が推測できる。

(2) 活動や体験の適否

活動や体験の適否 10 文部省の出版物で取り上げられている次のような活動を、どのように考えるか。

10-① 自分の家での仕事を増やす活動

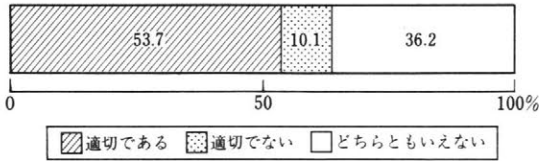


「適切である」が、次の「どちらともいえない」を大きく引き離している。

「適切と考えられている活動」と言えよう。

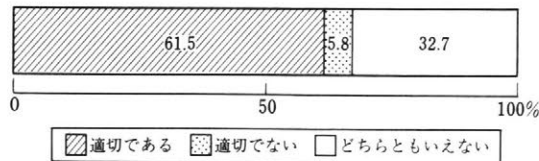
「自分の家での仕事を増やす活動」が適切と考えられていることは、自立の基礎を養う上で好ましいことと言えよう。

10-② 乗り物に乗って〇〇に行く活動



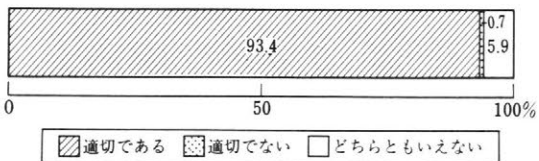
「適切である」が半数を占めたものの、「どちらともいえない」がつきに多い。「かろうじて適切と考えられている活動」と言えようか。

10-③ 近所の店で買い物をする活動



「適切である」が「どちらともいえない」の倍となっている。「比較的適切と考えられている活動」と言えよう。

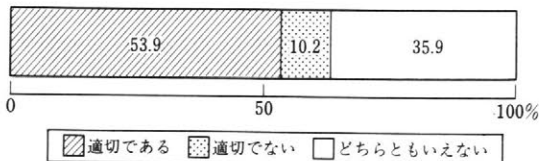
10-④ 動植物を育てる活動



「適切である」が圧倒的に多く、「適切でない」は1%にも満たない。

「適切と考えられている活動」と言える。

10-⑤ 「〇〇祭り」をする活動



「適切である」が半数を占めているが、「どちらともいえない」も多い。「適切でない」という数値も無視できない。

②と同様で「かろうじて適切と考えられている活動」である。

一人で乗り物に乗ることができるということは、自立した子どもである。そう理解はしても、安全確保の面で不安があったり、地域によっては適切な目的地がなかったりして、教師にとっては負担が感じられるのではないか。こうしたことが適否の判断の分かれることになっているのではなかろうか。

幼児の頃から、保護者はおつかいを経験させている。生活科では、もう一段階上の、必要なものを自分で選んで買い物をすることを求め、適切な活動と判断したのではなかろうか。

保護者に次の活動が生活科の学習に必要なかを問うた結果、「植物の栽培」「小動物の飼育」については、ほとんどの保護者が必要と考えている。

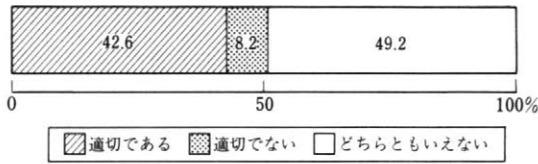
教師も保護者も適切と考えている「動植物を育てる活動」は、生命の尊さや豊かな感性、自立心を育むことのできる活動である。

「『〇〇祭り』をする活動」が適切でないと判断された理由は、

- ・地域に適切な祭りが無い。
- ・祭りの時期が適切でない。

といった祭りの時期・内容だけでなく、宗教的なものを避けたいという心理があるのではなかろうか。また、地域との連携が面倒ということも考えられる。

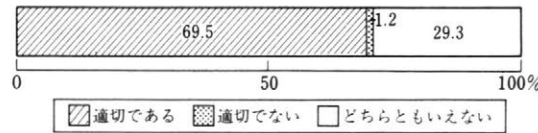
10-⑥ 料理を作る活動



「どちらともいえない」が多く、小差で「適切である」が続く。

「どちらともいえない活動」というところか。

10-⑦ 健康・安全に関する活動



「適切である」が70%弱で、「どちらともいえない」を大きく引き離している。

「比較的適切と考えられている活動」と言えよう。

「料理を作る活動」は、教師も保護者も必要と考えていない。

その理由として、火や包丁を使って子どもがけがをしたらという不安が先立つのではないか。不適切の判断基準に「安全」があることが想定される。料理自体本来、家庭の範疇であって学校がやるまでもない、高学年での家庭科でやればよいと考えている教師もいる。5年の家庭科の学習内容より高度なサツマイモ料理をしていることに疑問をもつ教師もおり、そうしたことが「料理を作る活動」の否定的な考えにつながっているのではなかろうか。

心身共に健やかな子どもの育成は、教師も保護者も願うところである。こうした願望が、「健康・安全に関する活動」の適否の判断に影響を与えているのではなかろうか。

(3) まとめ

1 活動を工夫し、地域で人とかかわる活動を総合的に進めていく

よくやられている活動は、動植物を育てたり、ものを製作したり、公園や野原で遊んだりする活動である。これらは、生来、子どもが好み、教師にとっては一人一人の対象へのかかわり方がよくみえる活動であり、子どもの側に立つ活動を行っている。

しかし、あまりやられていない「幼稚園や保育園とかかわる活動」「地域の行事に参加する活動」をみると、人とのかかわりを要する活動が行われていないと言える。教師自身が地域の人との連携を避けているのではないかと危惧すら生じる。

そのため、生活科の活動を工夫する必要がある。例えば、「遊ぶ」「作る」「育てる」「探す」活動を地域で総合的にやっていくようにするなどが考えられる。

具体的には、次のような活動をあげることができる。

- ・公民館で年寄りと一緒に作る。
- ・町会のちらしを子どもに配らせて町探検をする。
- ・自分たちの町で自慢できる人を探す。
- ・祭りの手順をひと月にわたって追っていく。

生活科は知恵を育てる教科である。知恵は人とふれあうことで育つ。地域を巻き込んだ学習を展開

し、人とかかわらざるを得ない活動にしていく必要がある。

こうした活動事例を文部省指導資料等でも積極的に取り上げていくことも効果があろう。

2 活動上の問題点を収集し、生活科の活動内容の改善を図ることに生かす

教師が適切と考えている活動は、動植物を育てる、自分の家での仕事を増やす活動であった。どちらともいえないと考えている活動は、料理を作る活動であった。乗り物に乗る、祭りをする活動を否定的にとらえている教師の数も見逃せない。「安全」が教師の活動選択の判断基準の一つになっている。

生活科の活動選択にあたっては、危険をおかしてまでやることはないが、危険だからといって子どもを遠ざけては子ども自身が自己保全できなくなる。

子ども一人一人の発達段階を十分ふまえつつ、十分な配慮のもとで子どもに包丁をもちせたり、ガスに点火させたりすることはあっている。要は、自分たちが栽培し収穫したものを、みんなで味わうことがねらいである。

また、活動選択の観点として、学習経験を子どもが生活の中で生かすことができるということが大事である。料理の活動でも、子どもが家庭で生活科で学んだことを生かしていくことを重視すべきである。

データや実践から得られた活動上の問題点を収集していくことが、次期学習指導要領改訂の貴重な資料となり、生活科における活動内容の改善につながってこよう。

4. 家庭の協力と生活科の啓発

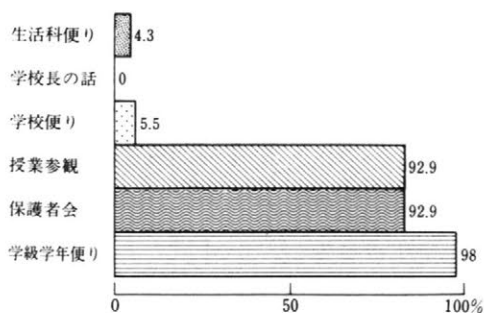
(1) 家庭への協力の内容

見出し	調査結果と分析	考察																
家庭への協力の内容	<p>16 生活科の学習を展開する上で、どんなことで家庭の協力を求めているか。 (最大3つまで複数回答)</p> <table border="1"> <caption>調査結果と分析の棒グラフ</caption> <thead> <tr> <th>協力の内容</th> <th>割合 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>材料準備</td> <td>27.2</td> </tr> <tr> <td>校外学習安全</td> <td>10.3</td> </tr> <tr> <td>学習状況参観</td> <td>6.6</td> </tr> <tr> <td>学習の生活科</td> <td>24.1</td> </tr> <tr> <td>学習内容を聞く</td> <td>4.9</td> </tr> <tr> <td>体験機会</td> <td>26.3</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>0.5</td> </tr> </tbody> </table> <p>家庭への協力は、「材料をそろえる」が1位で、「体験の機会を増やす」「学習の生活化」と続いている。 下位は、「学習内容を聞く」「学習状況の参観」である。</p>	協力の内容	割合 (%)	材料準備	27.2	校外学習安全	10.3	学習状況参観	6.6	学習の生活科	24.1	学習内容を聞く	4.9	体験機会	26.3	その他	0.5	<p>家庭への協力の内容をみると「材料の準備」といった教師の都合が前面に出ていることが気にかかる。「体験を増やす・学んだことの定着を図る」といった生活科の根幹にかかわる内容を依頼していることは、注目すべきことである。</p> <p>一方、「学習状況の参観」が低かったが、保護者にとって生活科は習ったこともなく、初めての教科である。生活科がどのような学習か分からない状況では、どのような協力をどこまでやるのか判断しようがない。</p> <p>家庭との連携をめざした教科であるだけに、授業参観等で保護者に、生活科の学習内容や目標を理解してもらう努力をしていくことが重要である。</p>
協力の内容	割合 (%)																	
材料準備	27.2																	
校外学習安全	10.3																	
学習状況参観	6.6																	
学習の生活科	24.1																	
学習内容を聞く	4.9																	
体験機会	26.3																	
その他	0.5																	

(2) 生活科の啓発

生活科の啓発の方法 18 保護者に対して新しい教科である生活科の啓発をどのようにしているか。

(最大3つまで複数回答)



啓発の方法は、「学級学年だより」「保護者会、授業参観」が非常に高い。しかし、これらの方法はいずれも学級・学年段階のものである。

これに対して、「学校長の話」「学校だより」という学校段階での啓発は低い。

家庭への啓発が学校段階でなされていない背景として考えられることは、

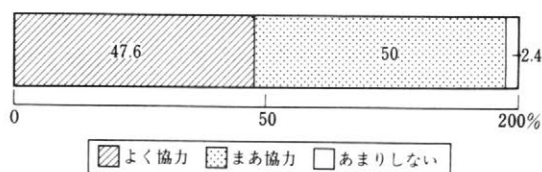
- ・回答者が教師であるため、自分が行っていることを回答した。
 - ・管理職自身、生活科は新設から6年を経たので、保護者に理解されたととらえている。
 - ・他の教師も含め、生活科は教科として定着したので、他教科と同様に扱い、特に、取り立てることはしない。
- 等が推測される。

設問16で、授業参観は低い数値だった。これは、教師は授業参観を「協力」とはとらえず、「啓発」ととらえているせいだろうか。

さらに、教師は授業参観で啓発していると回答しているが、保護者の調査結果では、保護者の多くは生活科の授業を見たことがないと回答している。この理由は、本回答者は生活科指導経験が豊かな教師が多く、過去の経験から保護者が変わっていることを念頭においていないのではなかろうか。

(3) 家庭の協力の程度

家庭の協力の程度 17 生活科の学習に対する家庭の協力はどの程度だと感じているか。



家庭は、「よく協力してくれる」「まあ協力してくれる」を合わせると、97.6%が協力していると、とらえられている。

生活科の学習に対して、家庭はよく協力しているといってもよいと思われる。しかし、本回答者は生活科の指導に深くかかわってきた教師が多いので、連携がポイントと考え、積極的に進めていることも十分想定できる。

(4) まとめ

1 家庭とパートナーシップをもち、連携を図っていく

生活科は家庭との連携に積極的な対応をするために新設されたが、そのためには、家庭に対して生活科の趣旨や目標を理解してもらうことが不可欠である。

生活科にあっては、学校は家庭を「啓発する」というより、「パートナーシップをもつ」存在としてとらえたい。

その一つとして、こういう教科であるということを理解してもらうことである。

二つ目として、これからの学力観、「知恵を獲得すること」、「生きる力」の育成等と生活科を学校としてどうかかわらせていくか明確に示していくことである。

そのため、第一段階として「学年学級だより」では、生活科で家庭に協力を求める際、ねらいを書いたり、学習したことを家庭でどう生かしてほしいか、アフターケアも視野に入れて依頼したりする等の工夫を図ることが大切である。「授業参観」においては、保護者向けの学習指導案を用意したり、生活科のねらいが保護者によく分かるように指導内容を工夫したりすることも大切である。

第二段階としては、校長自ら学校だよりや全校保護者会等において、これからの人間にとっての必要な資質や生活科とこれからの学力観を語り、学校としての具体的な取り組みを示していくことが望まれる。

2 自立の基礎を養う観点から、家庭に協力を求めていく

生活科の学習で家庭はよく協力してくれるととらえている教師が多い。協力を求めるにあたっては、材料をそろえるだけでなく、体験を増やしたり、学習の生活化を図るといった自立の基礎を養う観点に立つことが大切である。そのためには、家庭でどのようにすることが、自立した子どもに近づくか具体的に示し、学校・家庭が共通の目標をもって取り組んでいくことが望まれる。

5. 自由記述の内容とその考察

教師の自由記述の内容から、生活科学習の現状や問題点、さらには、今後の生活科のあり方について以下のようにまとめた。

見出し	記述内容と分析	考察
生活科の学習の現状	<ul style="list-style-type: none">・地域にあった年間計画を作ってはいるが、先生が変わることで活動がつながったとしてもその精神がつながらず、生活科の大切な部分が抜けてしまうことがある。・パターン化、マンネリ化が見られる。・生活科が、学校教育の教科としての存在価値があるか疑問である。・生活科に対しての教師間の共通理解不足がある。・生活科をしていても、社会・理科に偏ってしまう。・指導者によりばらつきがある。・生活科を指導するようになって、低学年教育全体を見直すようになった。・低学年にとって、体験を中心として、驚きや喜びを味わうことは大切である。	今回の学習指導要領が実施され、すでに6年が経過している。記述にあるように、生活科に対する見方や生活科学習の展開には、今だ大きなばらつきが見られる。したがって、生活科の趣旨についての徹底はまだ十分とは言えないことが分かる。教師自身の研修の充実が必要なことはもちろんであるが、地域や家庭にも、生活科の趣旨を周知し、生涯学習へとつながる学習と生活能力の修得の徹底を図らなければならない。

	<ul style="list-style-type: none"> ・自信が付き、工夫し、友達に認めてもらう場があることは、自己表現の基礎につながる。 ・生活科の趣旨・原点に立ち戻ることが大切ではないか。 ・管理職がもっと生活科のことを理解して欲しい。 	
地域の学習環境	<ul style="list-style-type: none"> ・小川や水田などあるが、瓶のかけらや消毒薬が落ちていて、利用できない。 ・安全の確保が難しい。 ・体験を充実するには、地域・家庭の協力が大切である。 ・実際の体験が大切と思うので、とにかくやってみようと努力している。 	<p>子どもたちを取り巻く社会・自然環境は問題が多い。その中で、何とかしたいとの教師の意気込みが読みとれる。地域や家庭、学校が連携し、生活科学習により有効な環境作りに向けて新たな計画を立てていくことが必要である。</p> <p>環境作りに向けて、まず第一に配慮しなければならないことは、子どもたちが社会や自然とかかわる中で安全に活動できるということである。その上で、子どもたちの主体的な活動を促し、その質を高めていくことができるような環境作りを求めていくことが大切である。</p>
カリキュラムの作成	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の特色を生かして、年間指導計画を作成している。 ・児童の実態や環境の変化に応じて、毎年年間計画の見直しをしている。 ・常に、地域を考慮して年間計画を立てている。 	<p>生活科の学習は、それぞれの学校の特色を生かしたものであることが大切である。また、学習内容に合わせて、校内外の環境の整備にも心掛ける必要がある。さらに、児童の実態に応じて、柔軟に対応できるようにしていくことも肝要である。</p> <p>生活科の指導では、学校や家庭、地域、そして何よりも児童の実態に応じ、柔軟に指導計画を対応させ、実施していくことができるような教師の資質を磨く必要がある。</p>
家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭でのしつけが不十分で、啓発が必要。 ・身の回りのものの扱いが乱暴。 ・生活体験の差が大きく、生きる力の基礎も異なる。 ・子育てが学校任せのところが多く、子どもとのかかわりも薄く感じられる。 	<p>家庭の教育力の低下が叫ばれて久しい。それを嘆くだけではなく、解消していくことが必要なことである。家庭は、子どもの教育にとってもっとも基本となる場所である。家庭での生活体験や生活技術の豊かさの中で、子どもの成長はより</p>

- ・地域探検など、子どもだけでは危険。保護者に何回も頼みにくい。
- ・保護者の理解を得ることが困難なこともある。
- ・活動後に、保護者に喜びやその子のがんばりを伝える余裕があればと思う。
- ・地域にあった指導計画を作り、保護者に協力を呼びかけていく。

生活舞台としての地域の活用

- ・地域生活に深く結びついた生活科を中核に考えて、地域の特色ある作物の栽培や地域の文化の継承者とのかかわりを大切にしてきた。
- ・地域を知るには、周りの理解を得ることが課題である。
- ・地域を中心とした活動では、事前の準備や調査が大変で、時間が足りない。
- ・地域へ出かける活動が安全面からできないことが多い。

学習活動

- ・動植物の飼育栽培について、地域の格差や一人一人の個人差が大きい。
- ・住宅街にあり、自然とふれあうことができない。
- ・収穫の時期が夏休みと重なってしまい、残念だった。
- ・学級園等が狭く、作物を育てるのに困る。
- ・動植物の飼育栽培は2年間継続するのがよい。
- ・都会では、バリエーションにかけ、不自由を感じる。
- ・各自の思いや願いをもって野菜作りに夢中になったが、収穫祭にもっていくには、場所の制約もあり、これからどうすればよいか考えている。
- ・学校周辺の環境では観察がしにくく、教室でチョウの観察などを取り入れている。

促される。

子どもの成長を保護者に伝え、互いに喜び合い、指導計画の作成についても必要に応じて保護者との連携を図り、趣旨を十分に納得してもらった上で協力を仰ぐなどの努力は、生活科を指導する上で欠かすことのできないことである。そのことが、開かれた学校運営や家庭・地域との連携を推進するための有効な手だてとなると考えられる。

生活科の学習では、地域を大切にしている。記述内容にも、それへの関心の高さがうかがえる。地域で学ぶ生活科にあっては、指導者自身が十分に地域の特性を理解し、地域を活用した活動を充実させることが大切である。そのために地域理解のための実地踏査は欠かすことができない。

また、それぞれの学校で生活科マップや人材リストの作成は不可欠である。さらに、作っただけではなく、年ごとの変化を書き加えていくことが必要である。

動・植物の飼育栽培は、地域によって様々な制約があることがうかがえる。その大きな要因として、地域環境や気候、そして、土地の活用等問題がある。

このような問題があるにもかかわらず動・植物の飼育、栽培に関しては、子どもたちにとって大切な活動であるとの意識が強い。継続活動としての意義、そして生きているものを大切にする意識を形成するためにも、この活動のさらなる充実を期待したい。また、継続することによって、子どもたちの観察力の育成や自然にかかわる態度と関心を高めていくことが期待される。

地域による環境の違いは、いかんともしがたいものである。それを踏まえた上で、それぞれの学校で最適な飼育教材、

- ・学校によっては、すでに飼育するものが決められていて、工夫の余地がない。
- ・動物・植物教材の選択が難しい。
- ・野菜を育てる活動は、子どもがいろいろな発見をして有意義である。
- ・野菜を育てる活動で、子どもたちが生き生きと活動し、興味をもった。

- ・製作活動では、時間数が不足してしまう。
- ・材料集めが大変で、準備ができにくい。
- ・工夫してものを作り上げることは、子どもたちは好んで、熱心に活動する。

- ・活動がパターン化していることに問題がある。
- ・地域を中心とした活動では、事前の準備や調査が大変で時間が足りない。
- ・週3時間では短く、意識がとぎれる。
- ・保育園・幼稚園でも同じような活動をしていて、子どもが新鮮さを感じていない。
- ・やりたいことがあっても、学校の物理的な実態などからできにくいものがある。
- ・子どもの思いや願いを生かすきっかけ作りが重要である。
- ・子どもが課題をもつことが重要である。
- ・乗り物の利用、家の仕事、買い物などは家庭に任せるのがよい。
- ・知識・理解内容は、活動上必要なものに限る。
- ・健康・安全にかかわる指導は、学級活動や道徳の時間を中心に行うのがよい。
- ・指導内容は、2学年合同がよい。
- ・子どもと一緒に活動できる。
- ・地域の特性や季節の移り変わりを大切にしたい活動や環境作りに心がけている。

栽培教材を見いだしていく努力をこれからも継続していくことが必要である。

製作活動など、子どもたちは自分の創意を生かした活動をすることには熱心である。そのための教師の準備等は時間もかかり、大変でもある。しかし、それをしてこそ、子どもたちの活動は活性化し、自分なりの思いを十分に発揮することができるのである。「考える力」の育成が「生きる力」の基本であるが、このことに大きくかかわっているのが生活科の学習なのである。

生活科学習は、教師自身の思いを中心とした指導が行われている様子が見られる。一方、子どもを中心に据えた指導が十分に行われていないということが問題である。

生活科の学習活動を指導していく時、児童の実態を中心に、学校や地域の実態を踏まえながらどのような活動が子どもたちにとって必要か、という観点で設定していくことが何より重要である。幼稚園や保育園の活動の様子を十分に把握すること、また、学校と家庭との連携を図ることなどが生活科の充実に必要であることが分かる。

生活科の学習を進めていくなかで何より必要なことは、各担任が2年間の生活科の学習を見通した上で、子どもたちの実態に応じた活動を計画し、実践していくことである。地域や家庭との連携を図りながら、また、季節や人とのかかわりを充実させることができるようにするための活動を構成することが低学年の担任

学習評価について	<ul style="list-style-type: none"> • 学校での活動が地域・家庭と関連するようになった。 • 村での祭りに関連付けた活動ができる。 • 学習の評価が難しい。 • 生活科に評価が必要か疑問である。 • 評価があいまいである。客観的でない。 • 一人の目で見極めることが難しい。 • 簡単に書ける自己評価カードを工夫する必要がある。 • 子ども観・評価観を変えていくことが重要である。 	<p>にとって必要な指導技術であると言える。</p> <p>生活科の評価の難しさが読み取れる。新しい評価の在り方が、教師全体に十分に理解されていないことが感じられる。評価という言葉が、結果の評価という今までの評価観にとらわれているのではないだろうか。</p> <p>一方、評価が生活科の指導に生かされてきている方向も見られる。このような評価観を今後、どのように広げていくことができるのかが、生活科の指導の場面で問われていくのではないかと考える。</p>
教材について	<ul style="list-style-type: none"> • 準備が大変である。 • 何をやってよいか困ってしまうことがある。 • 適切な環境や教材がそろわない。 • 子どもたちの生活の中から教材として有効なものを考えていくことが大切である。 • 子どもが積極的に対象とかかわる環境づくり、整備が必要である。 • 地域に自然や教材がない。 	<p>生活科の学習では、活動に必要な学習の準備が大変であるが、それをすることで子どもたちの活動が充実する。しかし、適切な教材が学校や地域の素材からそろえきれないことも多い。</p> <p>このような状況のなかで、まず、学校体制としての取り組みが大切である。多くの教師の知恵と足が教材化には欠かせないからである。その上で、継続して教材化することができるように教材化のための環境を整備することが必要である。生活科の教材は、子どもたちの実際の生活に根ざしていることが重要である。学校にとどまらず、地域にも広く目を向け、教材開発を進めていくことができるようにしなければならない。それとともに、子どもたちや地域の変化を的確に捉えそれに応じて教材化を工夫し、改善していくことが肝要である。</p>
教科書の使用について	<ul style="list-style-type: none"> • 教科書にしばられることがある。 • 書いてあることが理解できるようなるべく実物を見せている。 • 教科書をもっと資料的なものにした方がよい。 	<p>教科書を教師が進んで活用している様子は感じられない。生活科では、具体的な活動や体験を重視するということが教師の意識にあるからだろう。</p> <p>そこで、教科書をもとに子どもたちの</p>

校内の学習環境について

- ・生活科のための空き教室がなく、十分な活動ができない。
- ・子どもたちにいろいろな体験をさせるためには、もっと時間的な余裕が欲しい。また、教材、教具についてもいつでも使用しやすいように生活科専用の教室を確保することが望ましい。

生活科の指導体制について

- ・生活科が学校教育の教科として存在価値があるか疑問である。
- ・管理職の考え次第で生活科の実践は大きく変わってしまう。
- ・ある年代の教師が、生活科へのもっとも強いブレーキになっていることを実感する。
- ・生活科に対しての教師間の共通理解が不足している。
- ・地域に出たり、乗り物に乗ったりするときに安全確保に不安がある。成長にしたがってできるようになることをなぜ学校で取り組むのだろうか。
- ・社会科・理科の指導に偏ってしまうことが多いように思われる。
- ・教えることが中心になってしまった意識の教師が多い。また、何をしたらいいかわからないという教師も少なくない。
- ・支援などの言葉に振り回されている場合もあるようだ。
- ・教師間の経験の差が広がったことに問題がある。

活動や体験を広げることができるようなものにするのが、一つの方法である。子どもたちの経験の広がりが少ない現状を踏まえ、それを教科書で補っていくことが有効であると考える。

生活科の学習では、学習環境が子どもたちの活動に大きな影響を及ぼす。校内であっても、狭いスペースでの活動を余儀なくされている場合も多い。このような状態で、自由な子どもたちの発想を生かした活動を展開していくには無理が生じてしまう。

校内での環境整備には、万全を期することが大切である。生活科の整備やオープンスペースの活用など、生活科を中心とした活動スペースを低学年に供与できるような校内体制をとることが、子どもたちの発達のためにも重要である。

生活科に対する取り組みについて、学校での基本姿勢の不十分さが、まず見られる。今回の指導要領の実施からすでに6年がたっているが、その間に、生活科新設の経緯の理解をはじめ指導観・子ども観の変革がなされていなかったことがうかがえる。さらに、生活科の指導から培われた児童の変容を十分に広げることができたか、といった問題点も感じられる。生活科の趣旨の徹底と、その啓発は、今後もさらに必要である。

一方では、具体的な指導や生活科のあり方についても言及している意見も多い。これは、実際の指導の中で、子どもたちの指導をどのようにしていけばいいのかを、具体的に悩んでいる教師も多いことを示している。生活科に関する地区の研究会等のあり方や、年度の代わりなどで担当が大幅に変わってしまうことも多い。継続した研究がなかなか進められない状況にあるところが多い。生活科の指導実

- ・生活科の原点に立ち戻ることが大切である。
- ・校外外について知らないうちに生活科をするのは難しいと思う。
- ・生活科を柔軟に指導していくためには、やはり周囲の理解が大きな力である。
- ・校内での話し合い、意見交換の場がもっとあったらと思う。
- ・子ども主体に考えていても時間がかかり、教師がお膳立てしてしまうことも多かった。
- ・個に応じた自由な活動ができる時間等も大切である。
- ・生活科を中心に低学年教育全体を見直すようになった。
- ・体験を中心とした活動、友達に認めてもらったり、自分なりに工夫し、表現したりすることは、すばらしい。

践について、より具体的な情報を公開していくことが、これからは大切であると考ええる。

生活科が低学年だけの教科であるため校内で直接指導した経験のない教師が多いことも校内体制を整備する難しさの一因であろう。活動や体験を重視することは、これからの学校教育の重要課題である。生活科の学習がその基盤になっていることを考え合わせ、全ての教師が生活科を理解するとともに、生活科の指導経験をもつようにすることが学校教育そのものを転換させていく鍵であろう。

以上の自由記述を通して、次のようなことが言える。

1. 生活科の指導の問題点

(1) 教師の問題

パターン化、マンネリ化 社会科・理科に偏る
具体的な子ども像の共通理解不足

共通理解の不足
知育偏重の名残り

(2) 学校体制の問題

生活科の意義についての共通理解の不足

具体的な活動への協力体制

(3) 地域や環境の問題

生活科の学習に必要な環境整備の不足

地域の理解のための啓発の不足

2. 生活科の活動や内容、教材について

時間的制約と時間の確保
安全の確保

実態の調査不足

3. 家庭や地域との連携

(1) 家庭との連携

基本的な生活習慣等のしつけ
児童の変容に対する理解

保護者の協力体制

(2) 地域との連携

安全の確保と活動環境の設定
地域への生活科の啓発

地域の人材活用
地域との協力関係作り

(3) 環境の活用の必要性

活動の多様化 実態に応じた活動
活動の生活化

安全の確保

このような実態のなかで、生活科の学習を十分に成立させ、子ども一人一人の自立の基礎を培うためには、次のような観点からの方策が必要であると考える。

◎ 教師一人一人を含めた学校全体の生活科に対する理解の徹底

生活科の学習指導要領が公にされて久しい。また、それを骨子とした学習指導要領が交付されてすでに6年がたつ。このような状況のなかで、新しい授業観、子ども観に立った指導が十分に行われていないという結果も見られた。

このような実態に直面し、学校管理職が生活科の趣旨徹底や新しい学力観や授業観に立つ学習活動・学習展開に対して努力していくことが何よりも重要であることが分かる。管理職のリーダーシップのもと、全教職員の意識を変革していくことで、より確実な生活科の実践が学校として成立すると考える。

◎ 児童や生活環境の実態に応じた教材開発・選択

生活科の学習で、何よりも大切なことは、子どもやその生活環境、実態に応じた適切な教材選択である。しかし、現実には、教科書、他の地域での実践事例、旧来の社会科・理科の指導などから教材が選択されていたり、教師主導での教材選択であったりすることが多く見られる。

このような実態に鑑み、より子どもの側に立った教材選択・開発が望まれる。そのためには、教材である子どもの生活実態や地域環境の把握などにもっと時間が割けるように配慮することも必要である。それとともに、地域の人材や保護者との連携を深め、子どもの生活実態の把握と教材化可能な素材を見いだすことができるようにしていかなければならない。また、地域人材の発掘や活用のための人材マップ、さらに生活科マップの作成等、課題も多い。

◎ 地域や家庭との連携を図ることの重要性

学校教育だけではなく家庭や地域での教育などが、子どもの発達に大きな意味をもっている。学校教育を効果的に進めるためには、家庭や地域の協力は欠かすことができない。そこで、子どもたちの実際の生活をベースにして、家庭や地域と学校が共通の目標をもち、役割分担を明確にするとともに、綿密な連携と協力が必要である。

学校が、家庭や地域における教育のあり方を正しく捉え、その方向を示すとともに、学校教育の中に家庭や地域を巻き込んだ活動を取り入れることで、活動の生活化を推進していくことも必要である。

6. 教師の意識のまとめ

(1) 自立の基礎の育成を重視した生活科の取り組み

生活科の指導をする教師は、自立の基礎を意識した指導を実践している人が多い。しかし、具体的な子ども像や育てたい資質や能力、また、そのための具体的な指導のあり方などについては、十分意識されていない現状も見られた。

生活科でいう自立の基礎については、生活科指導書に明記されている。しかし、「仲間意識や帰属意識」「基本的な生活習慣」などの領域については、指導者の意識としては薄い傾向が見られた。

最近の児童は、集団内での仲間意識、集団や地域への帰属意識の低下が指摘されている。また、家庭の教育力の低下が取り沙汰されているが、基本的な生活習慣が十分に身に付いていない子どもが多く見られる。このような状況を考えても、生活科の指導では、自立にかかわる子ども像を明確にして、指導に当たることが大切である。

そのために、次のような研修や具体的な指導法の改善が必要である。

- ・ 児童の実態把握とそれを踏まえた自立への基礎へとつながる資質や能力の見取り方
- ・ 自立の基礎を培うための自己評価の具体的なあり方
- ・ 集団の活動や子ども同士や多様な人とのかかわりを通して学ぶ場を取り入れた指導法の改善
- ・ 新しい学力観の具現化のための具体的な方策
- ・ 教材選択のための情報収集と子どもの側に立った教材選択

(2) 家庭や地域との連携

生活科の学習活動で、地域との交流を深める活動を取り入れるよう努力していることが分かる。また、家庭での生活の中に生活科の学習を生かそうとしている傾向も見られる。しかし、安全面の確保といった観点から学校外での活動が制限されていることも現実である。また、教師が見取っている生活科の学習の中で育った子どもの姿が、家庭ではとらえられていないことが多い。むしろ生活科そのものについて、保護者に十分な理解がえられていないと言えよう。

家庭や地域との連携・協力を最も取り入れなければならない生活科にあって、その隘路になっている要因は、学校や教師に問題のある場合もあるが、家庭や地域が原因となっていることも考えられる。そこで、低学年の生活科の学習での子どもたちの学ぶ姿を通して、地域や家庭の啓蒙を図り、子ども立ちの生活科学習のより充実した推進ができるように積極的に働きかけたいものである。

そのために、次のようなことを家庭や地域との連携上の課題として実践することが重要であると考えらる。

- ・ 子どもの自立といった観点からの家庭教育を見直し、具現化を図ることができるよう支援する。
- ・ 子どもの自立という観点から、家庭で指導すべきことを保護者に意識付け、協力して指導できるようにする。
- ・ 学習の成果の生活化が家庭でも図れる教材を数多く例示し、それを生活の中に生かすことができるよう働きかける。(指導資料等)
- ・ 生活科の実践を保護者に公開し、子どもの変容などについて連絡する。
- ・ 地域等での活動の例示を多く紹介する。(指導資料等)
- ・ 生活科の活動を地域の方に紹介し、協力を仰ぐ。
- ・ 学校として地域の幼稚園・保育園、商店街、町会、老人会、公民館、図書館、児童館等、生活科の活動で必要な諸機関との連携を図る。
- ・ 地域との関連を図りながら、子どもが安全に活動できるような環境作りを推進することを要請する。

(3) 教師のアンケートから見たこれからの生活科のあり方

生活科が前面実施されて、すでに6年が経つ。この間、生活科の学習指導のあり方について、様々な研究がされてきている。その結果、一人一人の自立の基礎を培うための具体的な指導や評価・支援のあり方についても、大きな成果を挙げてきていると言えよう。しかし、すでに指導の画一化、マンネリ化が見られ、子どもたちにとって必要な活動が十分に計画・実践されていないといった事例も見られる。さらに、低学年の担任を経験していない教師が多い、活動を十分に理解してくれない教師がいるなど、学校体制としての問題点も多く抱えている。

学校週5日制の完全実施が2002年に前倒しされ、家庭や地域の教育力の向上が今以上に求められている。一方、次回の学習指導要領では、3年生以上に「総合的な学習の時間」が設定されること

になった。低学年の生活科の学習は、これらの教育改革の延長線上にあり、これからの学校教育のあり方に、大きな影響を与えるものである。

子どもたちにとっての様々な体験は、体験そのものに価値がある。社会や環境の変化は、子どもたちの意識や生活・行動にも大きな変化をもたらしてきている。そこで、生活科新設の原点に立ち返り、多様な体験を意図的にできるような生活科の学習の再構築が必要である。そして何より、このような体験の積み重ねが子どもたちの自立を助け、子ども自身の心を豊かにし、今日の子どもの発達課題の解決に寄り添うことになるのである。生活科の学習は、まさしく、心の教育なのである。

生活科の趣旨は、自立の基礎を培うことにある。自立とは、生活面でも学習面でも、また、精神的にも一人立ちすることである。すなわち、よき生活者として、自らの生活を律する能力や態度を身に付けていくことである。そのためには、学校での組織的、計画的な学習に合わせて、家庭や地域社会の中での生活体験・社会体験、自然体験を豊富に積み重ねることが大切である。

その生活科が、画一的な指導計画に基づいて行われたのでは、その効果はあまり期待できない。子どもの実態を教師がとらえ、その上で年間指導計画を立て、実践していくことが最も有効である。そのためには、教師一人一人の計画力、実践力、そしてその基礎となる児童理解等、教師としての資質向上が不可欠となる。

今後、生活科が教科としての市民権を確立していくためには、教師の現職研修は、これまで以上に重要なものになる。それとともに、子どもたちの自立を助けることができるような多様な活動を例示し、それを教師が実態に応じて選択して提示することができるような、学習情報センターのようなものを作ることも有効な方策である。さらに、地域や家庭と学校とが密接に連携を取り、互いに効果的に教育を進めることができるようにするための専門の機関、あるいは専任の担当者等を置くことなども、一方策として考えていく必要がある。

生活科が、これからの教育を方向付けていくことは間違いないことである。その方向をこれからの生活科の実践のなかで見失わないよう心がけていかなければならない。何にもまして、まず子どもたち誰もが楽しく学習できる生活科でなければならない。そして、自分自身の成長を楽しく感じることができるような子どもを育てる生活科にしていくことが必要である。

VI 資 料

アンケート用紙

年長幼児(5・6歳)生活実態調査アンケート(保護者用)

★ お子さんについてお聞かせ下さい。

- (1) お子さんの性別は 男 () 女 ()
 (2) 一緒にすんでいる家族の人数は(お子さんから見で)
 父 () 母 () 祖父 () 祖母 () 兄 () 姉 () 弟 () 妹 ()
 伯父 () 叔母 () その他 () 計 () 人
 (3) お子さんは何番目(第何子)ですか。 () 番目
 (4) お子さんを育てる上で大切にしていることは何ですか。

(5) 小学校で「生活科」の授業があることを知っていますか。

ア. () 知っている イ. () 知らない

★ あなたの年代をお聞かせ下さい。

ア. () 20代 イ. () 30代 ウ. () 40代

★ あなたの居住地域は、次のどれに当てはまりますか。

ア. () 大都市 イ. () 中都市 ウ. () 小都市
 エ. () 農村 オ. () 山村

☆ 次の質問にお答え下さい。該当するものの番号を□にご記入下さい。

1. お子さんは、朝1人で起きますか。
 ア. いつも1人で起きる イ. ときどき起こす
 ウ. いつも起こす
2. お子さんは、1人で洗面・歯磨きをしていますか。
 ア. 言われなくても自分でする イ. 促されるとする
 ウ. 大人が手伝うとする
3. お子さんは、1人で登園の支度や降園後の始末をしていますか。
 ア. 言われなくても自分でする イ. 大人に促されるとする
 ウ. 大人が手伝うとする
4. お子さんは、遊んだ後の片付けを自分でしていますか。
 ア. 言われなくても自分でする イ. 大人に促されるとする
 ウ. 大人が手伝うとする
5. お子さんは、1人で食事ができますか。
 ア. ほとんど自分でできる イ. 促されるとできる
 ウ. 手伝うとできる

※ 1. 2. 3. 4. 5. で、お子さんが1人でしないときどうしますか。

- ア. 自分でできるように声をかけたり、手伝ったりする
 イ. 自分でするまで待つ ウ. 大人がやってあげる
 エ. 何もしていない

6. 家の中の遊びについてお尋ねします。

- ① お子さんは、1人で夢中になって遊ぶことがありますか。
 ア. ある イ. ない ウ. ときどきはあ

※ 家の中で夢中になって遊ぶのは、どんな遊びですか。

② 兄弟姉妹との遊びは、どうですか。

- ア. よく遊んでいる イ. ときどき遊んでいる
 ウ. あまり遊んでいない エ. ほとんど遊んでいない

7. 外での遊びについてお尋ねします。

- ① 友だちとは遊んでいますか。
 ア. よく遊ぶ イ. ときどき遊ぶ
 ウ. あまり遊ばない エ. ほとんど遊ばない

② 友だちと遊ぶ時間はどのくらいですか。

- ア. 30分ぐらい イ. 1時間ぐらい
 ウ. 1時間以上 エ. 2時間以上

③ 遊ぶときは、だいたい何人ぐらいの友だちと遊んでいますか。

- ア. 1人 イ. 2～3人 ウ. 4人以上

④ お子さんは、兄弟姉妹以外の大きい子と遊ぶことがありますか。

- ア. よくある イ. ときどきある ウ. ほとんどない

8. 近くの公園や児童遊園・広場などについてお尋ねします。

- ① あなたの近くには、公園や児童遊園・広場など子どもの遊び場がありますか。
 ア. ある方だと思う イ. あまり十分とは言えない
 ウ. ほとんどない

② 近くの公園や児童遊園・広場などで遊んでいますか。

- ア. よく遊んでいる イ. ときどき遊んでいる
 ウ. ほとんど遊ばない

9. テレビやビデオについてお尋ねします。

① テレビやビデオは、1日どれくらい見えていますか。

ア. ほとんど見ない

イ. 1時間未満

ウ. 1時間以上2時間未満

エ. 2時間以上3時間未満

オ. 3時間以上4時間未満

カ. 4時間以上

朝		昼		晩	
合計			時間		

② お子さんが、好きな番組がありますか。

ア. ある——どんな番組ですか

イ. ない

好きな番組・3つ以内

テレビ	
ビデオ	

③ テレビゲーム機などのゲーム機で遊んでいますか。

ア. 遊んでいる

イ. ときどき遊んでいる

ウ. 遊ばない

--

※ 遊ぶときは、どれくらい時間遊んでいますか。

ア. 1時間以内

イ. 2時間くらい

ウ. 3時間以上

--

10. 屋外で体を使って遊ぶことが好きですか。

ア. とても好き

イ. 好き

ウ. あまり好きでない

エ. 嫌い

--

11. 絵本や童話などについてお尋ねします。

① 絵本や童話、図鑑などを1人で見ていることがありますか。

ア. よく見ている

イ. ときどき見ている

ウ. あまり見えない

--

② お子さんは、どんな種類の本が好きですか。次の中から3つ以内で

選んで下さい。

ア. 絵本

イ. 童話

ウ. 図鑑

エ. まんが

オ. 学習雑誌

カ. 子ども雑誌

キ. その他

その他				

③ 絵本や童話などを読んであげていますか。

ア. よく読んであげている

イ. ときどき読んであげている

ウ. ほとんど読んであげていない

--

--

12. 紙や空き箱などで、作って遊ぶことが好きですか。

ア. よく作って遊ぶ

イ. ときどき作って遊ぶ

ウ. ほとんど作って遊ぶことはしない

--

13. 歌ったり、楽器を弾いたり、踊ったりすることが好きですか。

ア. とても好き

イ. 好き

ウ. あまり好きでない

エ. 嫌い

14. 生きものの飼育についてお聞きます。

① 草花を見たり育てたりすることが好きですか。

ア. とても好き

イ. 好き

ウ. あまり好きでない

エ. 嫌い

--	--	--

※ 主にどんな草花を育てていますか。

② 犬や猫、小鳥などを飼って、見たり世話をしたりすることが好きですか。

ア. とても好き

イ. 好き

ウ. あまり好きでない

エ. 嫌い

--	--	--

※ どんな小動物を飼っていますか

③ 生きものの飼育・栽培は、どこでやっていますか。

※ 草花の場合

ア. 庭

イ. 鉢やプランター

ウ. 空き地

--	--

※ 小動物の場合

ア. 家の外

イ. 家の中

--

15. 木の葉、木の実、草花などで遊ぶことがありますか。

ア. よく遊ぶ

イ. ときどき遊ぶ

ウ. あまり遊ばない

エ. ほとんど遊ばない

--

16. お子さんは、「おはよう」「ただいま」「おやすみなさい」などの挨拶ができますか。

- ア. 自分からできる
- イ. 促されるとできる
- ウ. できるときとできないときがある
- エ. まだ自分からはできない

17. 何かしてほしいとき、自分に必要なことが言えますか。

- ア. 言える
- イ. だいたい言える
- ウ. あまり言えない
- エ. 言えない

18. お子さんは、見たり聞いたりしたことなど、あったことを話しますか。

- ア. よく話す
- イ. 話す
- ウ. ときどき話す
- エ. あまり話さない

※ どんなことの話が多いですか。

19. お子さんは、きれいなものや美しいものなどを見たとき、話をしますか。

- ア. よく話す
- イ. 話す
- ウ. ときどき話す
- エ. あまり話さない

※ どんなものを見たときが多いですか。

20. 不思議に思ったことや分からないことなどを家の人などに聞きますか。

- ア. よく聞く
- イ. 聞く
- ウ. あまり聞かない
- エ. ほとんど聞かない

21. 家の人や友達などと会話をしますか。

- ア. よくする
- イ. する
- ウ. あまりしない
- エ. ほとんどしない

22. 短い時間、家で1人で留守番ができますか。

- ア. できる
- イ. できない

23. 近所のお店や隣の家などへ簡単な使いができますか。

- ア. できる
- イ. できない

24. 家でお手伝いをすることがありますか。

- ア. いつもする
- イ. ときどきする
- ウ. しない

25. 信号や横断歩道など、交通ルールを守っていますか。

- ア. よく守っている
- イ. だいたい守っている
- ウ. あまり守っていない
- エ. ほとんど守っていない

26. 初めてのことや珍しいことに興味を持って何でもやってみようとしていますか。

- ア. やろうとしている
- イ. ときどきやろうとする
- ウ. ほとんどやろうとしない

27. 困ったことに会ったとき、どうしていますか。

- ア. 自分で何とかしようと頑張る
- イ. 自分でやってみてから助けを求める
- ウ. はじめから大人に助けを求める
- エ. 何もしない

28. おもちゃやなど、ほしいものを我慢することができませんか。

- ア. 我慢できる
- イ. ときどき我慢できる
- ウ. あまり我慢できない
- エ. ほとんど我慢できない

29. してはいけないことをしたときのことについてお尋ねします。

① 謝ることができませんか。

- ア. 謝れる
- イ. だいたい謝れる
- ウ. あまり謝れない
- エ. ほとんど謝れない

② してはいけないことをしたとき、どうしていますか。

- ア. 厳しく注意している
- イ. わけをよく話してあげている
- ウ. あまり注意しない

30. 自分より小さい子に、親切に接することができますか。

- ア. できる
- イ. だいたいできる
- ウ. あまりできない
- エ. ほとんどできない

小学校低学年生活実態調査アンケート(保護者用)

★ お子さんについてお聞かせ下さい。

- (1) お子さんの性別と学年は ア. () 男 イ. () 女 ウ. 学年 ()
 (2) 一緒に住んでいる家族の人数は () 人
 父 () 母 () 祖父 () 祖母 () 兄弟姉妹 ()
 伯父 () 叔母 () その他 ()
 (3) お子さんは何番目 (第何子) ですか。 () 番目
 (4) お子さんを育てる上で大切にしていることは何ですか。

★ あなたの年代をお聞かせ下さい。

- ア. () 20代 イ. () 30代 ウ. () 40代 エ. () 50代
 ★ あなたの居住地域は、次のどれに当たりますか。
 ア. 大都市 () イ. 中都市 () ウ. 小都市 ()
 エ. 農村 () オ. 山村 () カ. 漁村 ()

☆ お子さんの今の状況について、次の質問にお答え下さい。
 該当するものの記号を□にご記入下さい。

1. 近所の人に挨拶や返事ができますか。
 ア. できる イ. だいたいできる
 ウ. あまりできない エ. ほとんどできない
2. 自分で使ったものの後片付けはできますか。
 ア. できる イ. だいたいできる
 ウ. あまりできない エ. ほとんどできない
3. 家事のいくつかを責任をもってやっていますか。
 ア. やっている イ. だいたいやっている
 ウ. あまりやっていない エ. ほとんどやっていない
4. マナーを守って児童館や公園を利用できますか。
 ア. できる イ. だいたいできる
 ウ. あまりできない エ. ほとんどできない
5. 必要な文房具などを自分で買いに行くことができますか。
 ア. できる イ. だいたいできる
 ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

6. 道を歩くとき、交通ルールを守っていますか。
 ア. よく守っている イ. だいたい守っている
 ウ. あまり守っていない エ. ほとんど守っていない
7. 自分で電話をして、必要なことを伝えたり聞いたりすることができますか。
 ア. できる イ. だいたいできる
 ウ. あまりできない エ. ほとんどできない
8. 自分の言いたいことや必要なことをきちんと表現していますか。
 ア. よく表現している イ. だいたい表現している
 ウ. あまり表現していない エ. ほとんど表現していない
9. 自分の住む地域の行事や催しものに参加していますか。
 ア. よく参加している イ. だいたい参加している
 ウ. あまり参加していない エ. ほとんど参加していない
10. 1人で電車やバスを利用して近くの目的地向くことができますか。
 ア. 行ける イ. だいたい行ける
 ウ. あまり行けない エ. ほとんど行けない
11. 身近な草花や草木、小動物などを大切にしていますか。
 ア. 大切にしている イ. だいたい大切にしている
 ウ. あまり大切にしていない エ. ほとんど大切にしていない
12. 身近にあるお店や近所の人に、自分から声をかけることがありますか。
 ア. よく声をかけている イ. だいたい声をかけている
 ウ. あまり声をかけていない エ. ほとんど声をかけていない
13. 自分から遊びや生活に使うものを作ることができますか。
 ア. よく作っている イ. ときどき作っている
 ウ. あまり作ることはない エ. ほとんど作ることはない
14. 分からないことや疑問に思ったことがあるとき、自分で解決しようとして
 ますか。
 ア. よくする イ. ときどきする
 ウ. あまりしない エ. ほとんどしない
15. 教科書以外のいろいろな本を手にとって読んでいますか。
 ア. よく読んでいる イ. ときどき読んでいる
 ウ. あまり読んでいない エ. ほとんど読んでいない

◆「読んでいると答えた方にお聞きします。主にどんな本を読んでいますか。次の中から3つ以内で選んで下さい。

- ①絵本 ②童話 ③物語 ④学習書 ⑤図鑑
⑥アラモデル等の解説書 ⑦漫画 ⑧その他 ()

--	--	--	--

16. 宿題がなくても勉強する習慣が身に付いていますか。

- ア. 身に付いている イ. だいたい身に付いている
ウ. あまり身に付いていない エ. ほとんど身に付いていない

--	--

17. 疑問に思ったことや分からないことなどを、親に聞いたり話したりしていますか。

- ア. している イ. だいたいしている
ウ. あまりしていません エ. ほとんどしていません

--	--

18. 近くの図書館や児童館などを利用していますか

- ア. よく利用している イ. ときどき利用している
ウ. あまり利用していない エ. ほとんど利用していない

--	--

19. 興味や関心のあることに、夢中で取り組んでいますか。

- ア. 夢中で取り組んでいる
イ. だいたい夢中で取り組んでいる
ウ. 夢中で取り組めるとはいえない
エ. ほとんど夢中になれない

--	--

20. 学習に必要なものを自分から準備できますか。

- ア. できる イ. だいたいできる
ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

--	--

21. 困ったことに出会ったとき、どうしていますか。

- ア. 自分で何とかしようと努力している
イ. 自分でやってみてから助けを求める
ウ. はじめから助けを求める
エ. 何もしない

--	--

22. 自分のしたことを反省し、それを直そうと努力していますか。

- ア. 努力している イ. ときどきは努力している
ウ. あまり努力していない エ. ほとんど努力していない

--	--

23. 人や友だちに感わされなれで、自分の考えを持って行動していますか。

- ア. 行動できる イ. ときどきならでき
ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

--

24. 自分のことを主張するだけでなく、他人の意見や考えを受け入れることができますか。

- ア. できる イ. だいたいできる
ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

--

25. 自分のわがままを抑えて行動できますか。

- ア. できる イ. だいたいできる
ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

--

26. してよいことと、してはいけないことの判断ができますか。

- ア. できる イ. ときどきはできる
ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

--

27. 自分のいいところや得意なことに気付いていますか。

- ア. 気付いている イ. だいたい気付いている
ウ. あまり気付いていない エ. ほとんど気付いていない

--

28. 与えられた仕事は、責任をもってやることができますか。

- ア. できる イ. だいたいできる
ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

--

29. 自分より小さい子やお年寄りに親切にできますか。

- ア. できる イ. だいたいできる
ウ. あまりできない エ. ほとんどできない

--

30. 友だちやまわりの人の「よさ」を話しますか。

- ア. よく話す イ. だいたい話す
ウ. あまり話さない エ. ほとんど話さない

--

☆ 近ごろの子どもたちの行動について、どのように考えておられるかお尋ねいたします。次のことについて、自由にお書き下さい。

(1) 近ごろの子どもたちについて、このことはどうしても許せないということは、どんなことですか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

(2) 近ごろの子どもたちについて、このことはこれからもどんどん伸ばしてほしいとお考えのことは、どんなことですか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

☆ 小学校の低学年の「生活科」のことについて、お尋ねします。

1. お子さんは、生活科の授業のことを家で話しますか。

ア、よく話す イ、ときどき話す
ウ、あまり話さない エ、ほとんど話さない

2. お子さんは、学校の生活科で学んだことを家で生かしていますか。

ア、生かしている イ、ときどき生かしている
ウ、あまり生かしていない エ、ほとんど生かしていない

3. 生活科の教科書を見たことがありますか。

ア、よく見ている イ、ときどき見ている
ウ、あまり見ない エ、ほとんど見ない

4. 生活科で使う材料や道具は、だれが準備していますか。

ア、子どもが自分で準備している
イ、子どもと親と一緒に準備している
ウ、親が準備してやっている
エ、準備しているのはあまり見ない

5. 学校での生活科の授業を見たことがありますか。

ア、ある
イ、ない

6. 生活科では、以下のようなことを学習することがありますが、これは必要なことだと思いますか。

ア、どうしても必要 イ、まあまあ必要 ウ、あまり必要でない エ、全く必要でない
の中から、お考えに近いものを選んで下さい。

- ① 小動物の飼育 ② 植物の栽培 ③ 電車やバスの利用
④ 近所の店で買った物 ⑤ 簡単な料理 ⑥ 自分のくつ洗いや食器洗い

①	②	③
④	⑤	⑥

7. これからの生活科の学習にどのようなことを期待しますか。

次の中から3つ選んで□に記号をご記入下さい。

ア、基本的な生活習慣や生活技能の指導をしてほしい
イ、友だちや他人への思いやりや心が育つように指導してほしい
ウ、精神的な自立やたくましさや身に付けるように指導してほしい
エ、直接的な機会を多くし、やる気が育つように指導してほしい
オ、公共心や道徳心を養うように指導してほしい
カ、もっと知的な面を重視して指導してほしい

□	□	□
---	---	---

生活科についての教師用アンケート

★ あなたの状況についてお聞かせ下さい。当てはまる番号を□にお書き下さい。

- (1) あなたの勤務している地域は、次のどれに当てはまりますか。
 ①大都市 ②中都市 ③小都市 ④農村 ⑤山村 ⑥漁村
- (2) あなたの性別はどちらですか。
 ①男 ②女
- (3) あなたは、次のどの年代に当たりますか。
 ①20代 ②30代 ③40代 ④50代 ⑤60代
- (4) あなたの「生活科」の指導経験はどのくらいですか。
 ①1年 ②2年 ③3年 ④4年 ⑤5年以上

☆ 次の質問にお答え下さい。該当する番号を□にご記入下さい。

現在、低学年担当でない方は、過去の指導経験の中でお答え下さい。

1. あなたは、生活科の指導内容を選択するとき、下記のどれに重点をおいていますか。重点の度合いの順に3つ以内で選んで下さい。

- ①学習指導要領の内容から
 ②教科書にあるものから
 ③区市町村の指導計画にあるものから
 ④学校の指導計画にあるものから
 ⑤学校や身近な地域の素材から
 ⑥子どもの経験や体験をもとにしながら
 ⑦出版物や研究物から
 ⑧他校の研究の成果から

2. あなたは、生活科の指導で必要な教材の選択はどのようになっていますか。

下記の中から3つ以内で選んで下さい。

- ①学習指導要領の例示から
 ②教科書にあるものから
 ③区市町村の指導計画にあるものから
 ④学校の指導計画にあるものから
 ⑤学校や身近な地域にある素材から
 ⑥子どもの経験や体験をもとにしながら
 ⑦出版物や研究物から
 ⑧他校の実践者の事例や研究成果から

3. 学習に必要な材料は、主にどのようなようにしてそろえていますか。

- ①子どもに任せている
 ②教師が用意している
 ③家庭に依頼し、保護者にそろえてもらう
 ④教師も用意するが、子どもや保護者に任せることが多い
 ⑤子どもも用意するが、教師が用意することが多い

4. あなたの生活科の教科書の活用状況は、次のどれに当たりますか。

- ①教科書にそって指導している
 それは、どんな理由からですか。
 ②単元によって利用している
 ③ほとんど活用していない
 ④全く活用していない
 それはどんな理由からですか。
 ⑤. 教科書以外の指導計画があるから
 ⑥. 自分の指導計画を持っているから
 ⑦. 子どもや地域の実態に応じた指導が大切だから
 ⑧. 子どもに興味関心によって変わってくるから

5. 生活科の教科書を子どもたちは見えていますか。

- ①よく見ている
 ②ときどき見ている
 ③あまり見えていない
 ④ほとんど見えていない

6. あなたは、「作って遊ぶ」の単元を展開するとき、どんなものを作るかは、どのようにしていますか。

- ①子どもの好きなものを自由に作らせる
 ②教師がいくつか提示し、その中から選ばせる
 ③全員同じものを作らせる
 それはどんな理由からですか。
 ④. ほかの子どもと比較してその子なりの工夫が分かるから
 ⑤. 指導のポイントが徹底できるから
 ⑥. 材料をそろえるのに便利だから
 ⑦. 子どもたちが考えようとしなないから

7. あなたは、動物の飼育教材として子どもの学習に適する動物は、次のうちどれがよいと思いますか。3つ選んで下さい。

- ①ウサギ ②ハムスター ③ニワトリ ④アヒル
 ⑤ヤギ ⑥ザリガニ ⑦小魚 ⑧モルモット
 ⑨その他 ()

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
--------------------------	--------------------------	--------------------------

8. あなたは、植物の栽培教材として子どもの学習に適する植物は、次のうちどれがよいと思いますか。3つ選んで下さい。

- ①アサガオ ②ヒマワリ ③サツマイモ ④ダイコン類
 ⑤ミニトマト ⑥キユウリ ⑦ニンジン ⑧ジャガイモ
 ⑨ナス ⑩その他 ()

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
--------------------------	--------------------------	--------------------------

9. あなたは、生活科の学習で、次のような活動や体験はどの程度やっていますか。
 ア. よくやる イ. ときどきやる ウ. あまりやらない エ. ほとんどやらない
 の記号でお答え下さい。

- ①地域のひとのかかわりを深める活動
 ②地域の店や公共施設を訪ねる活動
 ③まちの中を探検する活動
 ④地域の公園や野原で遊ぶ活動
 ⑤自分たちが主になって動植物を育てる活動
 ⑥地域の行事等に参加する活動
 ⑦幼稚園や保育園等とかわる活動
 ⑧自分たちより年上の人たちとかわる活動
 ⑨乗り物を利用する活動
 ⑩いろいろなものを製作する活動
 ⑪手紙を書いたり、電話を使ったりする活動
 ⑫その他 ()

①	②	③
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
④	⑤	⑥
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑦	⑧	⑨
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑩	⑪	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

10. あなたは、文部省の出版物で取り上げられている次のような活動を、どのように考えていますか。ア. 適切である イ. 適切でない ウ. どちらとも言えない
 の記号でお答え下さい。

- ①自分の家での仕事を増やす活動
 ②乗り物に乗って〇〇に行く活動
 ③近所の店で買い物をする活動
 ④動植物を育てる活動
 ⑤「〇〇祭り」をする活動
 ⑥料理を作る活動
 ⑦健康・安全に関する活動

①	②	③	④
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	⑤	⑥	⑦
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

11. あなたは、生活科の目標である「自立の基礎を養う」をどの程度意識して指導していますか。

- ①いつも意識している ②ときどき意識している
 ③あまり意識していない ④ほとんど意識していない

<input type="checkbox"/>

12. あなたは、生活科の目標である「自立の基礎」はどんなこととお考えですか。次のうち、お考えにもっとも近いものを5つ選んで下さい。

- ①自分の考えや意見をはっきり言えるようになること
 ②自分の意志を人に伝えることができるようになること
 ③集団や社会の一員として集団生活ができるようになること
 ④仲間意識や帰属意識を持つようになること
 ⑤共に遊び、共に学んでよりよい生活ができるようになること
 ⑥日常生活に必要な習慣を身に付けること
 ⑦日常生活に必要な技能を身に付けること
 ⑧人の話を聞くことができるようになること
 ⑨自然や社会に積極的にいかかわる意欲や関心を持つようになること
 ⑩活発に体を動かす、心を動かして物事に働きかけるようになること

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

13. あなたは、生活科の指導を通じて、子どもたちにどんな能力が培われたかと思っていますか。次のうち、5つを選んで□にご記入下さい。

- ①社会性 ②持続性 ③集中力 ④協調性 ⑤行動力
 ⑥自発性 ⑦企画力 ⑧選択力 ⑨思考力 ⑩判断力
 ⑪創造力 ⑫興味や関心 ⑬表現力 ⑭自制心
 ⑮生活や学習への意欲 ⑯その他 ()

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

14. あなたは、生活科の授業ではどんなことを大切にして指導していますか。次のうち、特に力を入れているもの5つを選んで□にご記入下さい。

- ①目あてを持って取り組むようにしている
 ②表現活動を取り入れるようにしている
 ③合科的な指導を心がけている
 ④学習時間を弾力的に扱っている
 ⑤子ども同士で「よさ」を認め合うようにしている
 ⑥その子らしさを発揮できるようにしている
 ⑦子どもの挑戦意欲を引き出すようにしている
 ⑧自分の考えや意見が言えるようにしている
 ⑨豊かな感性を育てるようにしている
 ⑩子どもの「よさ」を認め、自信を持たせるようにしている
 ⑪自分のことは自分でできるようにしている
 ⑫子どもの「できること」を増やすようにしている
 ⑬身近なものへの「かわり」を深めるようにしている
 ⑭自己評価ができるようにしている
 ⑮その他 ()

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

